特攻 報会

平成17年8月

第64号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090
ＦＡＸ　03(3432)5567

編集人　田中賢一
発行人　栗原　宏

靖国神社みたま祭雪洞に拾う
終戦六十周年に因むもの

騎兵第十四聯隊には三人の能筆家がいて、既に十数年に亙り雪洞を献納している。本年はどれも終戦六十年に因むものなので、本誌の冒頭に飾らせてもらう。

山中浩太郎

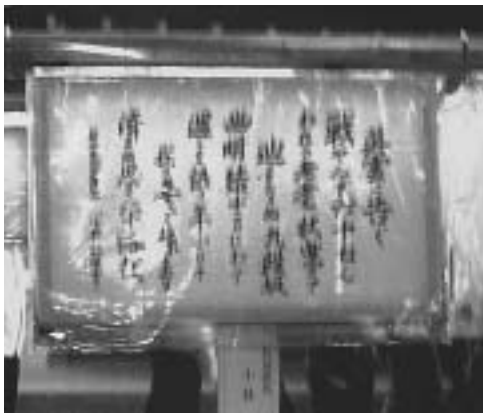
いくさやみ再びめぐるきのと酉
若き日散りし友を思ほゆ

老兵独語　小林雅男

烏兎匆匆の　としたけて
再びめぐる　きのととり
杖を頼りに　まかりこし
宮居の奥に　ほのみゆる
ともの姿は　在りしまま
てつの兜に　ひげのつら

英霊に告ぐ　小林　仁

戦いやんで　六十ねん
われら老耄　杖曳きて
辿りきたりぬ　九段坂
幽明結ぶ　このにわで
過しを語り　年ふりて
我ら妻子に　孫もあり
報ゆる術（すべ）の　何あらむ



目次

みたま祭の雪洞に拾う……1
終戦に因む御諚と詔勅……2
竹田恒徳殿の終戦秘話……4
占守島における戦車11聯隊の戦闘……8
樺太真岡電話局の九人の乙女……10
信義無き国ソ連……14
偃武還暦之賦……15
終戦に伴い自決した軍人軍属……15
第五飛行師団司令部飛行班の終戦……20
待機陸軍航空特攻隊……24
陸軍挺進部隊終戦時の態勢……27
終戦時の陸軍海上挺進戦隊……28
八丈島回天隊の終戦……30
多聞隊伊三六七潜水艦の終戦……33
基地回天隊出撃歴一覧……34
回天作戦出撃潜水艦リスト……35
未発に終った特攻烈作戦……36
未発に終った特攻剣作戦……38
（埋草）終戦六十年に懐う……19
終戦時外地残存軍人数……23・33
靖国神社を巡る雑音……41
靖国神社の起源と御祭神……41
小泉総理の靖国神社参拝問題……42
みたま祭の雪洞に拾う特攻隊……46
特攻勇士の像に副碑併設……47
南九州特攻三基地慰霊祭……48
八月十五日の靖国神社……50
沖縄慰霊の日……50
枕崎と鹿屋特攻隊追悼式参加……51
義烈空挺隊慰霊祭参加……52
事務局便り……53・45
世田谷特攻観音堂改修費……53

○終戦60周年に因みこの号を**終戦特集号**として16点を掲載したが、まだ該当する記事があるので次号まわしとする。

○慰霊祭等時期に拘るものはすべて掲載した。

○従来会員の投稿記事は優先して掲載したが、今回は前二項の記事で満配になってしまったので、次号まわしとする。投稿者は御了承願いたい。

昭和二十年八月十四日の御前会議における昭和天皇のお言葉（御諚）

「最後の御前会議」（白川一郎画、鈴木貫太郎記念館蔵）

御前会議に出席していた下村海南情報局総裁が、会議直後に心覚えのままメモをとり、左近司国務相、太田文相、米内海相の手記と照らし合わせ、鈴木首相の校閲をへて作成した御諚である。

外に別段意見の発言がなければ私の考えを述べる。

反対論の意見はそれぞれよく聞いたが、私の考えはこの前申したことに変わりはない。私は世界の現状と国内の事情とを十分検討した結果、これ以上戦争を続けることは無理だと考える。

国体問題についていろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文の文意を通じて、先方は相当好意を持っているものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があるというのも一応はもっともだが、私はそう疑いたくない。要は我が国民全体の信念と覚悟の問題であると思うから、この際先方の申入れを受諾してよろしいと考える、どうか皆もそう考えて貰いたい。

さらに陸海軍の将兵にとって武装の解除なり保障占領というようなことはまことに堪え難いことで、その心持は私にはよくわかる。しかし自分はいかになろうとも、万民の生命を助けたい。この上戦争を続けては結局我が邦がまったく焦土となり、万民にこれ以上苦悩を嘗めさせることは私としてじつに忍び難い。祖宗の霊にお応えできない。和平の手段によるとしても、素より先方の遣り方に全幅の信頼を措き難いのは当然であるが、日本がまったくなくなるという結果にくらべて少しでも種子が残りさえすればさらにまた復興という光明も考えられる。

私は明治天皇が涙をのんで思いきられたる三国干渉当時の御苦衷をしのび、この際耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、一致協力将来の回復に立ち直りたいと思う。今日まで戦場に在って陣歿し、或は殉職して非命に斃れた者、またその遺族を思うときは悲嘆に堪えぬ次第である。また、戦傷を負い戦災をこうむり、家業を失いたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。この際私としてなすべきことがあれば何でもいとはない。国民に呼びかけることがよければ私はいつでもマイクの前にも立つ。一般国民には今まで何も知らせずにいたのであるから、突然この決定を聞く場合動揺も甚しかろう。陸海軍将兵にはさらに動揺も大きいであろう。この気持ちをなだめることは相当困難なことであろうが、どうか私の心持をよく理解して陸海軍大臣はともに努力し、よく治まるようにして貰いたい。必要あらば自分が親しく説き諭してもかまわない。この際詔勅を出す必要もあろうから、政府はさっそくその起案をしてもらいたい。

以上は私の考えである

大東亜戰争終戰ノ詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歳ヲ閲シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク擧国一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

昭和二十年八月十四日

大東亜戰争終戰ニ際シ陸海軍人ニ賜ハリタル勅語

昭和二十年八月十七日

朕曩ニ米英ニ戰ヲ宣シテヨリ三年有八ヶ月ヲ閲ス　此間朕カ親愛ナル陸海軍人ハ瘴癘不毛ノ野ニ或ハ炎熱狂濤ノ海ニ身命ヲ挺シテ勇戰奮鬪セリ朕深ク之ヲ嘉ス

今ヤ新ニ蘇國ノ參戰ヲ見ルニ至リ内外諸般ノ状勢上今後ニ於ケル戰争ノ繼續ハ徒ニ禍害ヲ累加シ遂ニ帝國存立ノ根基ヲ失フノ虞ナキニシモアラサルヲ察シ帝國陸海軍ノ鬪魂尚烈々タルモノアルニ拘ラス光榮アル我國體護持ノ爲朕ハ爰ニ米英蘇竝ニ重慶ト和ヲ媾セントス

若シ夫レ鋒鏑ニ斃レ疫癘ニ死シタル幾多忠勇ナル將兵ニ對シテハ衷心ヨリ之ヲ悼ムト共ニ汝等軍人ノ誠忠遺烈ハ萬古國民ノ精髄タルヲ信ス

汝等軍人克ク朕カ意ヲ體シ鞏固ナル團結ヲ堅持シ出處進止ヲ嚴明ニシ千辛萬苦ニ克チ忍ヒ難キヲ忍ヒテ國家永年ノ礎ヲ遺サムコトヲ期セヨ

戰爭終結の大詔渙發さる

新爆彈の慘害に大御心

帝國四國宣言を受諾

畏し、萬世の爲太平を開く

必ず國威を恢弘

聖斷下る途は一つ

國の焦土化

竹田恒徳殿の語る 終戦秘話

田中　賢一

竹田宮恒徳王殿下は13年春陸大を卒業され、当時満州のハイラルに在った騎兵第十四聯隊の中隊長に補職された。同年6月騎兵集団に動員が下令され、北支に出動、殿下は第三中隊長として河南省の戦闘に参加され、その後第一軍の参謀として転任された。私は殿下が去られた後、14年9月に騎14に赴任し第三中隊付となった。

戦後聯隊会や中隊会などで、初めの頃は年に二回も同席させてもらうことがあった。その度毎に色々お話を承ったが、終戦の頃は第一総軍におられ、以下記述することも断片的に何回もお聞きした。ここに御著書「私の肖像画」から転記させてもらう。

終戦

御前会議

昭和二十年八月六日、広島に原爆投下、その三日後には長崎にも投下された。こうした情勢の中で、終戦の匂いが漂いはじめ、陸軍の統帥部では当然ながら深刻な議論が火花を散らしていた。

一方、われわれ皇族の間でも、二、三名ずつあちこちで会い、秘かに終戦にまつわる話合いが行なわれていた。

そのような深刻な日々が続いていたある日、急に天皇陛下のお召しにより、皇族男子全員が吹上御苑内の地下防空壕に集まった。陛下は緊張されたご様子で、ご心境を諄々と話され、「これ以上戦争を続けることは、国民をただ苦しませるだけである。ここで戦争を終わらせたい。どうか今後は日本の再建のために尽くしてもらいたい」というご趣旨のことを洩らされた。

われわれは「陛下のご英断に従い、国体護持に全力を尽くします」という趣旨のことを全員でお誓いした。これは終戦を決定された御前会議の前日であったかと記憶している。

そういう真に緊迫した情勢の中で、阿南陸軍大臣が二回、私に会われるだけの目的で第一総軍司令部に来られた。終戦のご裁断が下った御前会議の前後であったと記憶している。陸軍大臣が私に話しに来られる要件をなにも見出せないし、最も重要な地位にあって多忙を極めている大臣が、なぜわざわざ二度まで私を訪ねて来られたかは、まったく判らなかった。わずかな時間であったが、ただ重大な時局について話されただけで、それについての結論や希望などを述べられるというようなことはまったくなかった。しかし後で静かに当時を回想してみると、なにかを言いたげな様子であったことが気にかかる。進んで言いたいことがあったのか、私の心境を心配されたのかは判らないが。その陸軍大臣阿南惟幾大将が自刃されたのは終戦前夜、すなわち八月十四日夜のことであった。

八月十五日、とても暑い日であった。私は玉音放送を市ヶ谷の第一総軍司令部で拝聴した。数日後、第一総軍司令官、杉山元元帥も夫人ともども、従容として自決を遂げられた。

鎮撫のお使い

終戦の翌日、すなわち八月十六日に、突然天皇陛下からお召しがあった。仮宮殿（宮殿はすでに焼けていた）に参内すると朝香宮鳩彦王と閑院宮春仁王、そして東久邇宮稔彦王と控室でいっしょになった。なんのためにお召しになったのかは、誰にも解らなかった。やがて侍従武官の案内で東久邇宮を除く三人が陛下の御前に上がった。

陛下は、終戦の聖断を下されたご心境を話されたうえ、「まことにご苦労だが、すぐに各方面の派遣軍へ行って停戦のことを伝えてもらいたい。いままで戦ってきた軍隊が、急に矛を収めるのは、むずかしいことだろうと思うが、これ以上戦争を続けることは、不幸を増すばかりである。自分（陛下）の気持を第一線の将兵によく伝えてもらいたい」という主旨のお言葉があった。朝香宮は中国派遣軍、閑院宮は南方派遣軍、そして私は関東軍へ行けとのことである。その時一人だけ残された東久邇宮にはその直後に組閣の大命が下ったのだと後で聞いた。

その日の午後、総理大臣に就任されたばかりの東久邇の叔父さまから電話があって、組閣本部の赤坂離宮に呼ばれた。そこには東久邇総理と東郷外務大臣がいて「竹田さんは満州に行くそうだが、もしできたら溥儀満州国皇帝に会って、皇帝が希望されたならば、いっしょに日本へ連れて来てもらいたい」と言われ、さらに「もちろん、あなたの本来の任務は聖旨の伝達にあるのだから、無理をしてまでとの依頼ではないのだが」とつけ加えられた。私は「満州国皇帝はいまおそらく新京にはいないと思うので、連絡がとれるか

どうか判りませんが、できるだけやってみましょう」とお答えして別れた。

われわれの飛行機はすでに用意されており、翌十七日に発つことになったが、これはたいへん重大な使命を頂いたものだと思った。なにしろ私が満州に行っている間に、米軍が日本本土に進駐して来るかもしれないし、すでに侵入しているソ連軍のために現在の満州がどうなっているかも判らない。使命はなんとしても果たすが、生きてふたたび日本へ帰れるかどうか。最後のことも考えて、軍関係の書類などを一晩かかって庭で焼き、身辺の整理をした。

翌十七日、朝早く西平健太郎お付武官と大本営から特につけられた田中俊資参謀を伴い満州へ向けて飛び立ち、同日夕方、関東軍司令官以下多数の出迎えを受けて、新京（長春）飛行場に到着した。

すぐ司令部に行き、二階の広い軍司令官室いっぱいに集まった山田乙三軍司令官以下の幹部に対して聖旨を伝達した。それに対して山田軍司令官から「謹みて聖旨に添い奉ります」との奉答を受け、重荷が一度におりた気がして安堵した。

新京はつい一ヵ月くらい前まで勤務していたところだし、山田軍司令官以下みんな私の親しい人ばかり、特に大本営で永く机を並べていて、いまは私の後任としてここに来ている、瀬島龍三参謀がそこにいた。そのころ、新京は満州国の近衛隊が反乱を起こして市街戦の銃声が聞こえており、一ヵ月前まで私の住んでいた家に行ってみたいとも思ったが、それは不可能であったばかりでなく、すでに略奪されて何も残ってはいないようであった。

なおソ連軍の侵入によって満州内の電信電話はほとんど不通であったが、通化にいた溥儀満州国皇帝に会見したい旨の電報を打ったところ、これだけは幸運にも通じ、さっそく翌々日京城に出て会見する旨の返電を得た。

山田軍司令官は当時、軍司令部に起居しておられたので、軍司令部の隣の軍司令官官邸に私は泊めていただいた。当時の新京憲兵隊長は、偶然にも私が中国で騎兵中隊長として戦闘をしていたころ、第一小隊長で私の片腕として働いてくれた青木益夫中尉であった。その夜、彼は私の護衛に当たってくれたので、二人で夜が更けるまで語り合った。彼はその後シベリアに抑留されて非常に苦労したうえ、数年後に帰国した。

〝騎兵第十四聯隊第三中隊会〟というのが、いまも毎年催されており、青木君とはそれからも何度か会ったが、ついに病を得て亡くなってしまった。先年彼の郷里近くで開かれた中隊会の時、皆でお墓にお参りをしたが、まだまだ春秋に富んでいた彼だけに実に残念でならない。

さて一夜過ぎた翌十八日朝、関東軍司令官以下多数に見送られて懐かしい新京飛行場をあとにした。しかし一時間もとぶと、「飛行機の具合がよくないので、この下の公主嶺に降りて修理します」と飛行士がいう。そこは戦車の部隊や学校などがあったところだが、いまはどんな状態になっているか判らないので、新京飛行場に引き返させた。

ふたたび着いた新京飛行場には見送りの人はもう誰もいなかったが、関東軍司令部の飛行班がいたので故障を修理してもらった。幸い大したことがなく一時間ほどでふたたび飛び立つことができた。しかしもしも故障がすぐに直らなかったら、おそらくもう一晩新京に泊まらねばならなかった。そうなれば翌十九日にはソ連軍がそこへ進駐して来たのだから、当然私もシベリアに連れて行かれるところだった。運命の岐路、まさに明暗紙一重の瀬戸際だった。

裸婦を描いた飛行機

新京からの帰途、奉天（瀋陽）の第三方面軍司令部に立ち寄って、司令官後宮淳大将にも、同じように聖旨を伝達したうえ、京城（ソウル）に向かった。京城到着はいま述べたような事情などで、だいぶ遅れて夕方になった。飛行場には伊原潤次郎朝鮮軍参謀長以下が出迎えていてくれたが、どうも様子がおかしい。訊くと、実は少し前に着陸した飛行機を私の搭乗機と思って出迎えたところ、胴体に裸の女の絵が描いてある。いくら終戦になったからといっておかしなことだと思っていると、いきなり機関銃を突きつけながら私ならぬ外人兵が降りてきたという。それは京城に抑留していた米英軍高級捕虜といち早く連絡しようとした、米軍の一番乗りだったのである。敵ながらまことに天晴れな決死行だったといえよう。

ところが朝鮮軍にしてみれば、終戦という情勢下でこのような珍客をどう取り扱ったらよいかまったく判らず、「とりあえず今は飛行隊の将校集会所でご馳走をしているところです」と、たいへんに困った様子であった。

しかし、これには後日談がある。それは「日経新聞に連載された『私の履

歴書』を拝見仕り、誠に感慨切なるもの」があるとて、「現在山形西ロータリー・クラブ会長を仰せつかり、バスト・ガバナー竹田様の御動静はよく存じ上げて居ります」という中村吉雄君から寄せられた書翰である。まことに興味深いので、ここに要旨を紹介させてもらう。

中村君は当時朝鮮軍参謀部情報担当の大尉であったが、「『私の履歴書』中にある女の裸体の描かれた飛行機は、私が処置を致しました。これは終生忘れられぬことであります」との書き出しで「米軍機が着陸した次の日の正午、その飛行機を帰還させよとの命を受け、私一人彼らの部屋に入って説得したところ、にわかに怒り出し、『大尉の分際でなにいうか、少なくとも軍司令官の署名を持って来い』とピストルで脅かされ、危険な状態となりました。参謀室に帰り処置を仰いだが、相手の要求は拒否され、いま一度行けと帰されました。引き返す途中わが軍の戦車に会ったので、咄嗟（とっさ）の思いつきで、それを米軍のいる部屋の窓側に連れて行き、轟音を高く上げて威嚇してから入っていったところ、情勢が一変し『早速退去する』と答え、夕陽の沈む頃、行く先は老河口だといいながら飛び立ち、女の裸体画のダグラス機を私一人で見送りました」と当時の情況が述べてあり、さらに「しかしその後戦犯調査の際、戦車で脅したという点」でつかまったら大変と心配のあまり、実は「これまで誰にも語ることなく、三十年間一人胸にしまって居ったのでしたが、おかげで晴れ晴れと致しました。感謝申し上げます」と結んであった。

『私の履歴書』の取り持ちで、はからずも裸女の画の飛行機のその後の消息を知ることができて、私としても何か久しぶりに晴れ晴れとした気持にさせられた。中村さんの頓智に敬意を表するとともに、貴重な事実を漏らしてくださったことにたいして心からお礼を申したい。

満州国皇帝との擦れ違い

話を元に戻す。京城に着いた私には重大な使命があるので、裸女の飛行機にかかわってはいられない。ただちに軍司令部に直行し、上月良夫朝鮮軍司令官に聖旨を伝達した。ここでも聖旨遵法の奉答を受けて使命をすべて終わり、重責を果たすことができた。

その夜阿部信行朝鮮総督と上月朝鮮軍司令官に招かれて会食をしているところへ、通化の溥儀皇帝から「飛行機が小さいので、長白山を越えて京城には出られない。よって明日奉天に出る」という電報が入った。そこで私は「もう一度奉天に引き返して満州国皇帝に会いましょう」と言ったら、朝鮮総督と朝鮮軍司令官は口を揃えて、「それは本来の任務ではない。まっすぐ帰って一刻も早く復命され、陛下の御心（みこころ）を安んじ奉るべきです」と強く諌められ、迷いに迷ったが、結局その言に従う他ないことになり、奉天行きをあきらめた。あとで聞くと、その翌日満州国皇帝は通化から奉天の飛行場に着いたが、すでにそこを占領していたソ連軍にそのまま飛行場でつかまってソ連に連行されてしまったという。もし私が京城から奉天に引き返していたら、おそらくは満州国皇帝と同じ運命をたどるところであったことに間違いはなかろう。これまた危ないところであった。

護衛機の自爆

話はまた戻るが、八月十七日に私の搭乗機が満鮮の空に入ってから足かけ三日間、ずっといっしょに飛んで護衛してくれた四戦闘機（『私の履歴書』では二機と書いたが、投書によって、私の記憶違いであったことが判明）と京城で礼を述べ激励をして別れた。かくて任務を終えた彼らが奉天に帰った時、前に述べたように、すでにその日から、そこはソ連軍の占領下となっていた。そこで四機はただちに決心し、奉天南飛行場に突っ込んで壮烈な自爆を遂げたという。そのことは、深く私の胸裡にきざみ込まれ、いつまでも忘れることのできない痛恨の思い出となっている。『私の履歴書』を見て、それについてもまた二、三の投書を受け取った。

その一通は「奉天の飛行場に自爆する様子を私は、はっきりと目撃致しました」という、当時中学三年生であった山本好昭さんからのもので、「其の日、奉天の上空は青く澄みわたり、敗戦の直後とはいえまだ平穏でありましたが、真新しい戦闘機が、私の家の上を飛んで来るのを見ました。塗装もないジュラルミンの胴体の日の丸がはっきり目に入りましたが、飛行場近くの松林の中に見えなくなり、再度舞い上ってから墜落して行き、聞もなく黒煙が松林からあがりました……」とある。

また長男恒正と同じく三菱商事に勤務している陸士五十八期の日高猛氏から、次に記す四勇士の氏名とともに、当時の飛行部隊長島田安也氏から聞いた話を知らせてくれた。

故陸軍大尉
鎌田正邦（大分県出身）
五十五期
故陸軍中尉
西谷真六（青森県出身）
五十七期
故陸軍中尉
福田　滋（岡山県出身）
五十七期
故陸軍中尉
後藤宰久（熊本県出身）
五十七期

「昭和二十年八月二十日には、奉天南飛行場にソ連軍航空将校が進駐して居り、その将校と島田中佐の目の前で前記四氏搭乗の四戦闘機は急上昇反転のうえ、飛行場の真中に見事な編隊を保ったまま自爆されたそうで、ソ連将校から理由を聞かれたのに対しては、日本では古来敗戦の場合武士道として腹を切る習わしがあるが、あれは飛行機乗りとしての腹切りであると答えた」ということである。ここに改めて鎌田大尉以下四烈士の霊のご冥福を心からお祈りする次第である。

二度目のお使い

かくて八月二十日無事に帰国すると、すぐ宮中に参内して聖旨に対する各軍司令官の奉答を復命した。陛下にはご満足のご様子で、労を犒（ねぎ）ってくだされ、心からホッとしたことであった。ふたたび生きては帰れないかもしれないとの覚悟を持って出発し、事実そうなる機会に何度か出会いながら、ともかくも、大任を果たして帰れたことは、まったく幸運という外はない。

帰国後三日目にまた陛下のお召しがあった。今度は宇品の陸軍船舶司令部と福岡の第六航空軍司令部などに軽挙妄動しないよう、前と同じ聖旨を伝えよとのことであった。宇品には敵の本土上陸時に対抗する陸軍の海上特攻隊が待機していたし、福岡は敵に最も近い陸軍航空司令部の所在地だったからである。

この時、上空から見た原爆地、広島市街は見渡すかぎり荒涼たる焼け野原で、一面に小さな宝石が散らばったようにピカピカ光って見えた。降り立ってから判ったが、それは原爆によってこなごなに吹き飛ばされた、無数のガラスの破片が太陽の反射で光っていたのであり、爆心地から五キロ離れた宇品にある鉄筋コンクリートの陸軍船舶司令部でさえも、鉄の窓枠がへし曲がっていた。実に物凄い原爆の威力と被害の惨状を目のあたりにし、胸を締めつけられる思いがした。ともあれ、この時の使命も無事果たし得たことは幸いであった。

以上のように、私は終戦の時、続いて二度鎮撫のお使いを勤めたわけだが、たしか二度目のお使いと同じころ、厚木その他の海軍航空隊には高松宮様がお使いに行かれたと聞き及んでいる。

歴代天皇陵への報告

二十年の十一月三十日に私は待命を仰せつけられた。つまり陸軍の現役将校を辞めた。早くいえばクビになったわけである。その時の階級は中佐であった。そして十二月一日には予備役に編入された。

子供のとき幼年学校に入り、一生を軍人として祖国にご奉公しようとした決心は、ここでとうとう捨て去らなければならなくなった。そしてその日から私の人生はまったく一変したのである。

ところで十二月三日にはまた陛下のご命令により三度目のお使いを仰せつかった。それは日本開国以来の一大事というべき〝終戦〟を、神武天皇以来歴代の全天皇にご報告するため、各皇族が手分けしてすべての御陵にご代拝を勤めるということであった。私が命ぜられたのは香川県坂出市の白峰陵（崇徳天皇）と兵庫県三原郡の淡路陵（淳仁天皇）であった。

このようなことが終戦直後に行なわれたことはあまり世に知られていないようだが、これ一つを見ても、皇室における敬神崇祖の御心（みこころ）がいかに厚いものであるかが、よく窺えると思う。

そしてまた、このお使いは私が皇族として果たした最後のお勤めであった。

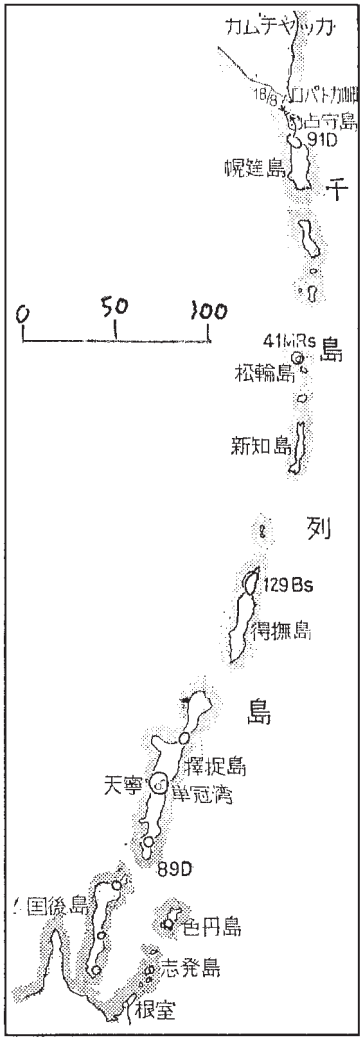
帰徳における竹田中隊長

私の肖像画の口絵

停戦後の八月十八日
不法侵攻したソ軍に対する
戦車第十一聯隊の戦闘

戦車第十一聯隊は六個戦車中隊と整備中隊より成り、中戦車三九輌、軽戦車二五輌を持ち占守島に配置されていた。聯隊長は騎兵界で名の通った熱血漢池田末男大佐だった。

8月17日所属する第九十一師団長から終戦処理の命を受け、銃砲を外し弾薬を一ケ所に集積し武装解除の準備をしていた。ところが18日未明竹田浜一帯にソ軍が艦砲射撃を加え上陸し、沿岸配備の我が軍を攻撃して来た。幌筵島に在る師団長から池田聯隊長に「敵を水際に撃滅すべし」という命令が下った。



聯隊長は第四中隊長に国端岬付近の敵情捜索を命ずるとともに、各中隊にすみやかに戦闘準備を整え天神山に集結を命じた。○五○○聯隊長は天神山に進出し、各中隊の中小隊長が追及して来たがその時はまだ二○輌足らずだった。第四中隊長から四嶺山頂に敵進出の報を受け○五三○前進開始、○六二○、四嶺山南麓の台地に進出した。約一個中隊の敵歩兵が四嶺山を越えて前進するのが見えたのでこの敵を蹂躙する決心をした。この時は三○輌ほど到着していた。

聯隊長は無線で「池田聯隊はこれより敵中に突入せんとす、祖国の弥栄をいのる」と師団長に報告し、○六五○横一線に展開し前進、所在の敵を蹂躙した。四嶺山に進出して各中隊を掌握し、爾後の作戦を練った。

敵の第一線は停止し動揺しているらしい。敵戦車は現れない、敵砲兵の威力も濃霧のため制限されると判断し、「一挙に敵を圧倒し水際に撃滅する」と決心し、○七五○聯隊長は砲塔からのりだし日章旗をうち振り「攻撃前進」と令した。左から第四、第三、第一中隊、聯隊本部、第六、第二中隊と展開し敵中に突入した。池田大佐は聯隊長になる前は満州の四平戦車学校にあって戦車師団の戦車隊教練規定編纂を担当していたが、それに記述した通りの場面に遭遇したのである。

しかし視界二○メートルの霧が我に不利となった。戦車の視界は殆ど効かないが敵は戦車の影を霧にすかして見ることが出来た。敵は急拠揚陸した対戦車砲をもって対抗した。○八三○頃より敵対戦車砲と我が戦車砲との射撃戦となり、我が搦座戦車の乗員は拳銃や銃剣をもって戦い、戦場は混戦状態となった。

死闘二時間、敵は百以上の死体を遺し竹田浜方向に敗退したが、我もまた多大の損害を蒙った。聯隊長、指揮班長、副官及び第一、二、三、六各中隊長をはじめ戦死者九六名をかぞえ、搦座炎上した戦車二一輌に及んだ。

その後聯隊の指揮は第四中隊長が執り戦闘を継続したが、一六○○攻撃中止の師団命令を受け、そのまま敵と対峙し敵も攻撃して来なかった。

北千島の停戦協定成立は20日であるが、ソ軍はそれまで動きはなかった。18日の戦闘は十数時間に過ぎなかったが、ソ軍の損害は死傷三千を下らないものと言われ、イズベスチャ紙は「占守島の戦闘は満州における戦闘よりはるかに損害が大である」と報じた。この果敢な自衛戦闘が爾後の武力占領を慎重にさせ、北海道侵略の野望を断念させる因となった。

池田大佐

池田末男の横顔

この人は13年9月から16年11月まで騎兵学校の幹部候補生隊の中隊長をしていて、学生に至大の感化を与えた。

昭和58年頃偕行社で「偕行」に掲載する為、学校物語と称し騎兵学校について数回座談会を実施したことがあった。幹部候補生教育について幹候一期の者四名ばかり出席し思い出を開陳したが、その中で中隊長池田少佐に関する発言の要点を抜すいしてみる。参加者は衆議院議員もおり、皆社会的地位の高い人であった。

A　私思いますに松下村塾での吉田松蔭先生とお弟子さん達、幕末から維新に活躍なさった人とのふれあいをものの本で読んで、あの短い間にいかに吉田先生と雖も、それほどの影響力を与えることが出来るんだろうかという感じを持ちましたが、池田教育を振返ってみると優れた教育者は、それだけの影響力があるんだと思いますね。

B　何かの記念日に中隊長はおろしたての軍服を着ていらっしゃってどんな話のついでだったか覚えていませんが、その軍服で匍匐前進をなさいまして、要するに将校という者は無理をしなくちゃあいかんということをおっしゃったのを私は忘れずにおります。

C　具体的に言えば、真夏の炎天下部隊を休ませた時、下士官兵は日陰に入れても将校は日のあたる所に出ているということを言はれました。ですからそのときそのときを全て教育の機会になさいましたどんな小さなことでも、捉えて教育に使はれました。

D　幹候隊入校の日遠方の部隊の者は前日来ていたのですが、私は近騎ですので朝早く起きて習志野まで行こうとしました。ところが起きてみると、その日は暴風雨で高田馬場まで行ってみると省線電車が不通でして、それでもやっと電車が来て乗ったのですが、集合時刻には遅れてしまいました。大そう叱られました。電車が来ないなら聯隊に戻って馬に乗って来い、荒川などは水馬で渡れと言はれました。えらいところに来たもんだと思いましたが、それからの教育を顧みると当然のことを言はれたと思いました。占守島で敵陣に日の丸を振って突入したという、さもありなんと思います。

会員　梅沢　裕　画

職に殉じた樺太真岡電話局の乙女達

ソ連軍の侵攻

ソ連は一九四一年に締結した「日ソ中立条約」がまだ有効なるに拘わらず、20年8月8日（一九四五年）わが国に宣戦布告し、翌9日満州及び樺太に侵攻して来た。樺太の戦況について服部卓四郎著「大東亜戦争全史」の該当個所を引用する。

樺太方面――我が勇戦とソ軍の暴状

八月九日未明の第八十八師団長の命令に基き、気屯にあった歩兵第百二十五聯隊長は、古屯の一箇大隊をして直ちに八方山陣地（国境南方一〇粁）に入らしめ、上敷香及び内路にあった同聯隊主力を急遽北上せしめ、十日朝までに八方山陣地の配備を完了した。

ソ軍は九日及び十日国境方面わが監視部隊に対する攻撃及び偵察飛行を行っていたが、十一日朝南下を開始し、半田附近前進部隊と交戦の後十三日八方山東北側前進陣地を攻略し、十四日より十七日に至る間主陣地の攻撃を反復したが、我が聯隊の奮戦により悉く撃退された。

この間ソ軍主力は幌内川右岸道を経て古屯附近に進出し、主陣地側背を掩護する我が部隊と激戦を展開した。

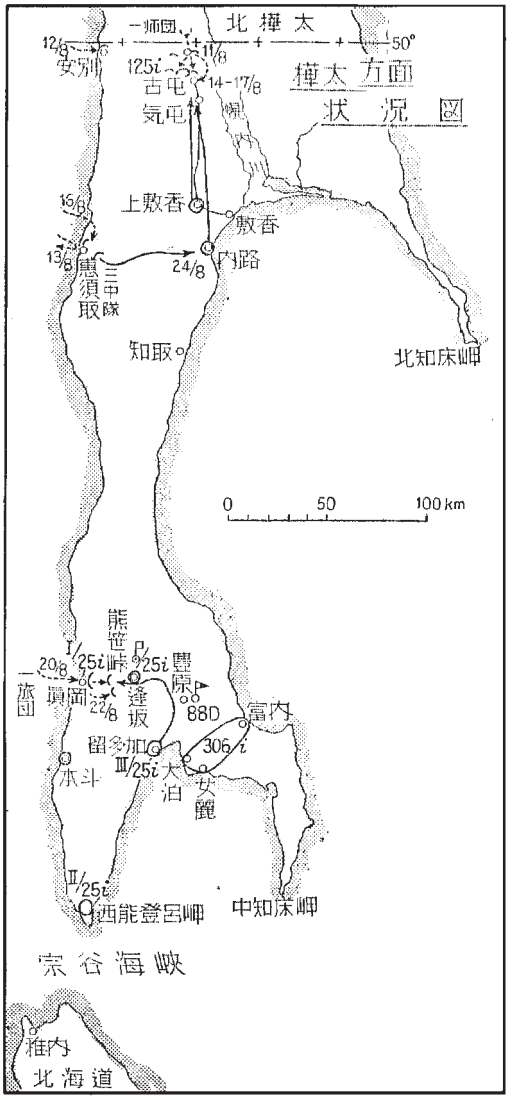
聯隊長は十七日朝戦闘行動停止の師団命令に接し、同日午後軍使を派遣して当面のソ軍師団長と局地停戦交渉を行った。

一方樺太西海岸方面においては、ソ軍の一部は八月十二日国境に近い安別に上陸した。又十三日上陸用舟艇四隻を以て恵須取に上陸せんとしたが、約一中隊の同地警備部隊によって撃退された。ソ軍は爾後連日艦砲射撃及び爆撃を行った後十六日朝恵須取北方地区に上陸してきた。第八十八師団長は約三箇中隊を恵須取方面に増援したが、同方面指揮官は十八日現地停戦交渉決裂するに至ったので、同夜兵力を纏めて内路に向い転進した。八月二十四日内路附近において更に武装解除の師団命令に接するに及び、全部隊武器を手入れした後道路の一側に整頓して恵須取より前進してきたソ軍に引渡した。

真岡方面においては八月二十日朝ソ軍は艦砲射撃の後上陸を開始した。同地附近にあった歩兵第二十五聯隊第一大隊長は聯隊長の命により軍使を派遣したが、この一行はソ軍のため射殺されるに至った。ソ軍の上陸に伴い住民は避難を始めたが、ソ軍はこれに対し機関銃の射撃を浴びせ阿鼻叫喚の状態に陥った。眼前に無辜の同胞が殺戮せられる惨状を見た各部隊は期せずして前面のソ軍に猛射を開始し俄然本格的戦闘に入ってしまった。

逢坂にあった歩兵第二十五聯隊長は事態の急変を知り、留多加の約一箇大隊を逢坂に急進せしめた。真岡方面に上陸した混成約一箇旅団のソ軍は、二十一日朝真岡東側台端の我が第一線を突破し更にその東方熊笹峠に迫った。二十二日終日彼我激戦を交えたが、同日夕刻聯隊長は「俘虜となるも停戦すべし」との師団命令を受け、二十三日軍使を派遣したが、途中射殺せられ聯隊長自ら停戦交渉に当り、同日現地において武装を解除した。

これより先、方面軍の停戦命令を受けた第八十八師団長は、上敷香に派遣していた参謀のソ軍との連絡により、十九日師団参謀長を派遣して停戦交渉



に当らせたが会談不成功に終り、更に豊原特務機関長を派遣した結果二十二日知取（シリトリ）において停戦交渉が成立した。師団長は真岡方面の状況に鑑み、二十三日特使をソ軍将校と同行派遣したが、その到着時現地部隊は武装解除中であった。

第五方面軍司令官は、第八十八師団の戦況進展に応ずるため、八月十三日北海道より第七師団の歩兵三箇大隊、山砲一箇大隊を南樺太に急派するに決したが、実行途上終戦となった。方面軍司令官は八月十七日は大本営の停戦命令を受領するや直ちにこれを第一線に命令したが、二十日真岡における新たな戦闘勃発を知り、同日即時戦闘行動を停止して武器引渡しを行うべき旨を重ねて命令した。

かくして南樺太における戦闘は終りを告げ、八月二十八日在樺太全部隊の武装解除を終った。九月三日以降樺太と本土との通信連絡は、ソ軍のため一切杜絶するに至った。

樺太のわが軍は、九月二十日頃から作業大隊に編成せられて、逐次ソ領に移された。

殉職九人の乙女

ここに金子俊男著「樺太一九四五年夏」という書物がある。到る所侵攻したソ連軍の暴状と住民の悲惨さで、紙面が埋まっている。その中で標題の件に触れようと思うが、当時彼女達の上司、真岡郵便局長であった上田豊蔵さんの話したことが載っているので、そのまま転載させてもらう。

八月十六日、豊原逓信局から、警察と連絡をとり、女子職員を緊急疎開させるよう電話があった。私は全員を集めてその旨を申し渡したあと、三浦警察署長に会って、女子は各地区ごとの疎開家族と合流して引揚げさせることを認めさせ、そのあとの電話交換業務は真岡中学の一、二年生五十人ほどを急いで養成することとし、谷内中学校長と話合い、その手筈を決めた。

ところが、電話担任の大山一男主事が「全員が引揚げに応じない。そして局にとどまることを血書嘆願するといって準備をしているようです」と報告してきた。

私は直ちに女子職員を集め、ソ連軍が進駐したのちの予想される事態を語り、説得したが、交換手の監督鈴木かづゑさん以下全員は、電話の機能が止まった場合はどうなるか、重要な職務にある者としてそれは忍びないと主張して譲らなかった。とくに高石さんが強硬であった。そして、この考えに電信の一部にも共鳴する職員がでてきた。

私は感動した。しかし、その決意を肯定することはできない。ソ連軍進駐後はどのような危難が女子の上にふりかかってくるか、と思うと私は慄然となる。緊急疎開の方針を変えず、豊原逓信局伊賀業務課長（シベリア抑留中に死亡）に電話で「小笠原丸を大泊からの疎開に一回就航させたのちは直ちに真岡に回航、西海岸の女子通信職員の引揚げに当たらせてほしい」と交渉、その承認を得た。同船が真岡に入港したら命令で乗船させる決意をしたのである。結果的に同船が入港するより早くソ連軍の上陸が開始されたのではあったが……。

二十日朝、交換手の高石さんから電話を受けた上田局長は、非常呼集をかけさせると、分室に泊まっている斎藤英徳、菊地寛次郎両主事を郵便局に急行させ、自らも身づくろいして、二人を追うようにして飛び出した。しかし、銃撃が激しいため、上田局長は十字街に釘付けされ、飛び出して負傷した警官を助けようとして自らも負傷、局舎に近づくことができなかった。そのうちにソ連兵がその十字街に近付き、上田局長はそばの由田与三吉さんとはかり、若い男にいって棒の先に白布をしばりつけさせて軒先からソ連兵の目にふれるように振らせた。これで上田局長らは助かったものの、直ちに海岸の倉庫に連行され、局員がどうなったか知るすべもなかった。

局長らがソ連軍に捕らえられたのはまだ朝のうちだった。その後、ぞろぞろと町民がその倉庫にはいってきた。血みどろの負傷者はなんの治療も受けられず、弱々しいうめき声が夜通し続いて、二十一日の朝がきたとき、局長の周囲にいた十人ほどの重傷者の多くはすでに冷たくなっていた。その人たちは一様に腹部を撃たれていた。

上田局長、由田さんらは、ほかにも相当いるらしい負傷者のため病院で治療を受けさせたいとソ連の将校に訴えた。かつてカムチャッカ漁場にいたことがあるという男の、あやしげな通訳はがゆかったが、二人は必死だった。ようやく許しを得ると、局長らは監視兵に付添われて庁立病院に向かった。負傷した腕をかかえこむように歩く局長に若い女が駆け寄ってきた。みると交換手の一人だった。

「局長さん、高石さんら宿直の交換手全員が自決したらしいんです」

こう叫ぶと、みるみる涙があふれ、「ほんとうか」せきこんで聞くのにも、あとは嗚咽のなかで「町は自由に歩けないし、局にも近付けないので、どう

なっているのか確かめることもできないんです」と答えた。

局長がさらに何か問いただそうとしたとき、監視兵が大声でわめいた。交換手は恐怖に顔をひきつらせて離れていった。

病院にはいった上田局長のところに、近くの官舎に住んでいる保険の加藤主事夫人が食事を持って見舞いにきた。その人は鈴木かづゑさんの妹であったので、すぐくるようにいってほしいとことづけた。

鈴木さんは電話交換手としての経歴十七年のベテラン。翌朝、病室にきたが、沈痛な面持ちでやはり「高石さん以下、当夜の宿直者が自決したことは確実だ」と次のように、彼女は推測を語った。

一、宿直者のうち一人（名前は忘れた と局長はいう）が、電話連絡のつかない地域に非常呼集を伝達するため、高石さんの命で外出したが、その交換手が「高石さんが万一の場合は自決する考えらしい」と話していた。（その人は川島キミ子さんとみられる）

二、渡辺照さんは非常呼集を受けて非番ながら直ちに出動したことがわかっているが、その渡辺さんを含めて交換手九人の姿をみた人がいない。

三、交換手のほとんどが万一の用意に工務の技術官駐在所から青酸苛里をもらって所持していた。

以上の三点から鈴木さんは、どうしても自決したとしか考えられないというのである。

自決がうそであってくれ――祈るような気持ちでいた上田局長も、鈴木さんの話を聞いているうちに、それがどうやらほんとうであることを覚悟しないわけにはいかなかった。

局長は折りよく病院に見回りにきたソ連軍将校に、部下局員の遺体を引取るために局舎にはいることを認めてほしいと訴えた。そのときは、あすまで待てといって帰ったが、二十三日昼過ぎにやってくると「私が連れていくからすく支度をせよ」といった。

途中の警備が厳重で、邦人が歩いていると何度も調べられるというので、局長はとっさに医者の白衣を借用することを思いついた。そして鈴木さんと電信の女子事務員の斎藤さんには看護婦の白衣を着せて、胸に赤チンキで十字のマークを描いてやった。三人は医者と看護婦になりすますとその将校のあとに従った。

三人は局舎にはいり、廊下を抜けると、薄暗い階段を駆けるようにしてのぼり、右手の交換室の戸をあけた。三人の目にまっさきに飛び込んだのは監督の机の前に倒れている高石ミキさん（二十四歳）の遺体があった。机の上にはその日の交換証のつづりと事務日誌がきちんと重ねられて、そのわきに睡眠薬のあき箱が二つころがっていた。

また吉田八重子さん（二十一歳）は市外交換台にプラグをにぎったままうつ伏せになり、隣の市外交換台の前では、コードをつかんだまま渡辺照さん（十七歳）が横倒しになっている椅子の上におおいかぶさるようにして死んでいた。この二人はブレストを頭につけたままで、最後まで他局からの呼び出しに応ずるために、薄れゆく意識の中で、交換台にしがみついたのであろう。プラグをにぎり、コードをつかんだ右手の指先に、彼女らの仕事に対する執念をみた思いであった。

三人はあふれる涙をぬぐおうともせず、九人の最後をしっかり脳裏に刻み込んだ。可香谷さん、伊藤千枝さん（二十二歳）、沢田君子さん（十九歳）、高城淑子さん（十九歳）、志賀晴代さん（二十二歳）の五人は、監督台と東の窓に添って並んでいる交換台のほぼ中間で、恐怖のため肩を寄せ合うようにして倒れ、ただ一人松橋みどりさん（十七歳――と局長は記憶している――）の遺体だけがどうしたわけか南に面した窓ぎわにあった。

睡眠薬のあき箱があることからみて、最後を見苦しくしたくない女性らしい心やりから睡眠薬を飲んだあと青酸可里をのみくだしたのであろう。そんななかにあって、当時十七歳であった松橋さんが、最後の瞬間まで生きたいと願ったのであろうか。あるいは戦火に追われて逃げる肉親の無事を願ったのかもしれない。そのいずれにしても胸を打つ最後であった。九人は白っぽい制服にモンペをつけていた。午前三時には就寝したはずだから熟睡中を起されたのであろうに、その乱れはみじんも見受けられなかった。

室内も女性の職場らしく、いつものように整然としていた。しかし、交換台には五、六発の弾痕があった。すでに窓越しにみる町には激しい銃声とともに恐ろしいソ連兵が押し寄せている中で、若い乙女たちにして、自ら生命を断つ以外、道があったであろうか。

宗谷海峡を見降ろす稚内の丘の上〝氷雪の門〟のそばに、ブレスト（交換手用の送受話器）を耳にかけた乙女のレリーフと「皆さん　これが最後です　さようなら」の文字を彫った〝殉

職九人の乙女の碑〟（制作本郷新さん、寄贈者上田祐子さん）がある。

その碑文には、

「昭和二十年八月二十日日本軍の厳命を受けた真岡電話局に勤務する九人の乙女は青酸可里を渡され最後の交換台に向った。ソ連軍上陸と同時に日本軍の命ずるまま青酸可里をのみ、最後の力をふりしぼってキイをたたき『皆さん、さようなら、さようなら、これが最後です』の言葉を残し、夢多き若い命を絶った。戦争は二度と繰りかえすまじ、平和の祈りをこめて、ここに九人の乙女の霊を慰む。昭和三十八年八月十五日」

と書かれている。

ところでこの碑文のうち「日本軍の厳命を受けた」「日本軍の命ずるまま青酸可里をのみ」について前述の上田さんは強く否定している。「軍の命令で交換手を引揚げさせることができなかったから、結局、軍が彼女らを死に追いやったといわれているが、これは事実無根です。純粋な気持で最後まで職場を守り通そうとしたのであって、それを軍の命令でというのはこの人たちを冒涜するのもはなはだしい」という。

昭和天皇御製

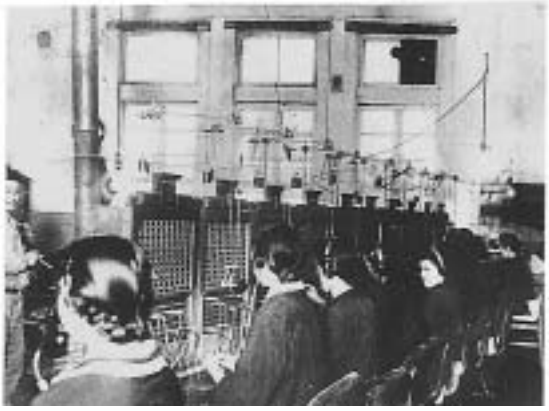
樺太にいのちを
すてし　たをやめの
こゝろおもへば
むねせまりくる

昭和43年9月5日、昭和天皇、皇后両陛下は北海道稚内公園の「九人の乙女の慰霊碑」をご覧になられて、お歌を詠まれた

皇后陛下御歌

樺太に露ときえたる
をとめらの
みたまやすかれと
たゞいのりぬる

最後まで職場を離れず電話交換に殉じた9人の乙女。伊藤千枝、志賀晴代、高石ミキ子、可香谷シゲ、吉田八重子、高城淑子、松橋みどり、渡辺照、沢田キミ



氷雪の門

信義無き国ソ連

ソ連は今次大戦の結果武装解除された我が軍人や官史六〇万人を、シベリヤに連れ去り長年強制労働させ、六万人も殺したが、そのことは又稿を改めて書くこととし、今回は前の二つの記事に関連し、如何に不倶載天の国であるかを述べようと思う。現在のロシヤとて変わることはない。

一、条約破り

一九四一年（昭和十六年）四月十三日に調印した「日ソ中立条約」は次のようになっていた。

第一条　両締結国は両国間ニ平和及友好ノ関係ヲ維持シ且相互ニ他方締結国ノ領土ノ保全及不可侵ヲ尊重スベキコトヲ約ス

第二条　締約国ノ一方ガ一又ハ二以上ノ第三国ヨリノ軍事行動ノ対象トナル場合ニハ他方締約国ハ該紛争ノ全期間中中立ヲ守ルベシ

第三条　本条約ハ両締約国ニ於テ其批准ヲ了シタル日ヨリ実施セラルベク且五年ノ期間効力ヲ有スベシ両締約国ノ何レノ一方モ右期間満了ノ一年前ニ本条約ノ廃棄ヲ通告セザルトキハ本条約ハ次ノ五年間自動的ニ延期セラレタルモノト認ムベシ

第四条　本条約ハ成ルベク速ニ批准セラルベシ批准書ノ交換ハ東京ニ於テ成ルベク速ニ行ハルベシ

ソ連は一年前に条約の破棄を通告して来た。しかしまだ条約は厳然として存続していた。しかるに八月八日わが国に対し宣戦を布告したのである。

ソビエット大百科事典には、一九四五年八月八日のクリミヤ会談の際に引受けたところの自国の義務に忠実なソ同盟は日本に宣戦を布告したと言っている。

我が国には「信義」という言葉がある。信とは己が言を践行ひ義とは己の分を尽すをいふなり、と明治天皇は教えられた。彼の国にはこの言葉はないのか。

二、八月十五日以後の侵攻

我が軍がポツダム宣言を受諾し戦闘行動を停止した後も侵攻を止めず、住民に対しても殺戮を恣いままにしたことについて、彼の百科事典には次の通り言っている。日本政府は八月十四日無条件降伏に同意する旨を声明し、自国軍隊に抵抗停止の命令を下達する用意がある旨を表明した。しかしこの表明は根も葉もないものであった。敵はソビエット軍の攻撃を阻止させたかったのである。八月十六日日本軍は殆ど全方面にわたってソビエット軍に対する攻撃に出たが、撃退されてしまったザバイカル戦線軍は八月十九日熱河市を占領して遼東湾に接近、八月二十日には長春と奉天を占領した。第二、第一極東戦線軍は八月二十日ハルピンと吉林を占領した。この時までに南樺太における日本軍の抵抗は撃破され、ソビエット海軍は千島列島に陸戦隊を上陸させた。（以下何処をいつ攻撃したかを縷々のべている）

八月十六日以降も日本軍が全方面で攻撃に出たので、これを撃破したと、盗人たけだけしとは、このことである「樺太一九四五年夏」には、真岡でソ軍に殺された軍人以外の人名と年令が載っているが、その数四七七名、それ以外にも沢山あるという。

ソ軍の非道は日本人として永遠に忘れてはならない。

ソ連は解体しロシヤになったが、一つ穴の貉、北方領土問題をみれば歴然としている。そもそも一八五五年（安政元年）に結んだ日露通好条約で、国境は択捉島とウルップ島の間と決めたので、北方四島は一度も外国の領土になったことはない。日本はポツダム宣言を認めたが、それには日本国の主権は本州、北海道、四国、九州並びに我らの決定する諸小島となっており、カイロ宣言に依れば、第一次大戦開始後日本が占領した太平洋における島は取上げる、となっている。この宣言通りならば、一八七五年の千島樺太交換条約によって日本領となった北千島や、日露戦争で日本領となった樺太の南半分も日本領として残すべきである。我が軍が戦闘行動をやめた後、千島に夜盗の如く乗込んできて居座っている。

しかも満州や北方領土で投降した将兵を六十万もシベリヤに連れ去り、長きは十年以上も強制労働させ、六万人も死なせた。これはハーグ国際条約に違反し、またポツダム宣言も無視した所業である。

一九九三年（平成五年）の東京宣言では、歯舞、色丹、国後、択捉の北方四島の帰属問題を解決したうえで平和条約を締結すると謳ったのに、歯舞、色丹だけで手を打とうと言い張る。国際条約さえも簡単に踏みにじる国だから東京宣言など眼中にないらしい。今年は日露通好条約締結百五十年にあたる。二月七日は北方領土の日で官民各種行事があったが、相手を屈服させるカードはないものかと思う。

偃武還暦之賦

逝くものは斯くの如きか昼夜を舎（す）てず（論語子罕篇）
戦熄みて六十年　暦は還りぬ　一億一心聖戦完遂に邁進せし往時
物豊にして心貧しき現世　正に雲壌の感あり
国敗れて山河残れど　失いしは心ならずや　挙国一体戦いし頃　隣国の侮りを受けしこと無かりしに鼎の軽くなりしこと　今日より甚だしきは嘗てなし　靖国の英霊如何に見そなわせ給うや
国の根底　一にかかりて教育に在り　占領軍の政策に拘る戦後の教育に洗脳せられし者　国の要路を占むるに至る　国の大事弁えざる指導者　仮初めの平和に酔いし大衆　大は国家の経綸より小は諸々の社会事象に至るまで　頽廃地を払いて　亡国の深淵を見るが如し
離騒の念絶ゆることなし
嘗て東海の君子国　正大の気天下に満ち　道義高揚　滅私奉公　隣国に尊崇の念抱かせり　固より是れ一刻の感傷に非ず　民族永遠の繁栄を求めんとするにあり　時恰も日露戦捷百周年に当たる　祖先の血潮我らが体内に存するに非ずや
熟々思うに　諸悪の根源は憲法と教育基本法にあり　被占領時の呪縛破棄こそ喫緊事なるに　政治の何ぞ怠慢なる　在野の人士　挙げてこれを求め　社稷を盤石の安きに置かんとす
人生は限りあるも　民族は尽きるなし　偃武還暦の年にあたり　吾人奮起し　次代と相携え　民族の未来を荘厳にせんとす

註釈

偃武＝武器をかたづける、武装解除の意
鼎云々＝支那の古代春秋の時代、五覇の一人で勢力盛んになった楚の荘王は、周王の使者に周王朝に代々伝わっている鼎の大小軽重を問うた。それに対しての応答は省略するが、鼎の軽重を問うとは、相手の実力や内情を見すかして、その弱みにつけこむという意味に使われている。
離騒＝屈原の楚辞に出ている言葉で、離はかかる意、騒は愁いの意である。ここでは憂国と解すればよい。

終戦に伴い自決した軍人・軍属

産経新聞社発行「あの戦争」に拠るが、洩れがあると思う。

15日　陸軍大臣阿南惟幾、スイス公使館付陸軍武官岡本清福中将、陸軍航空本部長寺本熊市中将、陸軍航空技術審査部総務部長隈部正美少将
第五師団長山田清一中将はセラム島の司令部で自決した。
16日　海軍軍令部次長大西滝治郎、陸軍航空技術審査部水谷栄三郎大佐、大本営陸軍参謀晴気誠少佐、予科士官学校橋口兼夫教授
18日　満洲第百十二師団長中村次喜蔵中将、同参謀長安木亀二大佐
24日　東軍司令官田中静壱大将
27日　横須賀で海軍省軍務局員多田久爾夫大佐、陸軍航空本部明石出張所で藤田正雄技術中尉、スマトラで南方軍第三通信隊の浅原兼人上等兵、近衛歩兵第三聯隊の川鍋音吉兵長、近衛工兵第二聯隊の鈴木堅上等兵、中国広東省で歩兵第十六聯隊の上仲留由軍曹、大連憲兵隊本部の岡沢正一少尉、セレベスで田上信弘海軍上等工作兵曹と片岡哲人一等工作兵曹、満州で第三航空情報聯隊の仲野彦春少尉、マレーで歩兵第百二十三聯隊の我謝孟英大尉と荻原弘康上等兵、中支で中支下士官候補隊の日原時雄軍曹が自決。
28日　福井県芦原町の水交社で松浦勉海軍少佐、京都の清水寺で軍需省軍需官の山岡健一海軍中尉、海軍横須賀工廠で中川賢之助上等兵曹、中国河北省で北支那特別警備隊の井口今朝春曹長、スマトラで近衛師団の市川清治郎曹長、近衛歩兵第四聯隊の市川実伍長、ジャワで第十六軍憲兵隊の上遠野勇吉憲兵曹長、第十六軍野戦自動車廠の杉田直男兵長、台湾で高射砲第百六十二聯隊の福留正雄軍曹が自決。
29日　マレーで第十六飛行場中隊の津田不二三少佐、台湾で海上挺進基地の平松滝雄大尉、独立機銃第七大隊の稲村利男軍曹、スマトラで近衛歩兵第五聯隊の綱野良軍曹、サイゴンでインドシナ航空隊の辻道明軍曹、セレベスで井手義任海軍上等兵曹、ジャワで第百二十六飛行団の堀義重曹長、南方第五陸軍病院分院の三浦福二伍長、北支で特務警務隊の山口五太夫一等兵が自決。
30日　海軍高知航空隊で司令の加藤秀吉大佐、スマトラで近衛歩兵第五聯隊の右田和男上等兵が自決。
31日　南鳥島守備隊が降伏調印。終戦までの戦没者約一九〇。陸軍一、九三四、海軍六二二人が第一大海丸で九月十六日浦賀に帰還。
「嵐作戦」でウルシー泊地攻撃に出撃した第一潜水隊が終戦で横須賀に帰還の途中、司令の有泉龍之助大佐が潜

水艦内で自決。

ほかにジャワで独立歩兵第百五十大隊の大原忠彦中尉、スマトラで近衛歩兵聯隊の木村勝義一等兵、第四十七兵站警備隊の中島源作上等兵、サイゴンで船舶通信聯隊の林慎弥中尉、第三船舶輸送司令部の平野清准尉、セレベスで下平三次海軍水兵長が自決。

9月1日　セレベスで迫田勝義海軍軍属と藤岡豊海軍軍属、朝鮮で第四気象隊の中尾英弘兵長が自決。

2日　大阪で近畿軍需監督長の森住松雄海軍中将、佐世保で海軍佐世保工廠の馬渡重和大佐、北支で特設水上班勤務の三瓶清曹長と北村茂上等兵、ジャワで独立混成第二十七旅団の吉田三郎上等兵が自決。

3日　大本営報道部の親泊朝省陸軍大佐が妻子三人を道連れに自決。ガダルカナルに上陸した第三十八師団参謀で生き残り、遺書に「ガ島で死すべかりし命を今宵断ちます」とあった。ほかにジャワで海軍第二十一特別根拠地隊の中浜松夫少尉、台湾で独立自動車中隊の藤森行雄伍長が自決。

4日　東部軍管区法務部長の島田朋三郎陸軍法務中将、舟山島海軍警備隊の石川達夫中尉、釜山で独立自動車部隊の勝山英一中尉、スマトラでパレンバン防衛司令部の宮崎要吉伍長が自決。

5日　「ヤルートの王」を自任し陸海将兵と島民に親しまれたという海軍第六十二警備隊司令升田仁助少将は、米飛行士三人処刑の責を一身に負って十月五日自決した。

満州の第一方面軍司令部の相原大二郎少尉、中国武昌で第三十四軍野戦兵器廠の牛沢粲兵技曹長、仏印で小林文治郎陸軍工員、マレーで前島信勝海軍二等機関兵曹、スマトラで渡辺末太郎陸軍警部が自決。

6日　陸軍航空士官学校区隊長の小野寺謙介大尉が、満州で訓練を受けていた生徒を引率して帰校したあと、飯能の観音寺の境内を借りて割腹自決。ほかに朝鮮鎮海警備府で第三五二設営隊副長の安平敏隆海軍技術中尉が自決。

7日　満州の第十飛行場大隊で土井忠男准尉が自決。

8日　東京の築地病院で軍医学校教官の村原正直海軍薬剤大佐、ジャワで第二十五野戦航空修理廠の中台正二兵長、朝鮮で羅津重砲兵聯隊大隊長の西山志賀治大尉が自決。

10日　中国武昌で第三十四軍野戦兵器廠の伊藤義郎上等兵、天津で第百八十七兵站病院の入江守兵長と看護婦寺尾五枝さんが自決。

11日　仏印で陸軍郵便局勤務の小森治中尉、セレベスで二宮春実海軍二等兵曹、中支で第百二十二師団の槙田誠三一等兵曹が自決。

12日　第一総軍司令官杉山元元帥が東京の軍司令部で拳銃で自決。自宅でその連絡を受けた啓子夫人も短刀で自決。中国漢口で第二十六野戦航空修理廠の金原重夫少尉、シンガポールで羽谷泰末海軍一等整備兵曹、中国湖南省で戦車第三師団防空隊の船山光雄上等兵と独立歩兵第四百九十一大隊の丸山清兵長が自決。

13日　第十八軍司令官安達二十三中将は二十二年九月十日、ラバウル戦犯裁判での証言をすべて終えたあと自決した。

A級戦犯に指名された小泉親彦元厚相（陸軍軍医中将）が自宅で割腹自決。中部国民勤労訓練所長の城倉義衛陸軍中将、ジャワで第十六軍軍政監部の川野久雄陸軍軍属、スマトラで近衛第二師団の紙嘉平軍属が自決。

14日　A級戦犯で出頭を求められた橋田邦彦元文相（東大医学部教授、一高校長などを歴任）が自宅で服毒自決。第一総軍司令部付きの吉本貞一大将（前東北軍管区司令官）、愛知県で高射第二師団の中村晴雄大尉、岡山県で独立歩兵第三十九大隊の水野謙一上等兵、中支で独立歩兵第二百十聯隊の大西広近上等兵、ジャワで独立歩兵一五五六大隊の中村金一郎軍曹と片野博衛生伍長が自決。

15日　北ボルネオで第三十七軍の菅辰次中佐、スラバヤで敷設艦若鷹の安藤登少佐、南支で独立歩兵第四百八十四大隊の赤嶺清孝上等兵、マレーで南方下士官候補者隊の伊藤成一陸軍雇員、シンガポールで独立歩兵第九十九大隊の清水孝治兵長、中国湖北省で独立歩兵第五百九十九大隊の伝田時春上等兵が自決。

16日　満州で歩兵第二百七十五聯隊の伊東民哉兵長が自決。

17日　独立混成第五十旅団長北村勝三少将は復員後、二十二年八月十五日に長野市の自宅で自決。海軍部隊指揮官の第四十四警備隊司令宮田嘉信大佐も二十一年七月十八日自決した。

元軍事参議官の篠塚義男陸軍中将が東京の自宅で割腹自決。遺言「大東亜戦争開始ニ当リ、軍事参議官トシテ同官会議ニ列席、開戦ヲ可ト報告致シ候。此信念ハ今モ変ラズト難モ国家ノ運命今日ニ至リシ上ハ深ク責任ヲ感ジ候。此ニ自決以テ謹デ陛下ニ御詫ビ申上ゲ、戦没者及其遺族並ニ国民ノ各位ニ陳謝致シ候」。ほかに海軍呉工廠の伊勢勲大佐、呉鎮守府人事部の福住不二夫大佐、満州で関東軍情報部の松浦友晴中佐、中国河南省で平岡正上等兵が自決。

18日　ジャワで第十六軍軍政監部の斉藤文蔵陸軍司政官、タイで鉄道第五聯隊の北口信雄兵長、マレーで大坪時男兵長、特別自動車第十七中隊の吉富正人伍長、中国湖北省で独立歩兵第五旅団の西岡淳一一等兵、仏印で南方軍総司令部の山下光盛軍属が自決。

19日　朝鮮済州島で野戦重砲兵第十五

聯隊第三中隊長谷口章大尉が、預かる一五㌢榴弾砲四門の米軍引き渡しを前に自決。ほかに台湾の台中飛行場で特攻隊長の一人だった飛行第二十九戦隊の橘健康中尉、スマトラで近衛歩兵第三聯隊の松村民人上等兵が自決。

20日　スマトラで第二十五軍憲兵隊の平野豊次少将、蒙古で駐蒙軍独立警備隊の野口政雄軍属が自決。

21日　満州で関東軍憲兵隊の宮脇加古憲兵准尉が自決。

22日　中国江西省で独立歩兵第二百十八大隊の池田茂軍曹、ニューギニアで迫撃砲第二十一大隊の萱場勇松一等兵、パラオで海軍陸戦隊の吉川正行二等兵曹が自決。

23日　スマトラで新井幸一海軍軍属が自決。

25日　仏印で第四師団の村田孝義少佐、中支で独立歩兵第百二十二大隊の吉川忠義大尉、ヤップ島海軍第四十六警備隊の小山悌治大尉、海軍宗谷防備隊の幸田明中尉夫妻が自決。

26日　中国広東省で独立歩兵第二百七十九大隊の土屋清美准尉が自決。

27日　岡山衣糧廠で三戸敏正海軍主計大尉、善通寺兵器補給廠で別役保陸軍技術軍曹、ジャワで陸軍第十六教育飛行隊の小沢佐武郎少尉が自決。

28日　マーシャル諸島ミレ島で海軍第六十六警備隊司令志賀正成大佐、ジャワで第十六教育飛行隊の酒井琢磨准尉と井海利治軍曹、南支で独立歩兵第二百七十九大隊の中野実兵長が自決。

30日　中国江蘇省で独立歩兵第六百二十八大隊の岩城竹次軍曹、仏印で南方軍第一憲兵隊の樽本善道兵長、ボルネオのパンジェルマシンで海軍第二十二特別根拠地隊の藤井豊上等兵曹が自決。

10月2日　タイで第四十二兵站警備隊の佐藤喜一郎中尉、満州で関東軍総司令部の大野吉晴曹長、スマトラで近衛歩兵第三聯隊の池田実広兵長と第十四飛行場中隊の高橋定雄上等兵、ジャワで電信第十五聯隊の福西義春上等兵、シンガポールで南方燃料廠の青山清忠一等兵が自決。池田兵長は軽機手として南支、マレー、スマトラを転戦、「斬り込み特攻隊、分隊長として部下に激しい訓練を課した罪、万死に値する」との遺書を残していた。

4日　中国武昌で中支憲兵隊の中村正次憲兵中佐、スラバヤで岸本福治郎海軍少佐が自決。

5日　不時着した米軍飛行士処刑で戦犯容疑をかけられたヤルート島の海軍第六十二警備隊司令升田仁助少将が自決。米軍に「全責任はわれにあり」と報告書を提出、手帳にメモで「余はヤルートの王として太陽として諸氏と共に草根を食み、海水をのんでヤルート島基地死守の大任のために奮戦してそれを完うした。この島で親愛なる諸氏に囲まれて最期を遂げるのは本懐至極である」と、遺書を残した。ヤルート島関係の米軍戦犯裁判で、部下の陸海将兵は死刑を免れている。

6日　タラカン知事庁の藤野良雄海軍警部が自決。

8日　中国山東省で独立歩兵第四十四大隊の鈴木吉之助一等兵が自決。

10日　ビルマで方面軍直属部隊の池田幸作大尉、朝鮮鎮海で坂元隆志海軍水兵長が自決。

11日　台湾で第八飛行師団の大石三郎上等兵が自決。

12日　中国武昌で佐藤勇憲兵曹長、スマトラで近衛歩兵第三聯隊の青木幸次郎一等兵が自決。

13日　茨城県で松島貞雄海軍中尉自決。

14日　ジャワで独立歩兵第百五十一大隊の鬼沢不二男上等兵が自決。

15日　ニューブリテン島で播川正夫海軍一等整備兵曹、セレベスのマカッサルで海軍軍需部の金森千年軍属が自決。

16日　セレベスで海軍第二十三特別根拠地隊の石田彦一少佐、マレーで第四十六師団司令部の林田成義上等兵自決。

17日　ハルマヘラ島でハルマヘラ島憲兵隊長の時松先志憲兵中佐が自決。

18日　ビルマで鉄道第九聯隊の島崎孫一伍長が自決。

20日　北支で独立歩兵第二旅団の戸田弘曹長が自決。

21日　海南島で阪東実海軍工員が自決。

23日　ラブアンでボルネオ燃料廠長の相京正夫陸軍大佐、南京で九江憲兵隊の笹本東作憲兵軍曹が自決。笹本軍曹は「九泉の地下より皇国の再建を祈る」の遺書を残した。

25日　北支で独立歩兵第三十九大隊の井上俊輔一等兵が自決。

29日　スマトラで高射第百四聯隊の中丸義雄伍長が自決。

30日　中支で独立歩兵第五大隊の吉田直得大尉、スマトラで第二十五軍憲兵隊の小林光雄憲兵大尉、ハルマヘラで第八野戦憲兵隊の横山一成軍医大尉、モロタイで第二方面軍所属の本多淳郎中尉が自決。

11月2日　中国山東省で北支第十二独立警備隊の酒井久雄軍曹が自決。

3日　台湾新竹で第九師団司令部の伊藤義市曹長、南支で平連勲軍曹が自決。

5日　鳥取市で陸軍参謀の福井寛少佐。

9日　南京で村田道一海軍二等兵曹。

12日　セレベスのケンダリーで登孝夫海軍二等兵曹、ジャワで陸軍自動車材料廠の宮沢福蔵上等兵が自決。

16日　小豆島沖で貨物船第二金山丸（八八七トン）触雷沈没。

18日　ダバオで守谷止夫海軍一等兵曹。

20日　本庄繁陸軍大将が自決。大将は満州事変発生時の関東軍司令官で当時枢密顧問官。終戦後、遺族・傷痍軍人の職業補導を担当する「輔導会」の理事長を委嘱されその任に就いていたが、戦犯に指名されて、東京・青山の旧陸

大構内の理事長室で古式にのっとり割腹自決。早くからその覚悟だったようで、九月の日付の遺書が残されていた。遺書「多年軍ノ要職ニ奉仕シナガラ、御国ヲシテ遂ニ今日ノ如キ破局ニ近キ未曽有ノ悲境ヲ見ルニ立到ラシメタル、仮令退役トハ言ヘ、何共恐懼ノ至リニ耐ヘズ、罪正に万死ニ値ス。

満洲事変ハ排日ノ極、鉄道爆破ニ端ヲ発シ、関東軍トシテ自衛上止ムヲ得サルニ出テタルモノニシテ、何等政府及最高軍部ノ指示ヲ受ケタルモノニアラズ、全ク当時ノ関東軍司令官タル予一個ノ責任ナリトス。

爰ニ責ヲ負ヒ世ヲ辞スルニ当リ謹テ至尊ノ万歳、国体護持、御国ノ復興ヲ衷心ヨリ念願シ奉ル」

23日　中国湖北省で漢口憲兵隊の服部次中佐が自決。

28日　中支で第三十七野戦貨物廠の石本正直兵長が自決

12月12日　セラム島で第五師団経理部の島津公一主計大尉が自決。

13日　九月十五日自決を図った柴五郎陸軍大将が東京の自宅で死去。86歳。

15日　セレベスで安部謙三海軍兵曹長、シベリアのマガダンで坂衛海軍二等兵曹が自決。

18日　ウェーク島で伊藤禹司海軍大尉。

19日　スマトラで細川貞光憲兵軍曹、中支で中川広成伍長が自決。

22日　海南島で岩見長五郎海軍一等兵曹が自決。

23日　スマトラで近衛歩兵第三聯隊の宮沢吉啓軍曹が自決。

25日　ラバウルで照屋正一海軍二等兵曹が自決。

26日　マレーで第七方面軍参謀の佐藤直大佐、池田千城少佐、梶木常正中尉、台湾で歩兵第三百五聯隊の矢野浴亨曹長が自決。

27日　シンガポールで第三航空軍の片岡敏雄少佐が自決。

28日　ニューブリテン島で輜重十七聯隊の武田友一中尉が自決。

31日　台湾新竹で立花広次海軍技術大尉が自決

21年以降の自決者

21年1月3日　ハバロフスク捕虜収容所で第四軍司令官の上村幹男中将

4日　スマトラで能登慶一郎一等兵

8日　ニューギニアで葛川芳男伍長

14日　仏印で森本武男海軍軍属

15日　台湾で脇本末男陸軍中尉、折上良雄海軍一等主計兵曹

18日　海南島で横道梅次郎上等兵曹

24日　マレーで桜井清助陸軍警部

27日　中国青島で根本安得一等兵

30日　セレベスで大和田金助准尉

31日　ハルビンで前川巌陸軍中尉

2月1日　セレベスで中川佐一郎二等兵曹、スマトラで林豊伍長

4日　スマトラで山本千春陸軍中尉

6日　セレベスで関口藤吉陸軍大尉

11日　ジャワで駒崎勲軍曹

12日　東海復員監部で岡田痴一陸軍法務少将

28日　長野の自宅で小山鷹男海軍中尉

3月3日　サイゴンで望月実准尉

5日　南支で鉄道第十五聯隊の奥名四郎三郎中尉、海防艦占守機関長の横山三郎少尉

15日　バンコクで徳留勝雄憲兵軍曹

17日　和歌山市で森下弘信海軍大尉

20日　ジャワで吉崎政雄兵長

4月3日　仏印で関本昌一陸軍大尉

8日　済州島で坂間万司一等兵

13日　台湾で第十二師団長人見秀三中将、ラバウルで光葉久直陸軍大尉

19日　上海の戦犯収容所で台湾軍司令官の安藤利吉大将

24日　上海で松尾正三陸軍法務少佐

5月2日　グアム島で神浦純也海軍中佐

26日　鹿児島で神山真一伍長

31日　シンガポールで田中錬次上等兵曹

7月1日　ソ連で小沢清司伍長

11日　宮古島南方海上で永井明雄海軍主計大尉

8月12日　バリクパパンで吉村甲子郎海軍少佐、ラバウルで池葉東馬陸軍大尉

15日　満州嫩江病院で中村俊枝看護婦

16日　横須賀で第二十七特別根拠地隊（ニューギニア）司令官の佐藤四郎少将

21日　外蒙古で渋谷則夫伍長

9月17日　東京裁判証人出廷のためシベリア抑留から一時帰国の大陸鉄道司令官草場辰巳中将

28日　メジュロ島で第六十六警備隊（ミレ島）司令志賀正成大佐

30日　ボルネオで藤井豊上等兵曹

10月4日　マカッサルで修多羅浩海軍警部

7日　シンガポールで金成武陸軍主計大尉

30日　モロタイ島で本多淳郎陸軍中尉

31日　サイゴンで歩兵第二百二十五聯隊の小寺次郎平少佐

11月15日　仏印で山野泰典陸軍大尉

12月2日　ルソン島沖で柴田朝治二等整備兵曹

4日　ジャワで第十六軍憲兵隊長の山本学憲兵中佐

10日　東京で第百四十二師団長の小泉恭次中将

16日　レイテ島で独立歩兵第百七十三大隊の佐藤正伍長

18日　静岡県で四国軍管区司令部の楠瀬正雄大佐

22年1月21日　バリクパパンで河井篤四海軍法務大尉

27日　岡山県下で宮崎有恒憲兵中佐

3月14日　モロタイ島で平野幸治憲兵中佐

4月6日　マカッサルで小野美夫兵曹

長

4月28日　ビルマで第三十一師団参謀野中国男少佐

30日　ジャワで岩政真澄憲兵大尉

5月19日　第二復員局の無着仙明海軍大佐

6月3日　ビルマで鉄道第九聯隊の楫西常夫大尉

28日　天津で独立歩兵第四百一大隊の柴田晃准尉

7月2日　グアム島で池谷鉄一二等衛生兵曹

22日　中国山西省の大同で亀井又一兵長

8月15日　長野の自宅でメレヨン島から復員した独立混成弟五十旅団長の北村勝三少将

9月8日　ラバウルで間山己八伍長

9日　アンボンで鈴木信憲兵少佐、クーパンで窪田典人海軍嘱託

10日　ラバウルの戦犯収容所で第十八軍司令官の安達二十三中将

10月8日　クーパンで和田末実陸軍中尉

17日　マニラで宮本司馬夫伍長

23年1月15日　ボルネオで石田光行海軍司政官

29日　グアム島で味岡操准尉

3月15日　スラバヤで実松実雄憲兵曹長

9月8日　巣鴨拘置所で折田優陸軍少佐

10月15日　スラバヤで久米武三憲兵曹長

20日　新京で佐藤信勝陸軍嘱託

11月19日　タンジュンピナンで坂内松次陸軍兵長

24年1月19日　アンボンで牧野周次郎海軍少尉

27年12月7日　中国黒龍江省で野砲兵第百十九聯隊の大河内三郎兵長

29年2月12日　巣鴨で坂本忠臣海軍中佐

以上は産経新聞発行のあの戦争に掲載されたものの全部である。よくこれだけ調査できたと敬服するが、大分漏れているものがある。**それらは次号に掲載するが、会員の皆さんの補足するものがあったらお知らせ下さい。**

なお特定の自決者について、申し述べておきたい事があれば付記して下さい。

一応軍人軍属だけを拾ってみたが、文官や民間人についてもこの書物に出ているので、それらは次号に紹介する。

また終戦時の宮城事件の主謀者の自決も、この書物には出ているが、異質なので今回は削除し次号に述べることにした。

敗戦の責めを負って自決した

最年長の陸軍大将

柴　五郎

先ずこの人の軍歴を辿ってみる。

陸士生徒三期　明治16年近衛砲兵大隊付　25年参謀本部々員　日清戦争時大本営参謀　28年英国公使館付武官ついで清国公使官付武官　義和団事件では公使館に籠城　日露戦争には野砲兵第15聯隊長として従軍　その後佐世保・下関要塞司令官・第12師団長等を歴任　大正7年東京衛戍総督　8年台湾軍司令官　軍事参議官を経て大正12年予備役（コンサイス日本人名辞典）

生い立ち

会津藩の生まれ、戊辰戦争の時祖母母・姉妹は家に火を放って自害、戦い敗れた父と五郎は、青森県斗南の火山地帯で、言語に絶する開墾の苦難を嘗める。青森県庁の給仕から上京し、苦学していたが、旧家老の山川浩のすすめで陸軍幼年学校に入る。

軍職の間

朝敵の出で中央の要職に就くことはなかったが、誠実で謙虚、ひたすら努力によって大将にまで昇進した。北清事変にさいしては、歴史的記念物を守ることに尽力し、国際的名声を博し、英・佛・露・独・伊・ベルギー・スペイン等から勲章を受けた。帰朝後明治天皇に召され軍状を奏上した。

在職間の心構えについて、次の歌を残している。

もののふのみちひとすじをたよりにてこたへまつらむきみのめぐみに

自決

大正十二年六十四歳で軍職を去り、大東亜戦争には何も係わっていなかったが、敗戦にあたり最年長の大将として責任を痛感し、八十七歳の老齢をもって次の辞世の歌を残し自決した。

すめくにのまたの栄えをうたがはず
今日のなげきはさもあらばあれ

（以上日本政策研究センターの機関誌「明日への選択」に拠る）

終戦六十年に懐う

六十年という歳月は唯ならぬものがある。当然のことながら、その年に生まれた者は六十歳になる。初老である。孔子はいわれた。「六十にして耳順う」と。世に雑音多く中々そうなれない。

謡曲敦盛の一節「人間五十げてんの内をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり……」と。「人生わずか五十年」という言葉もある。もう十年若い。顧みれば夢まぼろしか。

第五飛行師団司令部 飛行班終戦記

中曽根　慶蔵
（少飛9期）

【飛行班が特攻結成】

第五飛行師団司令部飛行班は、師団長、参謀、要人などの人員輸送が主な任務であり、その他連絡飛行、人員機材の輸送をしていた。私は師団長機の機付長をしていたが、師団長が搭乗することは少ないので、通常は参謀や要人の輸送が多かった。

ビルマのマウピ飛行場（ミンガラドン北西30キロメートル）にいた昭和十九年の十一月頃と思うが、飛行班長（少飛一期谷口安治大尉）より空中勤務者全員に対し、レイテ航空戦の状況説明と特攻隊への志願者受け入れの話があった。比島方面への敵反撃の状況はある程度我々にも伝わっていたし、十月二十五日の関大尉以下の神風特攻隊の突入と、続く陸海軍の特攻出撃のことも知っていた。それだけに遂にくるべきものがきたとの感があった。

明日には態度を決めねばならないので、その夜は空中勤務者一同頭を付き合わせサテどうしようかと意見を出し合った。自分で決めることで、他に相談することではないが、時間的に余裕があったこともあり、人間の弱い所で他の者の話を聞きたいとの思いでヒソヒソ話し合ったり、ガヤガヤ大きな声で言い合ったりして時間は経過した。その内誰かが次のような意見を言った。「我々はビルマで散る覚悟で今まで戦ってきた。今レイテに行かなくても、間も無くビルマで特攻の必要が出るだろう。その時こそ我々の出番だ」そうだそうだと何人かが賛同した。私もそれを聞いて心中強いてそうだと頷き、迷っていた心を決めた。

結局レイテ特攻志願は誰も申し出がなかったし、それに対し飛行班長より特に話しもなかったので、特攻のことは一応収まった。

しかし昭和二十年の正月早々飛行班長は全員を宿舎の中庭に集め、飛行班の特攻結成を命じた。「飛行班を特攻編成し、七生皇盾隊と呼称する。師団長閣下の揮毫してあるマフラを空中勤務者に配布する。別に香水をもらっているので神棚に置いておき、出撃の時俺が皆にかける。その時は最後と思い覚悟してほしい」と言い渡された。

先にレイテ志願の話しもあり、やがてこうなると思っていただけに悲壮な感じはなかった。前回は志願であったが、今回は命令である。配布された絹のマフラには「一機一艦必滅」と墨書されてあり、陸軍中将田副登と揮毫してあった。このマフラは内地復員の時戦犯扱いを心配して焼却した。

「加藤隼戦闘隊の最後・粕谷俊夫著」によるとミンガラドン飛行場にいた64戦隊でも、二十年元日に戦隊長より操縦者に対し、特攻隊の結成を命じられ、絹の鉢巻、香水の配布があったとのことである。それで南方各地で同様に特攻隊の結成が行なわれたと思われる。

【終戦の詔勅下る】

ビルマの戦局不利となり、司令部はビルマより仏印に転進することになった。昭和二十年の三月九日飛行班はプノンペン飛行場に空路移動した。機材はトラックで運んだが、この人達は大変苦労して陸路を移動した。

八月十五日、玉音放送があるというので、受信機を準備して聞くことにしたが、結局受信できなかったと思う。多分、陛下より直接我々に、国難に接し頑張れという内容だろうと皆で話し合った。間も無く「終戦」のことと分かり大騒ぎとなった。

九七式重爆撃機四～五機ぐらい、単発機も隼、九七式軽爆撃機など数機を保有しており、人員は飛行班長以下約八十名の部隊となっていた。（注・うち少飛出身者は十四名）飛行班としては過ぎたる陣容なので、実戦部隊としての任務も考えられていたらしい。それだけに終戦の報は我々に強烈なショックを与えた。

自決を考える者、逃亡しようとする者、大酒を飲む者、特攻出撃を考える者、これで死なずに内地に帰れると喜ぶ者、班員の反応はいろいろで、約一週間正常な思考ができない状態が続いた。私自身も自決を深刻に考えた。少年飛行兵として厳しい教育と訓練を受け、今日まで一途に空中勤務者として任務に当たってきた自負があった。周辺では多くの仲間が戦死している。なんでオメオメ内地に帰れるか、残念無念の思いが頭の中をかけ巡った。

そんな時八月十八日頃に、シンガポール行きの命令がでた。○○参謀を乗せ、畠山三保蔵准尉操縦、機関係私、無線係○○で、プノンペンよりシンガポールのカラン飛行場に飛んだ（距離約一、一○○km、大部分海上の飛行）

シンガポールでは一泊となった。翌日プノンペン飛行場に帰着したら、機付きの兵より「森澤曹長殿が拳銃で自決されました」と聞き頭をガーンと一撃された感じがした。やはり決行したのか、自分が迷っている間に先を越されてしまった。森澤國久さんは非常に優秀な下士官で、飛行第98戦隊より飛

行班に転属してきて、機付長として九七重一機を担当していた。責任感の強かった森澤さんは敗戦の無念を痛感して自決の道を選んだのでしょう。遺体のそばに走り書きの辞世の句があった。

「身はたとえ異国の土と化するとも務め守らん大和魂」（この句は飛行班の八期荒居二男さんがメモに残してあったのを書き留めたと聞いた）

その夜森澤さんの遺体をだびに付することになった。森澤さんを火葬しているうちに、私自身の自決の決心はすっかりグラついてしまった。そこに飛行班長より「軽挙妄動するな、皆で無事復員しよう」との全員への話があり、私の気持ちも生き残ることで一応落ち着いた。

九七重での逃亡の話もあった。操縦者の某曹長が、私に逃亡しようと誘いをかけてきた。ガソリンを満タンにして九七重で中国方面に行こうとの内容だった。九七重持参なら中国軍は優遇してくれるはずだと言った。

焦土と化した日本に帰っても明るい希望は持てそうもなく、また、ほんとうに帰還できるかどうかも分からなかった当時の状況では、若干心が動いたが、それでも無謀な計画だし、親のこと、兄弟のことを考えるととても同意できず断った。曹長はあきらめ切れず、それから二日後ぐらいに小型機の整備担当下士官を誘い、トラックを持ち出して逃亡してしまった。

自決した森沢曹長（ご遺族より頂いた写真）

【英軍パラシュート降下】

終戦日後しばらくは、まだ飛行禁止でなかったので、飛行班機も飛ぶことがあった。司令部の許可があり、少飛十三期の岡本耕一軍曹がテスト飛行の名目で隼で離陸した。やがて滑走路の端から低高度で進入してくる隼が見えた。そして我々の目の前をほとんど零高度で轟音をたてながら飛び去った。そして急上昇して反転すると再び超低空で進入してきた。地面に激突炎上するのではないかとハラハラして見守る中無事通り抜けると、今度は上空で派手な曲技を始めた。

岡村軍曹は飛行班にくる前は飛行第31戦隊にいて、精華特別攻撃隊として、昭和二十年一月十日、ヒィリピンのリンガエン湾の敵艦隊を攻撃した。彼の投下弾はサラトガ型空母に命中したという、輝かしい武勲の持ち主である。

八月二十一日頃と思うが、英軍が進駐してくるというので、飛行場に出ていた。双発の輸送機が飛来し上空をしばらく旋回していたが、そのうち二～三人がパラシュート降下してきた。そして待機していた司令部の将校と話して安全を確認したのだろう。輸送機も間も無く着陸した。英軍も万一を心配しながら飛来したと思うが、迎える我々も昨日の敵を目前にして緊張した。その日からプノンペン飛行場には英軍輸送機が頻繁にくるようになった。輸送機からジープが出てきたのを見て驚かされた。

八月二十五日以降日の丸機の飛行は禁止となった。そして英軍への協力飛行のため、九七重二機を白色塗装せよとの命令が出た。機体を全部白く塗り、日の丸は青色の輪と、その中に青色の円があるマークに変えられた。

ある日武装解除式があるので、武器を持って飛行場に集まれとの命令が出た。場所はプノンペンかコンポンクナン（プノンペン北方約80キロメートル）のいずれか。高級腕時計や貴重な物も持ってこいとのことだった。

飛行場の外れの林を背にして英軍が席を取り、師団司令部や飛行場関係の部隊がその前に整列した。英軍高官以下数名の英軍将校が並び、その前に各列の一人一人が軍刀を持って進み、台の上に軍刀を置いた。

式が終わってから戦犯調査があった。調査官に通訳を介して氏名を告げると、ノートを見ながらジロジロ顔を見て若干質問された。

【英軍将校と飛ぶ】

英軍操縦者が習熟飛行するとのことで、二機を準備して待っていると、ジープで将校が二名来た。飛行服など着ていなくて、軍帽、長ズボンの普通のスタイルである。我々は飛行帽、飛行服、航空長靴の重々しいスタイルであり、対称的だった。将校一名が私の機に乗り込んできたので、緊張し顔がコワばった。彼は軍帽をとって正操縦席に座ったので、こちらの操縦者の鈴木義男准尉は副操縦席に座り、私はその後ろに座った。

機体の説明のため、整備班長藤平賢中尉も待機していたので、英軍将校との間で少しの間応答があった。藤平中尉は神戸の高等工業出身の将校で、英語は若干分かるだろうということで説明に当たった。やがて、必要なことは理解できたらしく「OK」と言うので、

藤平中尉は降りた。

将校は操縦桿を操作したり、レバー類に触れたりしていたが、自信が持てたのか窓から手を出して、別の機の仲間の将校に出発するとの合図を送った。滑走路の出発点につき、レバーを開いて前進した。うまく離陸できるかとハラハラしていたが、機は何事もなく上昇した。その間副操縦席の当方の操縦者は特に補助する必要もなかった。

上空で二機の九七重は編隊を組み飛行した。将校は、また窓を開けて仲間の将校に盛んに手を振った。握った拳の親指を立てる手による「快調」を示すサインである。相手の将校もニコニコしながら親指を立てて応答していた。

飛行中、ついこの間まで敵だった者と同乗し、無視されていることもあり屈辱を感じた。それで機体を墜落させて彼を道ずれに自爆しようかとの考えが浮かんだ。飛行班長の訓示で、一旦思い止まった自決のことが、またムラムラと出てきた。しかし、鈴木准尉までも犠牲にすることになるし、のんきそうに操縦している生身の人間を目の前にすると、到底そんな行動には出られなかった。機は快調に三十分程飛行し、無事着陸した。

その日から間も無く、信用できると思われたのか、空輸の仕事が始まった。英軍の同乗はなく我々だけで、グルカ兵を仏印各地へ輸送せよとの命令だった。完全武装して、各人大きな荷物を持っていて、色が黒くて精悍な顔の兵士を、一回で七～八名乗せた。彼らは先の将校と異なり我々に対して低姿勢であった。

兵の移動が一段落したらサイゴンを基地にせよと言われて、プノンペンを離れることになった。サイゴンに着陸して回りを見ると、四枚プロペラの最新型スピットファイヤが所狭しと駐機していた。その群れの中に降りて身の引き締まる思いがした。彼らの攻撃により多くの日本機が撃墜された。サイゴン飛行場には十数機の白色日本軍機が集結していた。九七重が大部分だったが、MC―20などの双発機もあった。

【ツーラン空輸】

ある日ベトナムのツーラン（ベトナム戦争の激戦地ダナンの旧名）にいるフランス人たちへの物資輸送のため、約十機の白色日本軍機が離陸した。これらの機は、編隊を組むのではなく、また離れるのでもなく、一群となってツーランを目指して飛行した。久しぶりの日本軍機の一群を見て、ビルマの空を思い出し特別な思いを受けた。私の機は干した魚を入れた大きな籠をいくつか積み込んだ。

ツーラン飛行場に着陸して驚いた。剣付銃を持った中国軍が機を取り囲み、何やら叫んでいる。先に着いた機も皆囲まれて搭乗員が降ろされている。それで直ぐ皆降りて機を離れた。トラックに乗せられ飛行場を出た。着いたところは意外にもホテルだった。我々一同はこの日から約一週間このホテルに軟禁させられることになった。

我々は英軍の命令でツーランに来たのに、どうして中国軍に抑留されなければならないのか分からなかった。ツーランに進駐していたのは中国軍であったことは、着陸するまで知らなかった。英軍と中国軍との連絡が悪くてこんなことになったのだろうから、間も無くサイゴンに帰れるだろうと最初は思ったが、一夜明けても、次の日中も変化はなかった。

翌々日の午後、変な日本人の乗った船がいるというので、ホテルの裏手の船着き場に出てみた。ホテルの裏には比較的大きな川があり、南支那海に通じていた。船着き場はホテルの一部だったので、出ることは自由だった。ジャンク船が横付けしていて、乗組員数名が船上より、空輸部隊の者たちと話し合っていた。私もそばに行って話の中に入った。ジャンク船の者たちは一見ベトナム人風だが、日本人であることは確かだった。その話によると、

「自分たちは情報機関員で、ジャンク船により、南支那海を航行して情報活動を行なっていた。状況により海賊的な行動を取ることもあった。船底には機関銃などの武器が隠してある。基地には一カ月以上帰らないような行動が常であったが、最近基地との連絡が取れなくなり、おかしいと思っていたら日本が負けたとの情報が入った。真偽のほどを確認しないうちは、うっかり上陸もできなくて様子を窺っていたら、今日たまたまホテルに日本軍人らしい人たちを見たので接近した。ほんとうに日本は負けたのか、そうだとしたら、あなた方はどうしてここにいるのか」などと説明と質問があった。

日本にもこんな仕事をしていた情報員がいたのかと、半信半疑で話を聞いていたが、大体話を聞き終えたので部屋に戻った。それから少したって、同室の誰かが戻ってきて、彼らが捕まったと話した。彼らがその後どうなったかは知らないが、ホテルからはいなくなった。

【中国空軍への勧誘】

軟禁五日目ごろ、飛行機の整備をしてよいとの指示が出たので、全員がト

ラックに乗って飛行場に行った。機体の回りには中国軍が銃を持って監視する中、整備点検を行なった。中国軍の将校が来て話しかけてきた。もちろん言葉は分からないので、もっぱら筆談となった。漢字で書くと何とか意味が通じた。将校は中国軍への編入をしきりに勧誘した。私の場合、曹長→大尉として迎えると言ったが、断ったら残念がっていた。

軟禁七日目か八日目頃突然帰ってもよいとの指示がでた。サイゴン飛行場に着陸したら何か様子が変だった。英軍人や、報道関係の者らしい人たちが多数我々を待っていて、盛んに写真を撮っている。どうしたのだろうと思ったがよく理解できなかった。この人たちから質問を受けている隊員もいた。機から降りて機付の兵から話を聞いて状況が分かった。それによると、我々が中国軍に抑留されて英軍では大騒ぎとなり、中国軍といろいろ交渉したらしい。中国軍は突然飛来した白色日本軍機を警戒して英軍の謀略とでも思ったのでは。二日目に機内に武器が隠されているか点検を受けたのはそのためと考えられる。謀略の疑いは直ぐ解消したが、次に機体と搭乗員が欲しくなったらしい。中国軍から見れば、約十機もの双発機と搭乗員は大変な軍事力（財産）であり、なんとかして自分たちのものにしたかった。そのため交渉でねばったが、最後はあきらめたのだろう。英軍内の新聞にこの事件のことが大きく報道されたとのことである。

ツーラン事件より少し経ってプノンペンへ行く任務があった。操縦者と私の二人でサイゴンを離陸した。飛行中片方のエンジンが振動しだした。それで片発飛行になり無事プノンペン飛行場に着陸した。修理は困難と申し出ると英軍より任務が解除された。

ああこれで「協力飛行」より解放されると思うと、緊張していた気分が一気に緩んで嬉しくなった。単純な空輸とはいえ飛行には絶えず危険が伴う。苛酷な戦争を無事生き抜いたのに、英軍協力飛行で死ぬようなことがあれば、自分としても無念である。一方、空に憧れて少年飛行兵となり、整備ではあるが空中勤務者として、存分に各地を飛んできたのに、今日を限りに飛ぶことはないのかと、一瞬寂しさが込み上げてきた。この飛行が軍隊における最後のものとなった。

一方サイゴンに残った同期黒瀧機付長機の搭乗員たちは、その後も飛ばされて十二月末近くになってやっと無事任務より解放された。

師団長搭乗機（九七重二型を改造）と護衛の64戦隊機

【空母葛城で祖国へ】

飛行班は某月（九月か）プノンペンよりコンポンクナンに移動した。英軍協力解除後は特に何もすることがないので、退屈していた十一月末か十二月初めの頃、飛行師団のサンジャック岬（サイゴン東南）への集結命令が出てメコン川を船で下った。サンジャックの集結地は、ジャングルに面した荒野で、集結部隊が割り当てられた場所で、独自に自活するのんびりするものだった。土地を開墾して畑を作ることが主な日課となった。復員船がくるまで、一年でも二年でも頑張る気持ちになっていたところ、突然、英軍協力者を優先帰国させるとの命令が知らされた。

いよいよ、乗船の日（昭和二十一年四月十七日頃）海岸に行ったら、沖合に航空母艦が停泊していた。日本海軍は全滅したと思っていたのに、どうして空母が残っていたのか、不思議に思いながら近ずくと、飛行甲板が大きく膨らんでいるのが分かった。爆弾が艦中で爆発して、大きく変形したようだ。

艦名は葛城である（葛城は一七、一五〇ｔ、呉港付近などで三回被弾、戦後復員船として三、〇〇〇人収容できるように改修された）。

四月二十五日広島の大竹港に着いた。私の六年七カ月間の軍隊生活はついに終わった。多くの死んだ戦友たちに申し訳ないと思いながらも、祖国日本に帰れたことはやはり嬉しかった。

終戦時外地残存軍人数

支　那	1,124,900
満　州	665,500
朝　鮮	335,900
台　湾	190,500
マレー・シンガポール	314,700
フイリピン	127,200
タ　イ	107,500
中部太平洋	106,900
仏　印	98,200

（33ページへ続く）

待機陸軍航空特攻隊

終戦時待機していた部隊は、三六〇隊あり、その大半は人名、機種、隷属関係、所在地等の資料があり、「陸軍航空の鎮魂」総集編に掲載されているが、紙面の都合で隊号、機種、人数、隊長名のみ掲載する。
三段目は人数、人名の次の数字は出身を示し、数字だけの者は士官学校の期。

25 99双軽12 澄谷徳朗大尉 56
28 99襲12 増田幸男少尉 特志19
47 100重18 千野　実大尉 54
82 95練12 横田利夫少尉 特操1
83 95練12 関谷正文少尉 幹候9
84 95練12 盛島　貴少尉 特操1
85 95練12 佐藤修一少尉 特操1
86 95練12 関根賢治少尉 特操1
87 95練12 白水金一少尉 特志19
88 95練12 吉武純正少尉 特操1
89 95練12 桜井甫文夫少尉 特操1
90 95練12 品田喜一少尉 幹候9
91 95練12 浅井五十義少尉 特操1
92 95練12 襖田秀俊少尉 特操1
93 95練12 石川　久少尉 特操1
94 95練12 藤田一慶少尉 特志19
95 95練12 梶原龍男少尉 幹候8
96 95練12 大谷内政二少尉 特操1

97 95練12 前林　登少尉 特操1
98 95練12 葉阪　豊少尉 幹候9
99 95練12 花輪　洋少尉 幹候9
100 95練12 副士昌幸少尉 特志19
101 95練12 正田周介少尉 特操1
117 1式戦6 東内璋純少尉 特操1
117 97戦 伴　岩男少尉 幹候9
118 1式戦6 木満　毅少尉
118 2式高練 山崎伸一少尉 特操1
119 1式戦6 藤田博也少尉 特操1
120 1式戦6 向殿悟郎少尉 特操1
121 1式戦6 金子　泰中尉 57
121 99高練15 壱岐村貞一少尉 特操1
122 1式戦6 剣持一郎中尉 57
122 97戦12 福村善造少尉 幹候9
123 1式戦6 荒武末良中尉 57
124 1式戦6 古野直也中尉 57
125 1式戦6 松倉外吉中尉 57
126 1式戦6 森田　茂中尉 57
126 98直協6 立川　肇伍長 少飛14
127 98直協6 小幡五朗少佐 53
128 1式戦6 桃北好美大尉 55
129 1式戦6 北野比呂史中尉 57
130 1式戦6 内堀馨介中尉 57
131 1式戦6 以下140まで人名不詳
142 1式戦6 三明憲郎中尉 57
143 1式戦6 鈴木原信中尉 57
145 1式戦6 石沢精三中尉 57
146 1式戦6 藤原正明中尉 57

147 1式戦6 豊島　敏中尉 57
148 1式戦6 福島正剛中尉 57
149 1式戦6 菊池　洋中尉 57
150 3式戦6 竹股慶吾中尉 57
151 3式戦6 不詳
152 3式戦6 不詳
153 3式戦6 渡辺　修中尉 57
154 3式戦6 岡喜代槌中尉 57
155 3式戦6 大野大栄少佐 53
156 3式戦6 井上　馨中尉 57
157 3式戦6 山﨑文雄中尉 57
158 3式戦6 佐藤竜二少佐 53
161 3式戦6 渋田一信中尉 57
161 3式戦6 捧　金吉少尉 特操2
162 3式戦6 二宮嘉計中尉 57
163 3式戦6 天野完郎中尉 57
164 3式戦6 柴山信一少尉 53
166 3式戦6 坂田瑞男中尉 57
167 3式戦6 石原重郎中尉 57
168 3式戦6 西川俊彦中尉 57
168 3式戦6 鵜川藤一中尉 57
170 3式戦6 二宮三徳中尉 57
171 4式戦6 三沢　宏中尉 57
172 4式戦6 島田　守少佐 53
173 4式戦6 渋谷　晃中尉 57
174 4式戦6 平尾禎造中尉 57
175 4式戦6 深江圭三大尉 56
176 4式戦6 内田清次中尉 57
177 4式戦6 三辻七郎少佐 53
178 4式戦6 赤田智正中尉 57

181 4式戦6 槍　壱大尉 55
182 4式戦6 井本　剛中尉 57
183 4式戦6 中村賢一郎少佐 53
184 4式戦6 西田大六少佐 53
185 4式戦6 増田収蔵大尉 55
186 4式戦6 落合成郎中尉 57
187 4式戦6 服部利三郎中尉 57
188 4式戦6 藤井常男中尉 57
189 4式戦6 前原延造少佐 53
190 4式戦6 室山五男中尉 57
191 4式戦6 原口一善少佐 53
192 4式戦6 内藤博弼中尉 57
193 4式戦6 松田二男中尉 57
194 4式戦6 堀山久生中尉 57
195 4式戦6 藤山展法中尉 57
196 4式戦6 野上五夫中尉 57
197 4式戦6 深川　巌中尉 57
198 4式戦6 藤井収三中尉 57
199 4式戦6 村山晴美中尉 57
200 4式戦6 江藤敏夫中尉 57
202 4式複戦8 橋本　進中尉 57
203 2式複戦8 青柳良三中尉 57
204 2式複戦8 戸上晴明中尉 57
205 2式複戦8 河野洋輔中尉 57
206 2式複戦8 川辺龍一中尉 57
207 2式複戦8 繁原光男中尉 57
208 2式複戦8 諸井憲二中尉 57
209 2式複戦8 佐久間信一中尉 幹候8
210 2式複戦8 伊沢　勇少尉 幹候8
211 2式複戦8 山田　秀少尉 幹候8

212 2式複戦 8 富岡松男少尉 幹候 9
216 97戦 6 小笠原貴少尉 特操 1
217 97戦 6 不詳
218 97戦 6 不詳
219 97戦 6 不詳
220 97戦 6 森本時也少尉 特操 1
221 97戦 6 山内　苞少尉 特操 1
221 97戦 6 不詳
222 97戦 6 不詳
223 97戦 6 尾沢鼎山少尉 特操 1
224 97戦 6 伊藤一徳少尉 幹候 9
225 キ115 6 以下228まで機種と人数は同じ、人名不詳
229 キ115 6 木下　勇中尉 57
230 キ115 6 武田孟敦中尉 57
231 キ115 6 郷田　克中尉 57
232 キ115 6 小倉友助中尉 57
233 99襲 6 六郷夷海少尉 幹候 7
234 99襲 6 平野勝美少尉 特操 1
235 99襲 6 佐藤喜三郎中尉 57
236 99襲 6 梅野直士中尉 57
237 99襲 6 岩井正司中尉 57
238 99襲 6 大岐重男中尉 57
239 99襲 6 尾崎久雄少尉 特操 1
240 99襲 6 吉田刀一少尉 特操 1
241 99襲 6 塩沢　弘中尉 57
242 99襲 6 大谷佐重中尉 57
243 99襲 6 不詳
244 99襲 6 斉藤利範少尉 特操 2
245 99襲 6 皆川　少尉

246 99襲 6 不詳
247 99襲 6 不詳
248 99襲 6 不詳
249 97軽 6 大櫃茂夫大尉
250 97軽 6 上野芳雄中尉 少候 24
251 97軽 6 谷口茂海中尉 57
252 97軽 6 平　興誓少尉 特操 1
253 99双軽 8 浅野満祥大尉 54
254 99双軽 8 藤沢一夫中尉 57
256 99双軽 8 近藤淑雄中尉 57
257 97重 12 小林　章中尉 57
258 97重 12 菊池徹三中尉 57
259 100重 12 林　武義中尉 57
260 100重 12 山岸芳夫中尉 57
261 100重 12 光田　修中尉 57
262 100重 12 沖松信夫中尉 57
263 4式重 12 堅　道雄中尉 57
264 4式重 12 村上猛彦中尉 57
265 4式重 12 内田寧義中尉 57
266 4式重 12 中島　亨中尉 幹候 9
267 100偵 8 柴垣次元少佐 53
268 100偵 8 梶川正男大尉 55
269 100偵 8 工藤敏雄大尉 56
270 100偵 8 折原志津夫大尉 57
271 100偵 8 萩原清臣中尉 57
272 100偵 8 長沢隆徳中尉 少候 24
273 98直協 6 大野金吉少尉 幹候 9
274 98直協 6 永井俊一少尉 幹候 9
275 98直協 6 山本琢郎少尉 特操 1
276 98直協 6 末永　巌少尉 特操 1

277 98直協 6 大竹康弘少尉 特操 1
278 98直協 6 荒川三郎少尉 特操 1
279 98直協 6 髙木正美少尉 幹候 9
280 98直協 6 武田新作少尉 特操 1
281 98直協 6 青地耕作少尉 特操 1
282 98直協 6 広瀬清太郎少尉 特操 1
283 98直協 6 谷口　薫中尉 少候
284 98直協 6 小寺正武少尉 特操 1
285 98直協 6 高橋茂男少尉 幹候 9
286 98直協 6 村松正道中尉 少候
287 98直協 6 新町一雄中尉 少候
288 98直協 6 星　新少尉 操 8
289 98直協 6 白石徹志少尉 特操 1
290 98直協 6 大園吉造少尉 幹候 9
291 98直協 6 泉　久男少尉 幹候 9
292 98直協 6 大沢栄一少尉 特志 19
293 98直協 6 吉田教章少尉 幹候
294 98直協 6 吉元美水少尉 幹候
296 98直協 6 三浦睦正少尉 特志 19
297 98直協 6 東　新太郎少尉
298 98直協 6 鳥越常司中尉
299 1式双練 8 宗田秀夫少尉 特操 2
300 1式双練 8 久保田順之助少尉 特操 2
301 1式双練 8 池谷晃寛少尉 特操 2
302 1式双練 8 大貫好市少尉 特操 2
303 1式双練 8 東山修二少尉 特操 1
304 1式双練 8 大槻　浩少尉
305 1式双練 8 進藤重雄少尉 特操 1
306 1式双練 8 桑原貞文少尉 特操 1
307 1式双練 8 丸山　明少尉

308 1式双練 8 内田　亘少尉 特操 1
309 1式双練 8 不詳
310 1式双練 8 不詳
311 95練 6 宗像啓二郎少尉 特操 1
312 95練 6 松岡　肇少尉 特操 1
313 95練 6 益田憲人少尉 特操 1
314 95練 6 栗原良允少尉 特操 1
315 95練 6 渡辺彦治少尉 特操 1
316 95練 6 成島　少尉 特操 1
317 95練 6 不詳
318 95練 6 不詳
319 95練 6 光田宗六少尉 特操 1
320 95練 6 渡辺　清少尉 特操 1
321 95練 6 以下324まで機種人数は同じ、人名不詳
325 95練 6 高橋敬三少尉 特操 1
326 95練 6 米山隆三少尉 特操 1
327 95練 6 岩間虎彦少尉 特操 1
328 95練 6 安田直時少尉 特操 1
329 95練 6 以下340まで機種人数は同じ、人名不詳
341 95練 6 中川　少尉 幹候 9
342 95練 6 以下345まで機種人数は同じ、人名不詳
346 95練 6 国分幸夫少尉 幹候 9
347 95練 6 兵丹石啓介少尉 特操 1
348 95練 6 上原久義少尉 特操 1
349 95練 6 矢岡裕美少尉 特操 1
350 95練 6 川野忠男少尉 幹候 9

「陸軍航空の鎮魂」の総集編には、三六四個隊の待機航空特攻隊が掲載されているが、その三分の二ほどをここに抜粋した。各隊の内容については、大半の部隊は隊名の氏名、編成担任部隊、最後の所属等が記載されている。紙面の都合でそれらは転載しなかったが、知りたい方は原書を御覧願いたい。この本を作成するとき、この項は故岩田辰夫さんが主になって各種資料を蒐集し、精根傾け作られた貴重な成果である。

記事の抜粋はこれまでとし、次の項目のついて総括してみる。

《使用飛行機》　機数

97戦 ……11
1式戦 ……31
3式戦 ……19
4式戦 ……29
2式復戦 ……12
99襲 ……18
97軽 ……17
99双軽 ……13
97重 ……13
100重 …… 5
4式重 …… 4
98直協 ……23
100偵 …… 6
95練 ……159
1式双練 ……12
2式高練 …… 5
キ115 …… 9

ここに記載した特攻隊は20年2月から7月の間に編成されている。早い時期に編成された隊は戦闘用の飛行機が割当てられているが、末期になるにつれて速度の遅い98直協からやがて練習機に替わっている。このように列挙してみると95練が一番多い。如何に飛行機が不足していたかがわかる。

キ115は特攻専用機、簡単な構造で、脚は離陸後捨てるようになっていた。

《出身別について》　人数

陸士・航士 ……119
最上級は53期（少佐）までで
大半は57期（中尉）

特別操縦見習士官 ……588

幹部候補生 …… 71
9期が他兵科から転科しているので断然多い

特別幹部候補生 ……166
戦争末期の新に設けられた制度で、中学校三四五年在校中の者を採用し短期教育で操縦者を養成した。6月以降編成した特攻隊に出ており階級は兵長となっている。

少年飛行兵 ……646
将校では特操、下士官では少飛が特攻の主体である。

予備役下士官 …… 67
記録には予備役と記載されているが、乗員養成所出身者と思う。

以上「航空碑奉賛会」で調査した資料を分析してみたが、隊号だけ載っていて人名の記載のない部隊もあり、この人数は不正確だが大方の傾向はわかる。

人員について注目すべきは、特別幹部候補生である。特幹は少飛よりも更に短縮して飛行訓練を行った。第一期が入校したのは19年4月であるが、中学三、四、五年の在校生から採用した。この非常時に陸士海兵に行ったら戦争に間に合わないと、志願した者が多かったという。突入した特攻隊の中には特幹出身者は1名だけだが、待機特攻隊の中にはこのように大勢含まれている。

陸軍挺進部隊
終戦時の態勢

終戦時内外多くの場所に在ったが、その前に編制上の全部隊を示す。

陸軍挺進練習部は十九年十一月に挺進集団に改編され消滅した。

第一挺進集団
挺進集団司令部
第一挺進団
挺進第一聯隊
挺進第二聯隊
第二挺進団
挺進第三聯隊
挺進第四聯隊
第一挺進飛行団
飛行団通信隊
挺進飛行第一戦隊
挺進飛行第二戦隊
滑空飛行第一戦隊
第百一飛行場中隊
第百二飛行場中隊
第百三飛行場中隊
滑空歩兵第一聯隊
滑空歩兵第二聯隊
第一挺進戦車隊
第一挺進機関砲隊
第一挺進工兵隊
第一挺進通信隊
第一挺進整備隊

○挺進集団司令部
滑空歩兵第二聯隊
挺進機関砲隊
挺進通信隊主力

ルソン島建武集団の中核としてクラーク西方高地を占領し戦闘したが、敗れてピナツボ山麓に約百名が残存していた。指揮官挺進集団長塚田中将。

○挺進第四聯隊のレイテ降下した部隊

第三十五軍に属しオルモック北方地区で戦闘し、カンキポットに集結後軍司令部護衛として七六名がセブ島に渡った。そこでも戦闘があり残存者中隊長大村大尉以下一七名。別にミンダナオ島に渡った者数名残存。

註　第三聯隊のレイテに降下した者に生存者無し。

○挺進第三聯隊のバゴロド派遣隊

バゴロド航空基地を守る為本村大尉以下約六〇名がネグロス島に空輸された。上陸して来た敵と交戦し、隊長以下約半数が戦死し最後はカリマスケ山中に約三〇名残存。

○右以外の第二挺進団の部隊

レイテとネグロスに部隊を出して両聯隊長と中隊長の大半を失ったが、ルソン島には挺進団長以下約五〇〇名が残っていた。第四航空軍が消滅後は第十四方面軍の指揮下で第十師団に配属となり、バレテ峠で戦いカガヤン河谷を撤退し、ピナバガンに到着し終戦となった。その時約八〇名だった。

これとは別に挺進飛行戦隊の空中勤務者が撤退した後、飛行場中隊長岡島大尉以下約一二〇名は、自衛戦闘を行いつつエチアゲに向かい北上し、途中挺進団長の率いる部隊と合流した。最後は約二〇名ほどになった。

○挺進工兵隊主力と滑歩一の作業中隊

滑歩二等と一緒にルソン島に上陸したが、クラーク地区に行く輸送手段がなく、方面軍直轄でバギオ付近で道路構築の作業と土匪討伐を行い、その後独混五十八旅団に配属されイリサン付近で戦い、アキ山麓に後退し終戦となった。残存者福本隊長以下釣四〇名だった。

○第一挺進団司令部、挺進第二聯隊、挺進整備隊

本土決戦に備え宮崎県唐瀬原基地に在った。

○挺進第一聯隊

本土決戦に備え千葉県横芝に在った。二個中隊はサイパン特攻の為海軍に差出し。

○サイパン特攻隊（挺一の二個中隊）

園田大尉を長とし、海軍の指揮下に入り北海道千歳で準備中終戦となった。

○挺進戦車隊

本土決戦の為第五十七軍に配属され、都城郊外に在った。沖縄特攻の為自動車操縦手二四名差出。

○挺進飛行団

北鮮咸興に在って戦力回復中。滑空飛行戦隊から沖縄特攻の為「ク8」九機差出し。

○沖縄特攻隊

前記滑空機に機関砲搭載の小型自動車を乗せ、夜間沖縄の飛行場に着陸させ、繁留してある敵機を焼夷実包で射って回ろうとするもので、自動車操縦手は戦車隊から射手は挺進第二聯隊から差出して全隊の指揮官は戦車隊の広田大尉だった。福生飛行場で準備中に終戦となった。

○空母「雲竜」搭乗部隊

滑空歩兵第一聯隊主力、挺進工兵隊と挺進通信隊の各一個中隊、滑空飛行戦隊の一部、挺進集団司令部の一部は「雲竜」に搭乗し比島に向う途中、19年12月19日台湾近海で撃沈され生存者は僅か。

終戦時の陸軍海上挺進戦隊

皆本　義博

昭和18年9月29日、船舶兵種が創設され、それまでは工兵科の一部門として船舶工兵が存在し、主として上陸作戦・大河の渡河の作戦支援および海上輸送を主任務としていたが、これを契機として直接、戦闘任務を担当することになり、18年11月船舶特別幹部候補生制度が発足し、一八八三名が入隊し海上挺進攻撃の要員に充てられた。

この海上挺進戦隊は、国軍の大きな期待を担い極めて短期間の訓練を経て、制海権なき洋上で困難な海上輸送ののち、比島、台湾および沖縄に作戦展開しまた本土作戦のために、後続の部隊は訓練及び展開準備中に終戦に及んだ。

海上挺進戦隊は、全く不馴れな洋上で無防備の艇を操り鬼神のごとき攻撃を敢行し、多大の戦果をあげその業績は永く青史にとどめられるものである。ただ、輸送中十数回の海難にあいそのうち二コ戦隊は殆んど全滅し、一、三四〇隻の特攻艇をなくしたことは、まことに残念の至りである。

ここに、終戦時の部隊の配置および要員の状況についてのべる。

一、海上挺進戦隊の動員

動員は、船舶司令官の管理の下広島県江田島幸の浦で実施された。

昭和19年9月1日から中旬には、第一戦隊から第十戦隊、その派遣先は沖縄と比島、また10月上旬から下旬には第十一戦隊から第三十戦隊で、その展開地は比島・台湾および沖縄であった。

二、海上挺進戦隊の作戦展開

○比島方面　十三個戦隊

東岸ラモン湾　二コ戦隊
マニラリンガエン　一コ戦隊
バタンガス　十コ戦隊

○台湾方面

台南州　八コ戦隊
高雄州　三コ戦隊
五コ戦隊
九コ戦隊

○沖縄方面

慶良間列島　三コ戦隊
沖縄本島　四コ戦隊
宮古島　二コ戦隊

詳細　別表

三、海上挺進戦隊の終戦行動

比島および沖縄に展開した部隊は、上級司令部が既になく、したがって終戦に伴う戦闘行動停止の指令が到達してない部隊が少くなかった。

また、戦隊および基地隊も全滅に近い部隊がありその通信能力は極めて乏しく、軍中央の情報の的確な把握に難点があった。

ここには比較的戦況に恵まれていた沖縄県慶良間列島渡嘉敷島に所在した海上挺進第三戦隊の状況について、日時を追ってのべる。

○昭和20年8月11日　数日前に、村の郵便局長が、友軍陣地附近の稜線で、敵の潜伏斥候に捕えられた事が判った。

○8月12日　陣地附近に米軍水上機が、降伏勧告の伝単（ビラ）を撒布した。また18時頃、前進陣地から、数日来島東部海岸に住民が続々と集結し米軍と通じている模様で、至急調査方を依頼して来た。

20時頃から、戦隊本部の沖縄出身の知念少尉をして、異様な状況にある村民の中に交り、方言にて事実を確かめたところ、敵の中にいる郵便局長の手引きで、村長以下村の幹部は既に投降し、8月20日迄に、全村民を米軍陣地に収容するよう米軍と手筈を整えていることが判明した。戦隊長は村民の考えを尊重し、あえてこれを阻止しなかった。

○8月13日　早朝から村民は、木の枝や竹ざおに白布をつけ米軍陣地に降りて行き、やがて上陸用舟艇で隣の島へ運ばれた。

○8月14日　戦隊長は最後の斬り込みを行うべく各隊へ指令した。

○8月15日　基地隊の故障中の無線機が辛うじてラジオ放送で終戦の詔勅らしいものを捉えた。また在島の米軍陣地から拡声器で終戦の呼び掛けをし、飛行機からビラを撒布した。

○8月16日　撒布された投稿勧告文は次のとおり。

慶良間列島渡嘉敷島日本軍最高指揮官に告ぐ

一、貴軍は現在大本営との連絡を欠いているを以って書面を以て貴官に次の情報を通報せんとする。

二、日本政府は本日午前八時（日本時間）連合軍に対し無条件降服をなせり。

三、日本国天皇陛下は次の如く宣せられたり。

全日本陸海軍は直に敵対行動を停止し、最寄の連合軍に投ずべし。然らばジュネーブ会議に於いて決定されたる交戦規定に基き軍人としての礼儀と尊敬を受くべし。

四、投降の形式を貴軍と協定せんとす。（以下詳細略）

渡嘉敷島米軍最高指揮官

サビラン　エ　カンノリー

陸軍海上挺進戦隊―展開地・隊長名（〇印戦死）戦死者数

戦隊	展開地	戦隊長		中隊長						戦死者	その他
		期	氏名	期	氏名	期	氏名	期	氏名		
1	沖縄 座間味島	52	梅沢　裕	㊼	伊藤　達也	㊼	阿部　直勝	㊼	津村　一之	70	
2	沖縄 阿嘉島	52	野田　善彦	㊼	大下　眞男	57	中川　好延	57	原　稔	41	
3	沖縄 渡嘉敷島	53	赤松　嘉次	57	中村　彰	57	富野　稔	57	皆本　義博	22	
4	沖縄 宮古島	51	金子　昌功	55	高橋　澄夫	57	赤星　悟	57	浜本　正明	23	第２中隊台湾
5	台湾 台南州仁徳庄	53	近藤　三男	57	小西　博	57	寺野柾太郎	57	三崎　信行	3	舟艇海没
6	比島 バタンガス	53	日比野三郎	㊺	伊藤　公彦	㊹9	岡本　礼夫	㊼	森　照人	85	
7	比島 リンガエン	㊹	内田　旭一	㊺	斉藤　克己	㊼	岡田　茂穂	㊼	島　清	96	
8	台湾 高雄市	54	秋山　軍士	56	金山　光利	㊻	山田　幹夫	57	中尾　秀義	30	一部比島台湾舟艇なし
9	比島 ラモン湾	㊹	上法　眞男	55	市原　秀男	57	林　毅	㊼	加藤　達	73	
10	比島 ラモン湾	51	菅原　久一	㊼	重谷　辰巳	㊼	杉浦　晋三	㊼	氷室　正実	95	
11	比島 バタンガス	52	多田　清二	㊼	近藤　篤男	㊼	河村　篤男	㊼	内村　哲士	92	
12	比島 リンガエン	㊹	高橋　功	㊼	林　基弘	㊼	田原　弘吉	㊼	植村　緑	95	
13	比島 バタンガス	㊸	馬場　計蔵	57	藤堂　高豊	㊼	榎島　武	㊼	吉原　次郎	86	
14	比島 バタンガス	㊹	江島　光記	㊻	曽篠　裕	㊼	沢部　信彦	㊼	金山　秀雄	83	
15	比島 バタンガス	㊸	小串　修	㊻	鈴木　直興	㊻	上野　義現	㊼	今井甲子雄	93	
16	比島 バタンガス	㊹	月井　禎吉	㊻	山本　清	㊻	児島　浩	㊼	門田　隼	88	ルパング島へ21隻移動
17	比島 バタンガス	㊷	富田　博	㊻	石井不二郎	㊻	山之内　実	㊼	石橋　幸夫	94	一部バターンへ
18	比島 バタンガス	㊸	若林　一	㊻	向田　貞一	㊻	辻　義路	57	久保　三郎	86	久保後に20へ
19	比島 バタンガス	㊹	井奥　定司	㊻	加用　信彦	㊻	木村　則夫	㊼	和田　実	99	海没生存７
20	台湾 台南州朴子地区	54	住田　隆	56	関　国重	㊻	中山　忠	57	松尾　弘	7	
21	台湾 高雄州枋山庄	54	林　仁	㊻	江頭　二郎	56	中田九十朗	幹9	渡辺　正夫	12	
22	台湾 高雄州七里渓	54	吉沢　牧夫	56	新納　宗美	㊻	大河原　宏	幹9	山﨑　基	35	
23	台湾 高雄	54	御厨善三郎	56	塩田　育則	56	渡辺　実	幹9	石月　忠夫	2	
24	台湾 高雄州湖南庄	54	稲田　満偲	56	加茂　信義	57	村田　圭弘	幹9	牧野　清一	8	
25	台湾 台南州仁徳庄	52	西村　武敏	56	佐藤　瑞	57	小林　誠	幹9	土門　正治	1	
26	沖縄 糸満	㊸	足立　睦雄	㊻	富田　順行	㊹9	田辺　晃平	㊼	岸本　具郎	90	
27	沖縄 与那原	㊷	岡部　茂巳	㊻	松本　恭男	㊻	児玉　健	57	伊藤　正	81	
28	沖縄 湊川	㊷	本間　俊夫	㊹8	榎本　晴次	㊹9	麻生　清之	㊼	小林　浩三	86	
29	沖縄 北谷	54	山本　久徳	㊻	中川　康敏	57	重富　正	㊼	相馬　光夫	55	
30	沖縄 宮古島	52	富田　稔	55	面高　俊信	幹9	中島　巌	57	本郷　良勝	10	
31～53戦隊動員完結なく、訓練中										計 1,741	

31	鹿児島県	53	田中外三郎	幹9	長谷川　勝
32	宮崎県	53	速見　綱一	幹9	坂本　直郎
33	福岡県	54	坂口　景美	幹9	鈴木　清見
34	福岡県	特18	西山　定	少21	大和田信之
35	鹿児島県	55	田村　一	幹8	佐々木浅次郎
36	鹿児島県	幹	伊藤　重信	幹8	吉沢　一三
37	熊本県	特12	梅田　恒男	幹8	宮下　宏
38	佐賀県	54	山下　作男	幹8	木本　達雄
39	高知県	幹	中島　幸男	？	藤原
40	和歌山県	少21	森本　正二	57	仁熊　栄次
41		54	川人　宥性		
42		㊺	草深　圭二	57	江頭　政直
43		55	松本　初雄		三鬼　孝
44		55	藤井　昌三	57	田村　繁雄
45		55	中川　明	57	近藤　京三
46		53	丸山　正文		高田　武治
47		56	丹羽　昭	57	渋谷　基夫
48		特19	石川　巽		小林　次雄
49		56	清水　健		湯原　政和
50			石塚　恒蔵	57	小波　盛輝
51		55	吉村　勝也		
52					
53			津留　俊一		

注、１、特…特別志願　少…少尉候補者　幹…幹候
　　２、戦隊の編成定員　104名

戦隊長は全将校を集め、明日軍使を派遣するに決し、最悪の事態を考え配備の強化を令した。

〇８月17日　木林中尉以下四名を九時三十分出発させ一二〇〇帰隊させ米軍司令官と戦隊長との会見を協定す。

〇８月18日　戦隊長以下十一名、渡嘉敷村落にて会見し、無条件降伏を承知するも、上級部隊指揮官の命令の受領を米軍側に要求した。

〇８月19日　戦死者の遺体蒐集を行ない荼毘に附した。

〇８月20日　各隊の兵器を集積し東方皇居を拝し兵器決別式を実施。

〇８月23日　米国歩兵第二四聯隊ハビラン・A・N・カンノリー陸軍中佐との間で無条件降伏の調印を行う。調印は和英文で認（したた）められ、双方が原本を保有した。（復員時提出）

〇８月24・25日　戦傷者を担送し座間味島の米軍野戦病院に入院させた。

〇８月26日　戦隊長以下健在者全員渡嘉敷米軍陣地にて武装解除後座間味収容所へ移動した。

八丈島・回天隊の終戦

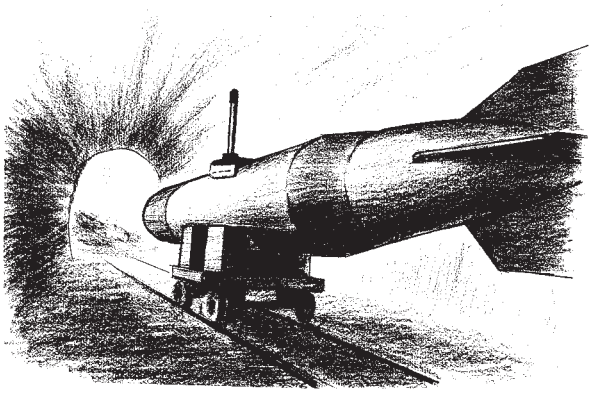
評議員　小灘　利春
八丈島海軍警備隊・回天隊長

昭和二十年二月、硫黄島に米軍が強襲上陸、迎え撃った日本軍二万は激闘三十余日の末、遂に玉砕した。米軍も日本軍を上回る二万九千の死傷者を出しながらの占領であった。

硫黄島からあと、東京までの飛び石状に列なる島々のなかで、飛行場があるのは八丈島だけである。取られては困る要衝であるから、日本の陸海軍は兵力二万二千を投入して、徹底した要塞化を進めた。島の南北の山地に掘られた洞窟陣地は総延長六十キロに及ぶという。若し米軍がマリアナ、硫黄島と北上を続けた勢いのまま直接に関東への侵攻を企図した場合、八丈島を飛び越えることはないであろう。

人間魚雷「回天」は、本来は大型潜水艦に四基ないし六基づつ搭載されて、敵主力が停泊している前進基地に近寄り、発進して空母、戦艦を轟沈し、戦局の一挙転換をはかる戦略的な兵器である。しかし、戦火が本土まで迫る情勢となって「基地回天隊」が編成され、敵の上陸が予想される地域に次々と配備された。睦上基地の格納壕に隠れて待機し、侵攻部隊が現れたとき発進して、撃滅するのが任務である。

先ず「第一回天隊」の回天八基が二十年三月に沖縄に向かったが、便乗した輸送艦が那覇到着の直前に米潜水艦の雷撃を受けて沈没、全滅していた。八丈島には横須賀鎮守府の要請により「第二回天隊」回天十二基の配備が決まり、私が隊長を命ぜられた。基地整備の時期の都合から、先ず回天八基、隊員一二〇名で編成し、五月に壮行式で送られて進出した。



八丈島海軍警備隊の司令中川寿雄大佐は戦艦大和の砲術長から海軍砲術学校の教頭を経て着任、島の防衛態勢の強化に努めておられた。われわれに対して司令は「回天が敵の戦艦をやっつけて呉れれば、八丈を守り抜いて見せる」との言葉で、常々激励されていた。

陸軍部隊は木原義雄少将の率いる浦兵団（独立混成第六七旅団）約二万であった。榴弾砲は口径十五糎のみならず二八糎まで装備していた。

八月十五日の朝「玉音放送があるので、全員が聞くように」との連絡が警備隊本部からあって、回天隊の本部であった東京都蚕業試験場の広い板敷きの部屋に隊員を集め、整列して聞いた。

ラジオのスピーカーから流れる声は、電波妨害を受けて「パリパリ、ガーガー」という強い雑音が入り、途切れ途切れにしか聞こえない。陛下の御声とは思われるものの、意味が全然、掴めなかった。多分「非常の事態につき、一層奮励努力せよ」との御趣旨であろうと推察して解散し、私は直ちにサイドカーを用意して、八丈島の南側の山地、三原山の中腹にある海軍警備隊の本部に向かった。

放送内容が別途、暗号電報で入っており、中川司令は私に「これは戦争終結である。しかし背後に事情があるかも知れない。また平穏裡に収拾がつくかどうかも判らない。島に敵が来れば、撃滅する。戦機はこれまでよりも却って近づいたと思わねばならぬ。一層警戒を厳にし、士気を高揚せよ」と指示された。

戦争が打ち切りとは、予想もしなかった事態である。自分がどうあるべきか判断してきた基準が突如、消えて無くなった。先ず胸に浮かんだのは「自決」であった。「死にたい」という感情ではなく、自分は死ぬべきであるという冷静な思考であった。力及ばず、一命を以て国家、国民を守るべき自分の任務を果たせぬうちに事が終わった。その申し訳なさが先に立った。

これまで、回天の搭乗員となって略一年のあいだ「二、三週間ほどのちにも生きている自分」というものが考えられなかった。共に生命を捧げる筈であった大津島の、戦死した数多くの同期生や、予備士官の仲間、また下士官搭乗員たちの顔が瞼に浮かんでいた。

だが、明白な眼前の急務は「敵が来れば戦う」ことである。来れば真先に回天が発進する。その機会が、この異変で一挙に近づいたと考えるべきである。中川司令の指示は納得できる。

「気落ちしていてはならない」と自らを奮い立たせ、隊に帰りつくと状況を皆に伝え、いつでも回天が発進できる構えをとった。「貴様たちの命は貰った！」と私が叫んだと、戦後になって搭乗員達がからかうのはその時の話である。

回天隊通信室の九三式全波受信機を自分専用に取りこんで、暇さえあれば内外の短波、中波の放送を聞いて情勢把握に努めた。通信兵六名が各種電報を受信、翻訳しているが、更に警備隊本部に時折り赴いて、機密電報を調べたりしているうちに、事態が段々と呑み込めてきた。

案の定、終戦後三日経った八月十八日に、ソ連軍が千島列島に侵攻を開始して、最北端の占守島に上陸、殊更に戦闘を仕掛けて来て、双方に大量の死傷者を出していた。

敗戦のショックは、戦闘準備強化の時期を挟んでいたので徐々に来た。隊内も、島内の海陸各部隊も、洋上の離島の為もあろうが混乱はなく、十一月に復員が終わるまで、軍隊の秩序が整然と保たれた。私の自決の思案もうやむやになった。

八月二十四日、陸海の全軍が一斉に実弾射撃を行った。「苦心して折角徹底的な戦備を整えた各陣地の砲と機銃を、一度も火を噴くことなく放棄するのは無念である」と、一日だけの集中射撃を実施した。大型砲は主に、島の南北の高い山地にあり、飛行場を指向していた。その日、各方向からの砲弾が空を切り裂く「シュルシュルシュル！」という音が一時期、途切れることなく頭上を飛び交った。まさしく「十字砲火」であった。

回天隊は底土海岸で搭乗員、士官は拳銃で、他は全員が小銃で、浜辺に並べた標的を撃った。

武装解除の米国艦隊が来たのは十月二十八日であった。朝早く、見張所から「アメリカの戦艦が現れた」との通報があったので、私は西海岸、八重根の港にサイドカーで急行した。岸に近く投錨していたのは新鋭の大型巡洋艦一隻と重装備の艦隊型駆逐艦三隻、フリゲート艦一隻の艦隊であった。巡洋艦は三連装の二〇糎砲九門の一斉俯仰、旋回を繰り返し、我々を威嚇しているように見えた。この時、大型発動艇で米艦に赴いた中川司令は、戻るなり私に「ああ驚いた」と、交渉状況を話された。

大発が旗艦の舷梯に近づくと、米軍は「近寄るな」と制止し、上の方から「回天はどうしているか？」と聞く。司令は回天隊に警戒待機を命令したままであったが「これはいかん」と機転をきかせ「回天は信管をはずして、動けなくしてある」と、大声で答えると「それなら上がってこい」と乗艦を許され、交渉に入ったとのことである。

回天を彼らが如何に恐れていたかの証明であるう。司令の返答次第では米国の艦隊は直ちに一斉抜錨、戦闘態勢をとったかも知れない。本当は、回天は信管を着けたままであり、何時でも動けた。昭和二十年四月、戦艦大和の水上特攻艦隊が沖縄に向かい、挫折して以降もなお、太平洋を行動して米軍艦船に攻撃を続けていた日本の艦艇は、回天を搭載した潜水艦だけであった。

八丈島の武装解除は回天が真先であった。旗艦はソロモン海で日本艦隊に撃沈された先代「クインシー」の名を継いだ一三、六〇〇トンの重巡洋艦で、塗装も新しいピカピカの新造艦であった。翌朝その士官たちが多数ゾロゾロと回天基地にやって来た。かなりの年齢と見える艦長が「回天を二分間だけ見せてほしい」と鄭重に私に言う。二基ほど、壕の前の明るいレールの上に牽き出していたので「どうぞ」と言うと、踏み台に乗ってハッチの上から艇内を覗きこみ、二分どころではない、長い時間見たあと御礼の言葉を述べた。ほかの士官たちも代わる代わる覗いていた。

米軍の士官たちに回天の戦果を訊ねると、呼び出されて現れた情報担当士官は、途端に実に渋い顔になって「回天による損害は一切発表を禁止されている」と言ったまま、口を「へ」の字に結んで開かない。別の士官が「怖いのは回天だけだった」と言ってくれた。

武装解除に来ても、私は米軍に頭を下げない積もりでいた。確かに日本海軍は、結局は徹底的に叩かれて終わった。「だが、回天は敗けていないぞ」と言う自負が私にはあった。ところが米軍は意外なほど我々に丁重、低姿勢なので、拍子抜けがした。海軍同志のよしみで紳士的に振る舞うといった感じばかりでなく、明らかに回天に対しての敬意を示してくれた。『軍人としてそれぞれ国家のため戦う義務がある以上、意気地のない軍人は軽蔑され、良く戦う者は、敵味方を問わず尊敬を受ける』と言うことであろう。

回天の見学に来た翌朝、米軍が来て武装解除が始まった。最初米側は「回天をトンネルのなかで全部爆破する」と言ったが、私は「処分ならば自分た

ちの手でやる。だが、回天の火薬は一基で一・六トンもあるから、山が吹っ飛ぶ。民家が迷惑するから駄目だ」と拒絶し、実用頭部を切り離して海中に投棄し、胴体だけをトンネルに納めて爆破するように主張し、その通り決まった。

頭部は回天が発進する斜路から次々と海中に落とし込み、トンネルに残る胴体は、自分達の分身を葬るような気持ちで、我が手でダイナマイトを仕掛け、スイッチを入れた。轟然たる爆発音と共に洞窟の入り口がドッと崩れ落ち、中に入っての確認は出来ないままに米軍はOKした。

回天八基の全部の処置が終わって以後、私は海軍部隊の窓口になって陣地の案内と武装解除の折衝に当たった。米軍の指揮官と一緒に島内の陣地を廻って処分方法を決めてゆくのであるが、彼等は持ってきたジープの、運転席と反対側の右の席が最上だと言って、私の指定席にしてくれた。米軍の士官たちは後部の席に詰めて把まっていた。

八糎砲、一二糎砲や二五粍、一三粍の機銃が八丈の民家に多い石垣の間など、思いがけない所に隠れて多数配置されていた。その巧妙さに案内する私の方まで驚いたが「爆破すると周囲の民家が傷む」と私が言えば、米軍はそれぞれ砲身の一部を熔断するだけで済ませてくれた。

八丈島の陸海軍部隊の復員が始まって、回天隊の後発組が復員船に乗り込むため、十一月九日に八丈島東岸の神湊の芝生の上に整列していたとき、いきなり目の前の波止場で大爆発が起こった。

大量の砲弾と爆薬を連日、此処で大発に積み込んで沖合いに投棄しており、こぼれた黒色火薬が岸壁の上に厚く溜まっていたという。「作業立会いの米兵が煙草の吸殻を捨てた途端に爆発した」と聞いた。

山のように積み上げられた砲弾、火薬に引火して、爆発が連続花火のように切れ間なく続く。我々には為す術もなく、帰国直前に隊員が怪我をしてもつまらぬので、破片が飛んで来ない所まで退避して、鎮まるのを待った。作業要員として波止場にいた陸軍の兵士二四人が、無惨にも故郷に帰る日を前に死亡した。負傷者は約四〇人という。

米側も喫煙の当人か、一人が行方不明のほか、草むらのなかに全裸の白人兵が一人、着衣が全部燃えてしまったのか、脱ぎ捨てたか、虫の息で倒れているのを発見し、米軍下士官を捜し出して引き渡した。病院に収容されたが、全身火傷で助からなかったとの報告を後で聞いた。二〇歳前の少年のような兵であった。

阿鼻叫喚の港で、作業中の陸軍の兵士たちは海に飛び込んで逃れた。港内の狭い水面に点々と頭だけが黒く浮かんで見えた。「早く泳いで逃げてくれ」と心のなかで叫ぶが、その黒い点は殆ど動いているように見えなかった。泳げない人も多かったであろう。

そのとき、灰色塗装の米海軍の大発艇が、一面の黒煙に包まれて天も地も真っ暗のなか、爆発が続く港の狭い水路に乗り入れ、機敏に一人一人拾い上げて廻った。急激な前進、後進を繰り返すエンジンの「グオン・グオン・グオン」と腹に響く唸りは今も忘れられない。

下士官らしい艇長一人だけで舵輪とクラッチを操作して大発を操縦し、艇首で数人が泳ぐ日本兵を引き揚げていた。自分たちも何時吹き飛ばされるかも知れないのに冷静沈着な彼等。敵軍であった兵士達でも命懸けで救助につとめるその人道的な行動に、私は深い感動を覚えた。

全島武装解除の作業も終わる頃、八丈島支庁長の世話で行政の中心、大賀郷にある旅館で、米軍の士官たちと我々海軍の士官との懇親会が開かれた。日本酒のほかに八丈名物の焼酎が出て、和やかな宴会になった。

途中、私は立って「このたびは、アメリカを理解する機会を得て、今はもう敵愾心は消えた。ソ連の行動は、私は容認出来ないのであるが」と、ひとこと感想を述べた。相手の同盟国への非難が当然、反発を買うであろうと覚悟しながらも、私は言わずにはおれない気持ちであった。

忽ち、猛烈な反応が沸き起こった。何とそれは「米国は今直ぐ起って、ソ連を撃て」というのである。和室なので座布団に座っていた米軍士官が、口々に叫ぶうちに興奮が高まり、全員が立ち上がって拳を突き挙げ、腕を振り真剣に気勢を揚げていた。

ソ連は、日本が行き詰まったのを見て、二発目の原爆投下の日に、日ソ不可侵条約を一方的に破って侵攻、僅か一週間の戦争なのに、終わった後までも「火事場強盗」を働いていた。世界がようやくにして得た安寧を、ソ連が再び攪乱する。たとえ味方であっても、その暴虐に対して怒りを率直に表す米国人の正義感を、私は目の当たり見た。

思いがけない成り行きである。それに驚きながらも、私の胸のなかに、こ

れまでは敵であった彼らであるが、一層の共感を深めていった。

二十年十一月下旬、八丈島最後の復員船、橘丸で中川司令とともに私は内地へ引き揚げた。帰る筈もなかった回天の訓練基地であるが、大津島に着くと、かって溢れていた精気、活気は消え去り、ひっそりと静まりかえっていた。

八丈回天隊の搭乗員八名（底土基地）左端　小灘

多聞隊・伊三六七潜水艦の終戦

全国回天会　小灘　利春

伊号第三六七潜水艦は回天特別攻撃隊・振武隊として昭和二十年五月、回天五基を搭載して山口県大津島基地を出撃し、沖縄東方海域で行動した。敵船団を発見して回天二基が発進したのは、奇しくも海軍記念日の五月二七日であった。

同艦第二次の多聞隊では、母潜水艦六隻中の一艦として七月十九日に大津島を出撃し、沖縄南東四百浬付近の洋上で航行中の敵輸送船団を求め行動した。艦長は今西三郎大尉。回天搭乗員は藤田克己中尉（兵科三期予備士官）安西信夫少尉（兵科四期予備士官）岡田純、吉留文男、井上恒樹各一等飛行兵曹（第十三期甲種飛行予科練習生出身下士官）の五名であった。

しかしながら、連日の荒天に翻弄された上、敵船団には遭遇せず、回天が発進する機会は遂になかった。行動が長期にわたったため、八月十日、第六艦隊から帰投命令を受けて、五基の回天を甲板に載せたまま帰途に就いた。広島、次いで長崎への原爆投下は新聞電報で知った。

八月十五日の正午は豊後水道を北上中で、宇和島の沖あたりであった。重大放送があるということで、全員がラジオ放送を聞いたが、雑音が強く、殆ど聞き取れなかった。一時間後に玉音放送の内容が暗号電報で入ったので、今西艦長は状況を明確に把握できた。しかし戦時の航海中であり、何処に如何なる危険が伏在しているか分からないので、乗員には一切知らせず、そのまま航行を続けた。

夕刻五時過ぎに大津島に入港、回天搭乗員五名は直ちに基地に上陸した。間もなくクレーン船が来て回天を吊り上げ、艦から下ろした。

一段落して、艦長は全乗員を甲板上に集めて戦争終結の旨を伝え、混乱のないよう訓示した。そのあいだに巨きな月が昇っていた。説明する艦長にはそれが深い印象として残っている。

伊三六七潜水艦は翌十六日の午前八時、出港して呉に向かい、作戦行動を終った。

大津島の基地では正午の玉音放送を全員に聞かせるようラジオ受信機を各所に用意したが、搭乗訓練と兵器整備作業は中断できないので続行した。

この基地は特攻最前線を意識し獅子奮迅の練成を続けていたのであるが、突如迎えた終戦という思いも掛けぬ事態に混乱した。保有する回天全部を四八時間以内に実戦に使用できるよう緊急整備した。搭乗訓練は普段どおり何日間か続行した。十六日、平生基地から回天特攻・神洲隊の伊一五九潜水艦が日本海に向け出撃していった。その平生では十八日未明、橋口寛大尉が回天の操縦席で拳銃自決した。

終戦に反対し、決起を叫ぶ搭乗員たちが多かったが、呉鎮守府長官の金沢正夫中将が八月二一日に水上機で飛来して説得に当たったので、ようやく沈静化した。

各訓練基地、出撃基地の回天搭乗員たちは早急な復員を指示され、大津島でも二五日頃には殆どの人員が島を去ってゆき、活気に溢れていた大津島の回天基地も急に寂しくなった。

23ページより続く

ビスマルク諸島	96,400
樺太千島	91,000
ビルマ	71,500
スマトラ	59,600
ジヤワ	50,100
ボルネオ	29,500
ニューギニア	33,800
ソロモン諸島	25,100
南西諸島	52,100
その他	153,200
合　計	3,553,600

基地回天隊出撃歴一覧

全国回天会（小灘）

回天隊名	出撃基地	配備基地 所轄	進出月日	隊長氏名 出身	配備 回天	損失 搭乗員	損失 回天
第 1	光	沖縄本島 沖縄特別根拠地隊	3.13	河合不死男 兵72	8	7	8
第 2	大津島/光	東京都八丈島 八丈島警備隊	5.15	小灘　利春 兵72	8	0	0
第 3	大津島	宮城県油津 33突撃隊	5.5	帖佐　　裕 兵71	9	2	0
第 4 / 7	光	高知県須崎 23突撃隊	5.24-	近江　　誠 山地）兵70	12	0	0
第 6 / 7	光/平生	高知県浦戸 23突撃隊	5.21-	那知　　勧 機54	12	0	0
第 5	大津島	宮崎県南郷栄松 33突撃隊	6.17	永見　博之 予 3	7	0	0
第 8	平生	宮崎県細島 35突撃隊	7.8-	井上　　薫 兵73	12	0	0
第 9	光	宮崎県内海 33突撃隊	7.22	重岡　　力 予 4	6	0	0
第10	大津島	宮崎県大堂津 33突撃隊	8.14	佐賀　正一 予生 1	4	0	0
第11	大神	愛媛県麦浦 21突撃隊	8.3	久掘　弘義 予 3	8	0	0
第12	大津島	千葉県小浜 12突撃隊	8.6	峰真　佐雄 兵73	6	0	0
第16	大津島	和歌山県由良白崎 22突撃隊	8.6	武永　惟雄 予 4	4	0	0
第13	光	静岡県網代 15突撃隊	未配備		(10)		
第14	光	神奈川県小田原 11突撃隊	未配備		(8)		
第15	平生	愛知県大井鳥羽 13突撃隊	未配備		(4)		
第17	未定	未定			(8)		
第18	未定	未定			(8)		

回天作戦出撃潜水艦リスト

▲＊：戦没　全国回天会

隊名	潜水艦/次	出撃地	出撃年月日	作戦水域	先任搭乗員	損耗 搭載	搭乗員	回天
菊水隊	イ36 ①	大津島	19.11.8	ウルシー泊地	吉本健太郎	4	1	4
	イ37 ①▲	〃	〃	コッソル水道	上別府宣紀＊	4	4	4
	イ47 ①	〃	〃	ウルシー泊地	仁科　関夫＊	4	4	4
金剛隊	イ36 ②	大津島	19.12.30	ウルシー泊地	加賀　谷武＊	4	4	4
	イ47 ②	〃	12.25	ホーランディア	川久保輝夫＊	4	4	4
	イ48 ①▲	〃	20.1.9	ウルシー泊地	吉本健太郎＊	4	4	4
	イ53 ①	〃	19.12.30	コッソル水道	久住　宏＊	4	3	4
	イ56 ①	〃	12.21	アドミラルティ	柿崎　実	4	―	―
	イ58 ①	〃	12.30	グアム	石川　誠三＊	4	4	4
千早隊	イ44 ①	大津島	20.2.22	硫黄島	土井　秀夫	4	―	―
	イ368 ①▲	〃	2.20	〃	川崎　順二＊	5	5	5
	イ370 ①▲	光	〃	〃	岡山　至＊	5	5	5
神武隊	イ36 ③	大津島	20.3.2	硫黄島中止	柿崎　実	4	―	―
	イ58 ②	光	3.1	〃	池淵　信夫	4	―	2
多々良隊	イ44 ②▲	大津島	20.4.3	沖　縄	土井　秀夫＊	4	4	4
	イ47 ③	光	3.28	損傷中止	柿崎　実	6	―	―
	イ53 ―			触雷中止		6	―	―
	イ56 ②▲	大津島	3.31	沖縄	福島　誠二＊	6	6	6
	イ58 ③	光	〃	沖縄西方	池淵　信夫	4	―	―
天武隊	イ36 ④	光	20.4.22	沖縄東方	八木　悌二＊	6	4	4
	イ47 ④	〃	4.20	〃	柿崎　実＊	6	4	4
振武隊	イ366 ―			触雷中止		―	―	―
	イ367 ①	大津島	20.5.5	沖縄東方	藤田　克己	5	2	2
轟隊	イ36 ⑤	光	20.6.4	マリアナ東方	池淵　信夫＊	6	3	3
	イ361 ①▲	〃	5.24	沖縄東方	小林富三郎＊	5	5	5
	イ363 ①	〃	5.28	〃	上山　春平	5	―	―
	イ165 ①▲	〃	6.15	マリアナ東方	水知　創一＊	2	2	2
多聞隊	イ47 ⑤	光	20.7.19	沖縄東方	加藤　正	6	―	1
	イ53 ②	大津島	7.14	沖縄比島	勝山　淳＊	6	4	4
	イ58 ④	平生	7.18	パラオ／沖縄	伴　修二＊	6	5	5
	イ363 ②	光	8.8	沖縄日本海	上山　春平	5	―	―
	イ366 ①	〃	8.1	沖縄／サイパン	成瀬　謙治＊	5	2	3
	イ367 ②	大津島	7.19	沖縄／グアム	藤田　克己	5	―	―
神州隊	イ159 ①	平生	20.8.16	日本海	斉藤　正	2	―	―
	イ36 ―			損傷終戦中止				

合計10隊　参加潜水艦16隻　延出撃32回　内・潜水艦喪失8隻
潜水艦作戦戦没回天搭乗員数80名　同延出撃乗員数148名（00.3小灘）

未発に終った特攻作戦（烈作戦）滑空機による沖縄飛行場殴り込み

田中　賢一

この記事は既に46号に掲載済みの「未発に終った特攻作戦」という題のものと重複する箇所が多いが、終戦特集の中に含ませる意味で一部加筆して掲載する。

挺進戦車隊長だった私の関係したこと

部隊は宮崎県中部の川南村唐瀬原に駐屯し、第一挺進団長の指揮下にあったが、二十年五月本土決戦に備えて鹿児島県財部に司令部をおく第五十七軍の指揮下に入られ、都城平野に移駐を命ぜられた。そこで隊本部を三股村に置き、同村と隣の中郷村に入った。与えられた任務は都城平野の対空挺だった。

特攻隊差出しを命ぜられる

確か七月だったと記憶するが、航空総軍から沖縄特攻のため、指揮官を含む二十四人の自動車手を出せという意味の電報を受けた。空挺部隊の指揮系統でいえば私の属する指揮官は第一挺進団長であり、本土決戦については第五十七軍司令官である。不審に思い第一挺進団司令部まで連絡将校を走らせた。唐瀬原まで自動車で四時間ばかりかかる。

連絡将校が帰ってきて知ったことは、機関砲を搭載した96式小型トラックを「ク」―8に載せ沖縄の敵飛行場に着陸させ、地上の敵機を射って廻るという計画だ。小型トラックは一二輌操縦手は一車二名で、砲手も二名で、砲手は挺進第二聯隊から出す、指揮官は将月中尉と決定している。全般の指揮官は戦車隊から出せ、というものだった。なお決行は八月十六日頃という。

これを聞いて私は吃驚した。夜間グライダーを曳いて飛行し、どの辺で切り放すか知らないが、果して敵飛行場にうまく着陸できるだらうか。しかしこの件については当然滑空飛行戦隊長が同意したのであらうから、いくらかの確率で目的地に着陸できるだらう。それから先のことはどうして俺の意見をきかぬのか、航空総軍の参謀が机上で考えたようにはいかぬ。この小型トラックは四輪起動であっても、路外性は殆ど期待できない。飛行場の平坦なところに着陸できればよいが、隣接地の畠にでも着陸したときは、全く動きがとれぬそんなものを使うよりも、先般義烈空挺隊がやったように、徒歩兵を載せていって暴れまくった方がよっぽどましだ。その頃沖縄から飛来する敵小型機で南九州の鉄道は寸断され、地上軍の展開が阻害されること甚だしいので、航空総軍ではこのような愚案を立てるのだ。

いろいろ考えたが、計画がここまで進んでいては今更否とは言えぬ。私は自動車中隊長広田大尉を呼んで概要を話した。勿論私が危惧の念を抱いていることなどは言はぬ。広田大尉は幹部候補生出身の特別志願将校、私が日常戦車中隊や歩兵中隊の訓練に熱心の為、敵が上陸して自分の中隊が置いていかれるとでも思ったのか、爆薬を背負って敵戦車の下に飛込む訓練を盛んにやっていた自分が真先にやると言っており、それは心底からそう思っているようだった。

広田大尉は私の話を聞くや、目を輝かして「私にその指揮官をやらして下さい」と言った。そして間もなく二四人の編成表を持ってきた。将校は大城中尉と鎌田少尉、ほかは下士官兵だったが下士官が多かったように記憶している。福生（現在の横田基地）まで出せという命令だったが、挺進第二聯隊のいる唐瀬原まで自動車で送り届けた。作戦に使う車は航空総軍で準備するというので、小銃と拳銃だけ持たせて出した。

発進基地は新田原と聞いていたので、その時は見送りに行こうと第一挺進団司令部と連絡をとっていたが、終戦になってしまった。広田大尉以下は福生で復員してしまった。彼の生家は東京の本所、妻子は部隊が三股に移る前に東京に帰し山梨県に疎開したと聞いていたが、復員帰郷先は分らなかった。

二十五年頃だったか、総武線中山駅前で彼が露天商をしているのにバッタリ出会って、福生に行ってからの行動を聞くことができた。総軍で準備してあった小型トラックは我が隊の持っているのと同じで、その荷台の上に急造の架台があり、航空機搭載の二〇ミリ機関砲が取りつけてあった。「ク」―8から卸下する訓練をやっていたら思いもよらず終戦になった。誰の指導か忘れたが徹底抗戦のビラをガリ版で刷って、重爆を飛ばして撒いたということなど、話してくれた。この人はその後十年位して病没した。

広田敏夫さんの奥さんとは今もお付合いしているが、あの時特攻作戦が行はれていたら、私は一生精神的負担を免れなかったであろう。

滑空飛行戦隊選出の特攻隊員

この戦隊の根拠地は西筑波飛行場だったが、敵の空襲激化に伴い戦力温存と訓練のため、20年5月北鮮の咸興郊外の宣徳飛行場に移っていた。

以下戦後この部隊にいた人達の懐古録「音なき翼」に記述してあることを引用する。

宣徳に来てからの訓練は特攻の準備のようなもので、滑空機の操縦者は敵中に強行着陸すると同時に、歩兵と共に地上戦闘をするわけで、最新の戦訓を生かした戦闘法の訓練に励んだ。百式機関短銃の射撃、爆破、戦車肉迫攻撃、夜間の斬込み行軍訓練などは、操縦者としては相当厳しいものであった。飛行訓練もこれに劣らず猛烈を窮め、連日の夜間編隊及び降下訓練、夜間航法などで、わずかの翼灯を頼りに曳航される「ク―8」の中には、操縦者の必死の目が光っていた。紫外線灯を計器板にあて、僅かに見える計器を頼りに操縦する姿には鬼気せまるものがあった。

特攻編成

ついに三ケ年に亘る訓練が、挺進作戦の可能性を立証する時が来た。

七月中旬戦隊長が東京出張から帰って、各中隊長を通じ特攻志願者を募った。「熱烈希望」「熱望」「希望」の三つに分けて志願するよう通達があった。七月二十五日志願者の中から長男を除き適任者一二組が選出され、特別訓練に入った。敵飛行場の航空写真を毎日見ながら、強行着陸は可能か、曳行機の遅い速度で如何に夜間とはいえ、目的地の手前三〇キロまで辿りつけるだらうか、そんな話ばかりであった。

福生飛行場への前進命令は七月二十七日に下ったが、天候不良の為宣徳（朝鮮）を立ったのは八月五日になった。送る者送られる者すべてが感無量で、手を振って送る者もやがて後に続く者である。

われわれを迎えた福生飛行場は緊迫した空気に満ちていた。特攻組の宿舎は多摩川べりの三井の啓明寮という別荘で、夜は多摩川の川原に出て暫しの慰めとした。

落下傘部隊の兵士を迎え、いよいよ総合訓練の夜間飛行に入った。航空総軍の参謀は、敵の制空権下に速力の遅い九七重が重装備の「ク」―8を曳いて、果たして目的の地点まで行けるか検討していた。これまで温存していた戦爆連合の攻撃を行い、一時的に制空権を得て戦闘機の護衛をつけて決行するという構想を明らかにした。しかし既でに総てが遅かった。遂に決行にいたらず終戦を迎えた。

九七重でク―8を曳航　筑波山上空

「ク―8」滑空機は97重を曳航機とし、兵員15～20名あるいは山砲、47ミリ対戦戦車砲、20ミリ高射機関砲、小型自動車等を搭載できた、この頃落下傘部隊は携行できる兵器が制限されるので、空挺部隊の主体は滑空部隊に移りつつあった。欧州における大空挺作戦、例えばノルマンジー空挺作戦など、連合軍空挺部隊の主力は滑空部隊になっていた。我が国に於いても、挺進集団の兵員数は落下傘兵と滑空機搭乗部隊の兵員数とは概ね同数だった。滑空機操縦者は敵地に着陸後基地に戻ることは考えていなかったので、多く養成しておかなければならなかった。滑空飛行戦隊は曳航機である97重の倍数の「ク－8」を保有していた。

未発に終った特攻作戦
海軍の剣作戦

発端

小沢海軍総司令長官は6月24日寺岡第三航空艦隊司令長官に剣作戦の準備を命じた。剣作戦とは横須賀鎮守府所属の呉鎮第一〇一特別陸戦隊（司令は山岡大二少佐）と空挺飛行機隊二〇機（準備機、三、五、十航艦から差出しの一式陸攻二五機、乗員は二〇組）をもってサイパンのB―29の基地に強行着陸攻撃しようとするもので、作戦準備基地を三沢とした。

山岡特攻隊の作戦準備

7月に入ると山岡特別陸戦隊は三沢に集結し、訓練を開始した。その模様を山岡司令は次の通り書き残している（この人は既に故人）

集まって来た者が作戦の内容が解るにつれて「特攻必死」という強烈な作戦の性格、指揮官以下総員が同一目標に突込むという盟友意識が芽生えてくると、始めは何となく馴染まなかった陸と空も急速に親しみを増し、搭乗組割が決ったその日から、一機分づつ同一部屋に居住させ、部屋の入口には部屋の先任者の名前をとって「〇〇一家」と掲げるありさま。作戦部隊員の目の輝き、顔の色、態度動作が時々刻々といえる位に変化して、団結は堅く士気は高揚の一途をたどるかに見受ける。

巌谷少佐（肩書きは七〇六空飛行長）と私は一部屋に陣取る。巌谷少佐は指導官と呼称することにし、指揮官と指導官で万事を、広汎な作戦、人事、器材万般に亘る事項を処理してゆく仕組みとする。

陸軍挺進部隊が加はる

このように山岡部隊が訓練を進めている間に、大本営陸海軍部協議の上陸軍挺進部隊から一部兵力を差し出すことになった。

7月末のある日、当時横芝に在った挺進第一聯隊長の山田中佐は、命令受領のため航空総軍司令部に出頭を命ぜられ、本部付きの園田大尉を帯同して市ヶ谷台上に出向いた。命令とは、「サイパン攻撃ノタメ二個中隊ヨリ成ル特攻隊ヲ編成シ海軍総隊司令長官ノ指揮下ニ入ラシムベシ」というものであった。

そのあと大本営陸軍部の晴気参謀が具体的な説明をした。これは海軍が計画した作戦で、一式陸攻二十数機に搭乗して、サイパンのアスリート飛行場に着陸する作戦であるが、陸上戦闘については陸軍部隊にお願いしたいというので、最精鋭部隊を差出すことになった。海軍ではこれに併せて潜水艦で上陸することも考えている。そのような説明があって、別れるとき、晴気参謀は園田大尉に、しんみりした口調で言った。

「この戦争、勝っても負けても我々は生きておれないだろうなァ」と。

園田はこれを聞いて、特攻隊を送り出す上級司令部の苦衷はさもありなんと、唯それだけを感じとったが、終戦直後晴気少佐が市ヶ谷台上で自決し、晴気少佐とサイパンの関係を知るに及び、園田は改めてそのときの状景を思い起こした。

晴気少佐は参謀本部にあってマリアナ諸島の防備計画を担当し、敵の進攻間近になって、マリアナの第三十一軍参謀に補せられ、赴任しようとしたが既に交通が絶たれて行くことができなかった。引き続いて参謀本部にあって、サイパン玉砕の報に接し、その後サイパンに進出したB―29が猛威を逞しくするのをみて、責任万死に価すると思っていたのであろう。その気持が園田に対する一言となった。

さて、山田聯隊長と園田大尉は、かねて覚悟していたものがきたという感じで市ヶ谷台を辞去し、横芝に向かった。千葉駅まで来たとき空襲警報で動けなくなった。避難する市民の群をみて園田は言った。

「聯隊長殿、今度のこと一つ私が死にませう。どうせ早いか遅いかの違いですから」

これで指揮官は決定した。特攻隊の編成は園田に一任され、第一、第二の両中隊をそのまま連れて行くことになった。第一中隊長は山本章大尉、第二中隊長は大屋稔大尉だった。

横芝の町民は特攻隊の出陣と聞き、紅白の餅を搗き幟を立てて行を壮んにした。戸山学校軍楽隊が「特攻隊」の曲を奏でる中を、園田隊長は例の長刀を帯び部隊を指揮し、聯隊長に申告した後、見送りの将校に向かって、「じゃァ、お先に」と一言別れを告げた。

園田隊長は偵察機で、部隊は列車で、それぞれ三沢に向かった。

八月初めに三沢に全員勢揃いした。海軍総隊司令長官小沢治三郎中将は「全員特攻の秋が来た。陸海軍心を一にし、大痛撃をサイパンに加えようではないか」と訓示し、天雷特別攻撃隊と命名した。

編成した一式陸攻三〇機の飛行隊と園田隊をもって、第二剣作戦部隊を作

ることになった。

挺進飛行機隊空襲で壊滅し　一ケ月延期と決定

はじめの計画では、満月の7月25日前後に実施する予定だった。ところが7月14日三沢飛行場は艦載機の二回に亘る攻撃を受け、挺進飛行機隊の陸攻一八機が炎上してしまった。山岡司令は残りの機で作戦決行を主張したが、軍令部では8月18日以降に実施と決めて、第二剣作戦部隊も同時に参加することになった。初めはサイパンだけを目標としたが、新にグアムとテニアンを加え次の通り決定した。

第一剣部隊　グアム　二〇機
　　テニアン　一〇機
第二剣部隊　サイパン　二〇機
　　テニヤン　一〇機
発進基地　木更津・厚木・香取

着陸前に烈作戦部隊が各目標を攻撃することも決まった。

烈作戦とは銀河三〇機（半数は機体下方に25ミリ機銃二〇挺を装備、半数は小型爆弾多数搭載）をもって、各目標を攻撃する作戦であり、これも特攻作戦である。

8月6日三沢において聯合艦隊司令長官小沢治三郎中将の視察があり、軍令部員高松宮殿下の台臨のもと、軍令部次長大西滝治郎中将も随行し、士気愈々高揚した。千歳にある第二剣部隊からは、指揮官園田大尉が参加した。

話は前後するが、第二剣部隊は三沢で計画を練り、千歳に行き訓練することになって、部隊は鉄道で、隊長以下数名は飛行機で千歳に向かった。8月6日千歳東飛行場に集結完了した。現地の海軍部隊では、園田隊の入る兵舎に鳥居を建て、園田神社と大書してあった。鳥居は靖国神社に行ってからでよいのにと思ったが、悪い気はしなかった。（以下園田隊に関することは故園田直氏談、この人は後に外務大臣や厚生大臣を歴任した）

先ず陸海軍一体の団結を固めることが先決である。陸海軍が起居寝食を共にし、救国の人柱となるよき士縁に結ばれたことを感謝しつつ、ひたすら訓練に打ち込んだ。

八日十五日の記録

第一剣部隊についてはこの時の纏まった記録が入手できず、山岡司令の著書に隊員の回想文が載っているので、その中から二点ばかり転記する。

「今日一二〇〇天皇陛下のご放送があるので、総員聞く様」との内容の隊内放送を耳にした。その時ピンと感じたのは、ああ戦争は益々苛烈を極めるのかと思った。

早や昼食後、真夏の太陽の照り続ける三沢航空基地山岡部隊本部前広場に総員集合して、ラジオを聞く。且又、初めて天皇陛下のお言葉を聞く等、恐縮して時の来るのを待っていた。定刻に放送は開始されたが、雑音がガアガアと鳴り、天皇陛下のお声は普通のラジオ放送より小さい様であり、又言葉の内容は難かしく、私には何の事柄かさっぱり聞き取れない。ただ、本土決戦をやるとき言う意気込みもない。皆暫く沈黙していると、山岡司令が号令台の上に昇り、「本部隊は今後本司令の元の指揮下に入る」と言われたのみで、すぐ解散された。兵舎へ帰る途中、誰れとなしに「日本は敗けた」という声が伝わって来る。然し私としても、今の今まで決死本土決戦の決意から敗戦とは全く信じられない。兵舎へ帰っても、皆ぼう然として兵舎内の横の壁にもたれて、命令伝達を待っていた。それから暫くしてから本隊の伝令が来て「山岡部隊の作戦機密的な書類及び皆が持っている写真は一切残らず焼却する様」にと命令が下された。

八月十五日玉音を聞き、何か聞きとりづらく、考えた事の無い結果の様で、互いに話し合って初めて、終戦だと解し、その内に敗戦と云うかつて経験の無い現実を確認。重い足を引きずる様に兵舎へ帰ると、放心状態の者、意気まく者等様々だった。中には突然、「佐世保鎮守府所轄、熊本県出身兵集合」の声掛り、「先祖の西郷どんに会わす顔が無い」との理由で、一時は集団自決の空気もあった。しかし山岡司令の「全員に告ぐ。お前達の命は、本官が預かっている。今後も一切、本官の命に依り行動されたし」との一言と、隊員達にも戒められ思い止まったのは、直にそれを受入れる冷静さと理解力、瞬時の判断力、わけても、司令以下隊員一丸となり、心と心の繋がる者の結団力に他ならぬ。

それ以外は依然として軍規、風紀は壊れず、厳粛に、整然と残務整理の、特殊服、兵器弾薬等の返却にと着々進み、大それた作戦未遂故、八月二十五日、自費にて各々の同郷者と共に帰郷。参謀その他上官への戦犯を気遣い、その後数年間、隊員同志の文通、交際等一切断ち、心して語らずの状態でした。

第二剣部隊については、園田直氏逝去後昭和五十九年にこの人を追悼する一書を作ったので、その中から該当部分を転記する。

八月十五日、重大放送ありと聞き、マリアナ攻撃に対し大元帥陛下親しく激励を賜るかと、ラジオの前に全員整列して固唾を飲んだ。玉音は聞き取り難かったが、共同宣言受諾ということの意味も判らず、園田隊長は「戦を一時ストップせよ」との仰せで、そのうち再行が発令されるであろうと説明し、自らもそう信じた。暫くして正式に停戦が命ぜられ部隊は騒然とした。

血気に逸る将校の間に次の二案が議論された。その一つは、予定通り発進基地厚木に前進し、天下の形勢をみること。この頃厚木の海軍航空隊から徹底抗戦の呼びかけがあり、厚木に行けば局面打開の方途が見出せるかも知れないと思った。もう一つは、北海道と本州は遮断され、北海道は別の国になるかも知れぬ。そのときは北海道に残り、ここの広大な天地で民族自立のため一働きしよう、という考えであった。

園田隊長は前者の案を採った。十七日、全飛行機に出動を命じ、乗れるだけの部隊を載せ、元ず松島飛行場まで飛んだ。厚木の状況がよく判らないので、松島で形勢を見ようとした。

松島に着き、陸海軍人に賜った終戦の勅語を拝し、承詔必謹に決した。マリアナに突入しようとしたこの飛行機をむざむざ敵に渡すことは忍びずと君が代のラッパを吹奏しつつ火を放った。搭乗員も空挺隊員も紅蓮の焔を眺めて慟哭した。総てが終ったのだ。身体の隅々にまで浸み込んでいた忠誠心が、行き場を失い、悶え苦しみ、やがて凍結し、茫然自失、身体の一切の動きまで止め、空しく焔を見詰めた。

その晩は瑞厳寺に泊った。松島の景勝と大伽藍に接すると、国破れて山河あり、日本の国にこの山河と伝統が存する限り、まだまだ亡びることはあるまいと一縷の光明を見出すことが出来た。

夜通し語り合った。後に続く者を信じて往った戦友のことを考えると、断腸の思いであるが、阿南陸相の遺書に、「神州の不滅を信じ」とあったことが伝えられ、神州不滅のためにこそ、我々が国家再建に挺進しなければならない。

園田隊長は自己の決心の遷り変りを、そのまま部下に語った。話しているうちにまた新たな決意と感激が湧き出て、やがて短い夏の夜は明けた。

園田　直

原爆搭載機の基地となっていたテニヤン
ここにも20機を向けることになっていた

終戦時の帝国海軍の編成

海軍総隊の新設

本土決戦を迎えるに当たり全海軍部隊を一指揮官のもとに置く制度が望まれた。陸軍は本土防衛の指揮統帥組織を強化するため、第一、第二総軍と航空総軍を設置したが、海軍は4月25日付戦時編制の一部改正を行って、全海軍を統括する海軍総隊司令部を設置しその指揮官として海軍総司令長官を置いた。海軍総司令長官は作戦に関し聯合艦隊、鎮守府、警備府、商港警備府及び海上護衛総司令部の司令長官を指揮することになった。

海軍総司令部設置に伴い、豊田聯合艦隊司令長官の海軍総司令長官兼務が、また聯合艦隊司令部職員の海軍総隊職員兼務が発令されたが、5月1日豊田大将以下の海軍総司令部職員は総隊が本務となり、聯合艦隊司令部職員を兼務することに発令された。

5月29日及川軍令部総長は軍事参議官に親補され、その後任に豊田大将が発令された。これに伴い同日小沢治三郎中将が海軍総司令長官兼聯合艦隊司令長官に親補された。

靖国神社を巡る雑音

会長　山本卓眞

終戦六十周年を迎える今年、小泉首相の靖国神社参拝をめぐり、議論が盛んであるが、聞くにたえない説も少なくない。特に無理解極まる中国の執拗な干渉が目立つが、彼らは対日外交政策としての日本攻撃であろうから説得は殆ど不毛であろう。そこでここでは国内特に政治家の不適切な言動を採り上げることにする。しかし先ず問題の要点をできるだけ簡単に纏めて、読者の皆様と再確認したい。

一、先ずこれは純然たる国内問題であって外国の干渉は排除されるべきである。

二、所謂A級戦犯はサンフランシスコ条約で国際的に決着済みであり、現にA級であった重光葵、賀屋興宣の両氏は釈放後それぞれ外務大臣、法務大臣を勤めているが外国から異議は全く無かった。更に言えば死刑にされた殉難者の「七士の碑」の碑文を書いたのは吉田茂元首相であり、吉田氏は碑の除幕式にも出席されている。

国内に、戦犯を日本自ら再審すべきだと言う少数の意見があるが、其れも含めて先人達の既に決着をつけているのを謙虚に受け止めるべきである。

三、殉難者合祀の昭和五十三年以後、大平首相、鈴木首相、中曽根首相の参拝に対し、中国からの異議は昭和六十年まで全く無かった。六十年に、ある政治家が中国に焚きつけてから干渉が始まった。中曽根氏が屈服した為中国は味をしめ、以後干渉が続いている。要は日本の売国奴的政治家が大きく国益を損なったのであるが、マスコミも詮索しないのが腑に落ちない。

四、新しい追悼施設がまたもや話題となっているが、一旦没となったものを再考するに足る新事態になったとは到底思えない。英霊との厳粛な公約を汚すにも程がある。

五、戦没者の慰霊顕彰は万国共通の通念で首相の参拝は当然中の当然である。

次に現在の政治家の言動を簡単に論評しよう。

まず与党野党を問わず北京詣でが盛んである。先方のお偉いさんと一緒に写真を撮って選挙民に見せたいのは、民主主義国家の政治家として無理も無いとは思うものの、阿諛迎合の度が過ぎないか。まるで参勤交代の如く北京詣でが続いて醜態である。

加えて先方との取引めいた話しを受けていないかも気になる。間違っても先方の費用でまる抱えになることは避けていただきたい。

先方の高圧的で理不尽な要求に対し、冷静かつ論理的に反論し相手を折伏できないまでも、せめて沈黙させるだけの準備をして交渉に臨んでほしい。先方の言い分をそのまま日本で繰り返すのは恥じであろう。なによりも不勉強を戒めたい。

複数の、名の知られた政治家が集まって小泉首相の靖国参拝に反対したが、何れも過去に世論で叩かれた人たちであり、自己正当化のための庇いあいではないかと思われる。

日本の政治家の悪口をこれ以上書きたくはないので此処までとするが、政治家のレベルは所詮その国民のレベルで決まる、と言われる。心ある方々が機会を捕らえて健全な意見を開陳され、世の中の正常化に努められる様希望してやまない。

山本会長みたま祭献灯

靖国神社の起源と御祭神

慶応四年一月鳥羽伏見の戦いで戊辰戦争が始まるが、その年の四月に、戦火に斃れた者の慰霊祭が行はれた。これが公の手で戦死者を祀った発端であるという。この時は戊辰戦争の戦死者を対象としたものと思うが、その直後の太政官布告では癸丑以来の殉難者を祀るとある。癸丑とは嘉永六年であるから安政の大獄で刑死した人々も含まれている。吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎等の殉難者、更には坂本龍馬、高杉晋作、真木和泉守、清川八郎、中岡慎太郎等の幕末の志士も御祭神である。

維新の頃の慰霊祭では対象となる施設はなかったが、明治二年六月、明治天皇の思召しで東京九段坂上の現在の場所に東京招魂社の仮社殿が建設され、明治五年に本格的な社殿が完成した。その後明治十二年に靖国神社と改称され、今日に至っている。

現在御祭神は二百四十六万六千余柱であり、その中には五万七千余柱の女性や子供も含まれている。

このお社の起源は深遠にして、神霊は重厚、中共の如き成り上がり国家の及びもつかないものである。

小泉総理の靖国神社参拝に係わる問題

田中　賢一

中国の執拗きわまる内政干渉
これに対する我が国の対応
我が国にも彼の言い分に同調する者がいる

小泉総理の靖国神社参拝について、昨年一年間に中国は左記の通り執拗極まる内政干渉の発言をしている。これは彼の国が貧富の差が甚だしいとか、国内に多くの矛盾が充満しており、政府に対する不平不満を対外的関心で回避しようとすることと、もう一つは漢民族が古来から持っている中華思想、東夷西戎南蛮北狄と称し、四周の異民族を見下す思想がこのような挙に出るのである。そうでなければあのような無礼なことが言える筈がない。

○平成十六年四月二日、訪中した川口順子外相に温家宝中国首相は「日本の指導者が大局を重んじて、靖国神社を参拝しないよう求め続けてきた」と総理の靖国神社参拝を批判した。

○九月二十日訪中した河野洋平衆議院議長と会談した呉邦国全国人民代表大会常務委員長は、小泉総理の靖国神社参拝を「十三億人民の心を傷つけている」と非難した。

○十月十一日中国の武大偉外務次官は、TBSラジオの北京での取材で「A級戦犯が合祀されている靖国神社に、小泉総理が参拝を続けている問題が解決すれば、他の日中間の問題は全面的に解決する」とのべた。

○十月十八日、王毅駐日大使は東京都内幸町の日本記者クラブで講演し、小泉総理の靖国神社の参拝について「多くの方が日本独自の文化として死生観を紹介しているが、これは内政問題でも文化問題でもない。正義を守かどうかという外交問題だ」と述べ、町村外相らが所謂A級戦犯の合祀に関する認識の違いとして「死生観の違い」を挙げているのを牽制した。

○十一月二十一日、チリで開催されたAPEC首脳会議の機に小泉総理は中国の胡錦涛主席と会談したが、胡主席は「歴史を避けては通れない、困難は日本の指導者が靖国神社に参拝することだ」と参拝中止を求めた。

　これに対し小泉総理は「心ならずも戦場に赴き亡くなられた方への哀悼の誠を捧げ、不戦の誓いをすることで参拝している」と強調し、合わせて「胡主席の言葉を誠意をもって受けとめる」と述べたにとどめた。

○十一月三十日、ラオスで開催されたASEANと日中韓の首脳会議に出席した小泉総理に対し、中国の温家宝中国首相が小泉総理の靖国神社参拝は「中国人の心を傷つける」と参拝中止を求めた。

○平成十七年一月十一日、訪中した自由民主党の中川秀直国対委員長、公明党の太田昭宏幹事長代行ら与党幹部は、唐国務委員や外務省幹部と会談した折、歴史問題について「A級戦犯の祀られている靖国神社に日本の指導者が参拝するのは受け入れがたい」とあらためて小泉総理の参拝中止を求めた。

　これに対し中川国対委員長は「一時期の不幸な歴史問題だけを取り上げると、日本国民はやりきれないとの思いがある。この問題を乗り越える努力をしていかなければならない」と述べ、中国側に靖国問題での対応を改めるよう求めた。

○一月十二日、中国の王毅駐日大使は早稲田大学での講演で、小泉首相のつぎの総理が靖国神社参拝を継続した場合の中国の姿勢について「A級戦犯は国際的に裁かれたものだ。A級戦犯を正当化する言動があれば戦争被害国の心が傷つく」などと述べ、容認出来ないことに変わりないと考えを示した。

　さらに「国際国家になりたければ、国際的な常識、コンセンサスでやることが利益になる」と主張、総理の靖国参拝は国際国家に相応しい振る舞いではないと述べた。

○これと関連して翌十二日、同大使は都内のホテルで自民党の森喜朗元首相、福田康夫元官房長官と会談し、「戦後六十年で何とか日中関係を改善したい。関係改善の仕組みでお知恵を拝借したい」と協力を要請した。

　その席上日中関係の懸案である歴史問題について「昨日の講演では質問が出たので話したが余り話をしない様にしている」と述べた。

　しかし、その後の会談した自民党の小里貞利元総務長官の「日中間の問題で首相の靖国参拝の占めるウエイトはどれくらいか」の問に対し「それしかない」と強調し、「日中関係がうまくいけば、アジア全体や北朝鮮問題にもいい影響を与える」とも指摘した。

以上は英霊にこたえる会の事務局が、新聞報道などに載ったことを収集整理したもので、これらを見ると、内政干渉などを通り越し、宗主国が属国にものを言っている態度だ。古来漢民族は悪いのはすべて四周の未開国であると決めつけている支那の古典詩を読むと、例えば李白の『戦城南』と題する詩の一節「匈奴は殺戮を以て耕作を為し古来惟白骨黄沙の田を見る」とある。匈奴の残した文書は無いのでわからないが、漢民族は善、異民族は悪と、頭から決めつけている。そのような相手に対し「日中間の問題で首相の靖国神社参拝の占めるウエイトはどのくらいか」などと伺いを立てる政治家がいるのだから、益々つけ上がる。王中国大使を招いて講演させる大学があるのには呆れかえる。

彼らのいうA級戦犯などというものは日本には無い。東京裁判は戦勝国が裁判の衣を着た報復劇で、ここに解説するまでもなく、幾多の不合理を含んでいる。インド代表判事のパール博士が無罪を主張したのは有名だが、オランダ代表判事のレーリング博士やフランス代表のベルナール判事も判決に反対している。更にこの裁判官を任命したマッカーサーも、後になってこの裁判は誤りだったと議会で表明している。にも係わらず、この裁判の当事者でもない中共が、戦犯呼ばわりするとは何事ぞ。そもそも、これら七人を靖国神社に合祀したのは、国会の決議に基づくものである。昭和二十八年に「戦傷病者戦没者遺族等援護法」が改正され、戦争裁判による死亡者も戦死者と全会一致で認められ、靖国神社に合祀されるようになった。日本の法律で決ったことに口出しするとは、正に属国扱いだ。このように堂々の論陣を張って、口出しを粉砕出来ないのか。

お前らの憲法の前文には次の通り謳っているではないか。「中国は独立自主の対外政策を堅持し、主権と領土保全の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干渉、平等互恵、平和共存という五原則を堅持して、各国との外交関係と経済・文化交流を発展させる」と。

また、日中平和友好条約の第一条第一項には「両締約国は、主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に関する相互不干渉、平等及び互恵並びに平和共存の諸原則の基礎の上に、両国間の恒久的な平和友好関係を発展させるものとする」とあるが、憲法は廃止したのか、条約は破棄したのか、と詰め寄ったら何とこたえるか。共産独裁国では、嘗てのソ連のように信義などはない。

このように論を進めてきて困ったことがある。それは日本人の中に彼らの言分に同調する輩がおることである。これも新聞に報ずることであるが、

○九月二十二日、河野衆議院議長は、人民大会堂で胡錦涛国家主席と会談し「当面の急務は靖国神社問題を妥当に処理することだ」と述べ小泉総理の参拝に批判的態度を示した。

○九月二十日東京都内で日中両国の有識者による「新日中友好二十一世紀委員会」を開き「歴史を鑑とし未来志向で日中関係を築くべきだ」との認識で一致したとて、座長の小林陽太郎富士ゼロックス会長は、記者会見で「小泉総理は靖国神社参拝をやめるべきだ」と表明した。一企業の利益と国の大事とどちらを重しとするのか。更にまた経済同友会の代表幹事で日本ＩＢＭの北城恪太郎会長は「首相の靖国神社参拝は中国に進出している日系企業の活動に影響を与える」と、参拝中止を求める見解を表明した。

経済界に楔を打ち込む中共の狙いは歴然としており、これら財界人は目前の利害に幻惑し、やがては国を売ることになるのがわからないのか。

歴史を鑑とするというが、史実は一つしかないが、その認識は様々であり何も各国一致させる必要は毫もない。唯一つだけ間違ってはならないのはその時代に目を置いて眺めて見る態度は失ってはならないということだ。例えば豊臣秀吉の朝鮮征伐について、今は侵略としか見ない者がいるが、秀吉は半島は通り道で明国を攻略しようとした。その気宇の広大さを見落としてはならない。支那事変の意義を中共の当事者と論争しても、一致点を見出せないだろうから、やめた方がよい。

中国就中その中核をなす漢民族は、華夷思想の反面、礼節を尊ぶ国だった。古典の『礼記』に次の一節がある。「夫レ礼ハ自ラ卑クシテ而シテ人ヲ尊ブ　負販ノ者ト雖モ必ズ尊ブ有ルナリ　而ルヲ況ンヤ富貴ナルオヤ」　負販の者とはささやかな行商人のことである。

王朝は何代も交替した。滅びた王朝の末期は悪政徳を失ったからであるが、それでも次の王朝が前王朝の歴史を編纂するに当っては、その相当の敬意を払っている。

ところが中共になってからは、そのような気持

は全くない。もっともこれは共産国共通の事で、崩壊したソ連も北鮮もそうだが、利害の相反する相手に対しては、罵倒讒謗口を極めて罵る。最近左傾した韓国が似てきた。

中国の経済発展は目覚しいものがあり、軍事力増強も物凄い。しかし経済発展は都市だけで、とり残された人民は少しも豊にならない。不平は充満していて、その捌け口を外に求め反日博物館を二百個所も作っている。靖国神社参拝干渉もその一環であり、これは金がかからないので、絶好の国内鎮撫策と心得ているのだろう。

このような相手に弱みを見せては駄目だ。ところが見せ放しである。

我が国はその昔推古天皇の御代、小野妹子を遣隋使として派遣するに際し、聖徳太子は次の一文を持たせた。

「日出ずる処の天子書を日没する天子に致す恙なきや」このような英傑がいたかと思うと、室町時代、足利義満は明の太祖から日本国王の冊封を受け、臣下の礼を採った。

聖徳太子になるか、義満になるか。

反日暴動について

四月二日四川省成都で暴徒が日本のスーパーを襲ったと思ったら、今度は中央に飛火して九日には北京で、更に十六日には上海で暴徒が大暴れして、大使館や総領事館は投石で被害を蒙った。テレビを見ると、大勢の警官が並んでいるが暴挙を止めようとしない。そうだろう政府が反日思想を煽り立てたのだから、取り締まったら矛先は政府に向いてくる。政府も暴徒も一つ穴の貉だ。謝罪と弁償を求めたのに対し、自然発生的なもので、そうさせたのは日本の責任だと、開き直った。正に盗人（ぬすっと）猛々しいとはこのことである。

ところで彼らは小泉総理の靖国神社参拝が、中国人の憤激を買うとか、歴史認識がけしからんとか言っているが、それは政府の宣伝がきいている都市部の住民だけで、十三億の住民（主なものは漢、満、蒙、蔵、回の五族だが少数民族を入れれば五五の民族が含まれているという）の大部分は我関せずである。支那の古典に言う、

日出でて作し　日入りて息ふ
井を鑿ちて飲み　田を耕して食らう
帝力　何んぞ我に有らんや（十八史略）

辺境にある住民にとって帝力、即ち現中共政府が日本に対し何と言おうが俺等には関係ないということだ。十三億の人民の感情を傷つけるなどとは、言いがかりに過ぎない。もう十年以上前のことになるが、私は内蒙古の包頭付近に旅をした折、都市を離れると古代と変わらぬ風情だった。

ところがこの辺境の住民中に帝力をいやというほど加えられた者がいる。それはダム建設とか工業地造成とかで、土地を取り上げられ、ろくに補償も貰えない農民が四千万もいる。それに加えて役人は建設業者から賄賂を取り放題だ。一千万件を超える陳情で解決したのは0・2％に過ぎない。北京には地方から直訴のため住みついているものが数千人いると言う。これらの不平不満がつのり、大暴動を恐れた政府は矛盾を日本に向けたのだ。

果せるかな、今回の暴徒の主体は地方から出てきた農民と学生だった。この学生というものが一人っ子政策で甘やかせて育っているので、自制心も自主心もない人種である。

支那の『戦国策』という書物に「市虎三人に成る」という語句がある。ある人が魏王に問うた。「市中に虎がいると言ったら信用しますか」王は「否」と答えた。「二人がそう言ったら信用しますか」と問うた。王は「之を疑う」と答えた。半信半疑という意味である。「三人がそう言ったら信用しますか」王は「之を信ず」と答えたという。まことに示唆に富んだ寓話である。歴史観について彼らが言いふらすことを放置しておくと、世界中にそれを真実と思うようになる。日本人の中にも彼らの言い分に洗脳されてしまった者がいるのは由々しいことだ。

無礼千万な呉儀副首相

呉副首相は、愛知万博の中国ナショナルデー開幕式典出席のため五月十七日来日し、二十四日帰国の予定で、二十三日には小泉首相と会談を申し込んであった。ところがその日突然帰国してしまった。そもそも国際的慣列では、同格の者が接渉することになっている。大臣なら大臣同士、局長なら局長同士という具合である。日本には今副首相はないから、首相に会見を申し込んだからといって、それを非とはしない。しかしこちらの方が格は上である。それを当日になってすっぽかすとは非常識というか、無礼というか正気の沙汰ではない。初めは緊急の用事の為と言ったが、翌日になって、小泉首相が靖国神

社参拝をやめると言わないから、会談する雰囲気にないと言っている。先の反日暴動と同じように、謝るどころかそうなった責任は日本側にあるとまで言っている。

理屈にもならない理屈を並べ、己の非を押し通すのは共産国の常套手段である。前大戦末期日ソ中立条約を一方的に破棄し、我が国に宣戦布告したソ連は、日本の与り知らないヤルタ会談で対日戦を約束したとか、かつて対独戦で苦しいときに日本は対ソ侵攻を計画したとか、後になって屁理屈を並べたてている。

支那は古くは文化的には我が国の師だった。共産国になってもソ連の様にならないことを冀っていた。儒教は我が国の精神文化に多大の影響を与えた。世界に冠たる武士道も、その根底には儒教があった。「礼記」の一文については既に述べたが、かつて多くの人が読んだ論語にも、礼については各所に載っている。顔淵篇に次の一節がある『子曰く、礼に非ざれば視ること勿れ、礼に非ざれば聴くこと勿れ、礼に非ざれば言うこと勿れ、礼に非ざれば動くこと勿れ』と。呉儀よ、論語を読んだことがあるのか。

中共政府は呉儀副首相が無礼を働き、その原因は日本側にあるなどとは、国内では発表していないということだ。また対日暴動を誘発することを虞れているらしい。あの暴動は世界の顰蹙を買い懲りたようだ。今度のことも米国あたりでは物笑いになっているという。しかし我が国も世界に向って、中国の日本に対する内政干渉の非を、大いに報道しないと、彼の言分が一人歩きする虞れがある。

○終戦という言葉の意義

昭和二十年八月十四日　天皇陛下は戦争終結の詔書を頒布せられ、翌十五日ラジオで国民に告知された。そこでこの日を一般に終戦の日とされているが、厳密に言えば戦闘終結が法的に確立したのは九月二日の降伏文書の署名であり、その後二十七年四月二十八日の講和条約発効まで連合国の占領下にあった。戦闘行動はないものの戦争状態は継続していたのである。

ここで言いたいことは、その間に戦争裁判で処刑されたり拘留中に死亡した者は歴とした戦死者である。従って靖国神社に祀るのは当然である。

○日本人に贖罪意識を植えつけたのは占領軍

戦争に敗れた時、米軍の物的戦力に負けたとは思ったが、国民誰も日本が悪いことをしたという贖罪意識など持っていなかった。それが米国の精強な日本軍復活を恐れることから発した洗脳政策が、強力巧妙に進められた。大東亜戦争は平和に対する罪であり、戦争中に至る所で残虐行為が繰り返されたという不合理虚偽の報道が、あらゆる手段で執拗に宣伝された。

我が国が独立を回復したとき、そのような宣伝を洗い流すことが出来ず、多くの日本人、就中教育界とマスコミは洗脳されっ放しである。政治経済の中枢にある者もその残滓を引きずっている。そこに中国共産国が付け込み、それに対する我が国の対応にも影響している。

事務局よりお知らせ

○特攻隊合同慰霊祭・懇親会のビデオ・DVDの頒布について

靖国神社での拝殿での祭文、献吟、トランペット吹奏等、又懇親会場でのアトラクション、懇談風景を約七〇分余りに収録したもの。

撮影・構成　小林　広司
（映画監督・プロデューサー）

販売価格　三、〇〇〇円
（ビデオ・DVD共送料含む）

同封の郵便振込票でお申込み下さい。内容の一部は協会ホームページにも掲載してありますのでご覧下さい。

○協会ホームページの内容追加・更新

長い間更新等をしておりませんでしたが、㈱イオノスの協力を得て左記の項目を追加しました。

一、特攻ビデオ　義烈空挺隊と第一御盾隊、第26回特攻合同慰霊祭
二、会報「特攻」1号から59号迄の全文。
三、情報公開資料　収支計算書等
URL：http://www.tokkotai.or.jp

前号の誤植訂正

63号26頁の人物写真永沼中佐を永沼少尉となっているのは、印刷の誤りを校正の際見落としたので、お詫びし訂正します。

靖国神社みたま祭雪洞に拾う特攻隊に因むもの

会員　金文男献納

第百十一振武　近藤豊伍長の遺詠

轟沈の空は
青空靖国の
笑顔で迎える
母の面影

近藤豊伍長は20年6月3日知覧出撃沖縄西方洋上で散華

会員　山崎重武献納

挺進第三聯隊山川忠雄曹長の妻の歌

さらばとて
夫の握れる
たくましき
み手のぬくもり
今ものこれり

レイテ空挺作戦で挺進第三聯隊は、19年12月6日ルソン島アンフェレスを発ってレイテ島の五目標に向かった、山川曹長の属する第三中隊の一個小隊は東海岸のドラグ飛行場に降下する計画だった。任務は敵飛行場の制圧で、友軍と提携できる見込みの無い特攻隊だった。レイテ湾内にある敵艦船の対空砲火は熾烈で、降下出来たかどうかさえも不明である。この日レイテに降下した四百数十名には、最終的に一人の生還者もない。

この聯隊はレイテに敵が上陸した四日後の10月24日動員が下令され、翌日未明に屯営（宮崎県川南村）を出発した。営外者は部隊の出動準備が整った後、数時間家に帰ることが出来た。

この聯隊のレイテ降下から洩れ、ルソン島で戦い生残った者が、戦後遺族等の投稿を求めて作ったガリ版刷りの小冊子がある。その中から山川曹長の妻の書いた一文を抜すいすれば「夫と別れたあの夜は月のない暗い晩だった。かくある日は軍人の妻として覚悟はしていたものの、異郷の地に（この人達の郷里は岩手県）只一人取り残された悲しさは、今にして思えば何にたとえることが出来ようか。

さらばとて夫の握れるたくましき
　み手のぬくもり今ものこれり

このぬくもりの残れる手は、夫と再会の日まで慣れぬ農事に苦労しつづけて来た手だ。なおも見つづけると、何もかも夢みたいに過ぎ去ってしまった気がする。

我が心うつろなる時在りし日の
　夫を偲びて心なごめり
木枯しがつめたく私の胸中を吹きまくっていく。一縷の望みをよせながら待ちつづけてきた私の許には、ついに夫は帰ってこなかった。

いいえ、帰っては来たけれど、語り合うことさえならぬ白木の箱に納まって――しかも只ほんの魂のみが。」

19・12・6　ルソン島アンフェレス出撃レイテに向かう

特攻勇士之像に副碑が併設

富嶽隊長西尾常三郎大佐御同期の古野一正、落合重温御両名から、碑石を寄贈するから特攻勇士之像に副碑を併設したら、とのお申出がありましたので、予ねて事を進めて参りましたが、六月二十八日に除幕・清祓の儀が、南部宮司臨席の下に執り行われました。

参列者一同（協会、山本会長以下理事、評議員二十名、招待者古野一正氏以下十名）十四時に先づ昇殿参拝、引続いて勇士之像前で除幕・清祓の儀が厳粛に執り行われました。

除幕は、右紐を山本会長、古野、落合両氏、左紐を玉川眞喜子様（西尾大佐姪）、荒木しげ子様、伊達智恵子様（遺族）が引いて、蔵王山系、10万年前の地層から掘出された伊達冠石の黒光りする碑面に白文字の碑文が刻まれた副碑が、勇士之像に向って左側にその姿を現わしました。

清祓の祝詞奏上、副碑に清めの紙片が撒布されて清祓の儀は終了し、続いて靖國神社から協会への副碑献納に対する感謝状が、南部宮司から山本会長に、次いで山本会長から古野、落合両氏と、石の原産業社長原　傅氏への感謝状贈呈があって式は滞りなく終了致しました。

南部宮司は挨拶の中で、「今迄見ていると、参拝者で特攻勇士之像前に立止まる人も、直ぐその場を離れてしまうのが実態であったが、これからは副碑に刻まれた説明文を読んで、更に深く特攻戦士に想いを寄せる方が多くなるであろうことは、誠に嬉しく思う」と述べられました。

特攻勇士之像は、平成十一年三月二十三日に除幕奉納されましたが、今回副碑が併設されて、特攻勇士の偉業がより多くの参拝者により深く知られる緒となることは、誠に慶ばしい限りであります。古野一正、落合重温御両名に深甚の謝意を表します。

この機会に協会としては、遊就館の増築に際して取り拂われていた特攻コーナーの再開を、強く靖國神社に御願いして参る所存であります。

（菅原道熙）

副碑の説明文を見れればわかってもらえると思うが、像だけでは航空特攻を連想する。従来遊就館内に特攻コーナーがあり、航空特攻、水上特攻（㋡震洋）、回天のレリーフと、伏龍の像が一個所に展示されていたが、今は別々の所に移されてしまったので、綜合的に認識してもらえないのは困る。

会員　小栗楓子献納

この人のことは会報で何回か紹介したが、特攻戦死した林義則少尉と将来を約した人である。林少尉は幹候9期第一〇五振武隊の隊長で、20年4月22日知覧出撃沖縄近海で散華した。

この人の手紙によれば一人暮らしの六十年でしたが、故人のことを憶って涙している時が私の至福の時でしたとある。

南九州陸軍特攻三基地慰霊祭

菅原　道熙

都　城

例年慰霊祭が行われる4月6日は、4式戦（疾風）の第1特別振武隊が初めて都城西飛行場から出撃した日である。

今年は桜は満開、花曇りで微風という絶好の日和になって、御遺族20名を含めて400余名が参加して、陸軍墓地に在る、はやて慰霊碑前の広場で、慰霊式典は10時半に開式した。

満開の桜越しに式場を望む

永年奉賛会長であった岩橋辰也氏は、昨年11月に行われた市長選で、年令が半分以下の長峰　誠氏（全国最年少市長）に敗れた為に、今年は若々しい奉賛会長が祭文を奏上した。引続く追悼の言葉は、当協会、地元陸士57期生会、全国少飛会によって捧げられた。

続いて裏千家淡交会都城分会による献茶、錦城会都城支部による献詠、参列者全員の献花が終って、長峰都城市特別攻撃隊奉賛会長は挨拶に立って、時と共に戦争への関心が薄れつつある中で、当市から出撃散華された特攻隊戦没者の慰霊顕彰を継続して行くことは、極めて大事なことで、来年はこの会場に地元小中学生を参列させたい、との意向を表明された。

挨拶する新市長　長峰　誠氏

参列者一同は、この発言に少なからず感動を覚えた。但し、都城市は来年1月1日に近隣4町村と合併するので、改めて市長選挙が実施されるとのことである。願わくば長峰現市長が引続いて新市長に当選されることを、心から祈って止まない。

今年から式資料には、援護戦闘機の戦死者名が記載される様になり、遺族代表として熊本県から来られた、103戦隊稲原　茂之命の弟さんである昭義氏が挨拶をされた。

地元陸自音楽隊の演奏の後、全員で加藤隼戦闘隊と同期の桜を合唱して、正午前に閉式した。来年の小中学生の慰霊式典への参加が、現実のものとなる期待に胸を膨らませつつ、会場を後にした。

萬　世

第34回萬世特攻慰霊碑慰霊祭は、例年4月第2日曜日開催と云うことで、今年は10日、13時30分から加世田市平和祈念館前の、慰霊碑（よろずよに）前広場で行われた。

開式に合わせて海自鹿屋基地から、大型海上哨戒機が飛来、全員空を仰いで手を振ってから式典に移る。参列者は御遺族42名、来賓44名を含めて約400人。御遺族には既に御両親は見られず実兄1人、実弟妹各5人で、他は甥・姪・従兄弟姉妹、その他となっていて、時の経過を思わしめている。

國旗掲揚、黙祷に続いて吉峯良二奉賛会長の追悼の言葉、次いで遺族代表

碑に向って右側に置かれた献花

萬世特攻慰霊碑（よろずよに）

として、栃木県から来られた72振武隊荒木幸雄之命の兄、荒木精一様と静岡県から来られた432振武隊若尾達夫之命の妹、巨海公子様が慰霊の言葉を捧げられた。因みに、荒木幸雄之命は有名な仔犬を抱いた写真の、5人の中の1人である。

錦城会加世田支部の献詠、参列者全員の献花、陸自國分基地ラッパ隊の演奏があって、灯篭献納者に対する感謝状贈呈、川野信男市長の挨拶に続いて、都城と同様加藤隼戦闘隊と同期の桜の合唱があって、15時前に式は終了した。

それ迄時々小雨がぱらついても、何とか保っていた天気は、式典終了を待っていたかの如く大粒の雨に変った。神助であろう。

加世田市は、平成大合併で来年からは南薩市になるので、それに伴ない、加世田平和祈念館の改名も検討されているとのことであった。徒らに新名称に従うよりは、歴史的な〝加世田〟なり〝萬世〟の名を残した方が良いのではないかと思うのは、独り筆者のみなのであろうか。

知　覧

2日続いた雨が、5月3日は朝から雲一つない快晴に恵まれ、穏やかに薫風が吹き抜ける会場には、御遺族約140名を含む千人近くが参集、第51回知覧特攻基地戦没者慰霊祭は13時に開式した。何時もながらの盛会で誠に心強い。

導師が入堂して、一同合掌、禮拝、黙祷を捧げて読経開始、霜出勘平知覧特攻慰霊顕彰会長の焼香に続いて、御遺族全員と来賓が焼香して慰霊法要は終了、引続いて追悼式典に移る。

慰霊顕彰会長が堂内に進み追悼の言葉を捧げ、県議代表、町議会議長と続く。御遺族代表は、73振武隊の上原良司之命の令妹、上原清子様が車椅子で遥々長野県から出席され、介添の後押しでお堂仏壇前に至り、切々とした慰霊の言葉を述べられた。

特攻平和観音堂祭壇

後刻お尋ねした処によると、上原家は、5人兄弟姉妹で上が男3人であった。長、次兄は夫々陸、海の軍医の途を進まれたが、お2人共戦死（長兄はビルマで、次兄は乗務潜水艦が未帰還）されたそうである。そして更に、3兄の良司之命が沖縄で特攻散華されたのである。男児3人を揃って喪われて、御両親のお嘆きは如何許りであったであろうか。

清子様のお話を伺って申し上げる言葉も無かった。千葉県在住の次妹も一緒に出席されていたが、姉妹お2人の追悼式典に参列された感懐もお察しするに余るものがあった。

献辞は、偕行社、特操会、少飛会からも捧げられた。何れも戦後60年の歪みと思わざるを得ない、最近頻発する不祥事に対する憂慮とお詫び、更にはその是正への努力をお誓いする言葉が篭められていた。

錦城会の献詠、参加者全員の献花が終って、霜出町長は参列者への挨拶の最後に、特攻平和会館見学者ノートの中から、19才の現役暴走族青年と、14才の女子中学生の感想文（後出）を披露された。特に暴走族青年が、前非を悔い改悛した心情を吐露したものは、参列者の胸中を一陣の涼風として吹き抜け、又在天の英霊も嘸やお喜びになったことであろう。

最後に、都城、萬世と同様に、加藤隼戦闘隊と同期の桜を、陸自國分駐屯地音楽隊の伴奏で、全員で合唱して15時に解散した。

一、19才の青年

ここにきて、暴走族は卒業しようと思った。気安く特攻服など着て暴走しませんし、迷惑をかけません。暴走族反対派の皆さん、すみませんでした。これからは真面目に生きます。

一、14才の女子中学生

「笑って散ろう」「俺が死んだら何人泣くべ」の言葉、悲しかった。たくさんの特攻隊員の人たちの死はなんだったんだろう。今の時代に生れてよかった。今日、この知覧に来てよかったです。また来ようと思います。若くして散ったたくさんの特攻隊員の人達安らかに…。

平和よ永遠に。

これらの感想文は、知覧特攻平和会館が刊行した「へいわへのみちしるべ」に収録されている。次号から逐次紹介する予定である。（編集部）

八月十五日の靖国神社

この機関誌8月1日発行なので、今年の終戦日の靖国神社の模様は紹介できないが、例年同様であろう。これが庶民の姿である。

小泉首相は「二度と戦争を繰り返してはならないという不戦の誓いから参拝している」というが、何故英霊に感謝の気持ちで参拝していると言えないのか、ここに参拝している庶民は、不戦の誓いに足を運んでいるのではない庶民の気持ちに副はずしてなにが民主主義だ。昭和殉難者に対しても、お国の為命を失ったのだから、感謝するのが当然である。

8月15日正午の社頭（昨年）

雨が降っても参拝者は少しも減らない（一昨年）

沖縄慰霊の日

6月23日は沖縄慰霊の日であるが、中央の新聞は小泉首相が沖縄における行事に参加したことを報じているだけで、沖縄戦のことなど何も述べていない。六十年前の史実は風化してしまったと言はざるを得ない。

現地の新聞は朝刊も夕刊も関連記事で一杯である。県主催の「戦後六十周年沖縄戦役者追悼式」が摩文仁の平和祈念公園で行はれた。県内外から約五千二百人が参加して、六十年前の戦闘で命を落とした二十万余のみ霊に追悼の祈りを捧げた。

摩文仁の平和祈念公園内にはこのような20万余の氏名を刻んだ碑がある。

現地の新聞に言う二十万余のみ霊の中に、沖縄戦で散った数多の特攻隊員は含まれているのだらうか。

一方沖縄の陸上自衛隊では、約百人が二十三日早朝、第三十二軍司令官等が自決した場所の上に立つ黎明の塔の前に整列して慰霊祭を行った。ラッパを吹奏し花を供え黙祷した。第一混成団長君塚将補は、第三十二軍が沖縄防衛のため死力を尽くしたことを強調し「いざとなれば県民のため命をささげる、同じ任務を担う我々が、死んだ将兵を追悼するのは意義あることだ」と挨拶した。（以上主として沖縄タイムスの記事に拠る）

摩文仁の丘の一番高い所にこの塔がある。ここから海岸よりに僅かにさがった所にある洞窟が最後の軍司令部だった。

二十三日四時過ぎ夜が明けかけた頃副官の持つローソクの火を先頭に、淡々たる牛島軍司令官、豪傑魁偉の長参謀長と続いて壕を出た。海岸側の断崖上に坐し介錯役は副官で剣道五段の坂口大尉だった。（参謀部付西野少佐手記「紅焔」より）

枕崎と鹿屋の海軍特攻隊追悼式参加報告

理事　藤田幸生

平成17年4月7日（木）枕崎市平和祈念展望台で実施された「第二艦隊追悼式」と、その翌8日（金）鹿屋市小塚公園慰霊塔前広場で実施された「旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式」に、山本会長代理で参列しました。

「第二艦隊追悼式」は、「平和祈念展望台奉賛会」（畠野宏之会長）主催で、一四〇〇から執り行われました。

今年は市がこの地に、展望台、記念碑等を建立して十周年目に当たる節目の年でした。展望台は、市のはずれ、岬の高台にある風光明媚な「火之神公園」にありました。ここからは、はるかに戦艦「大和」、巡洋艦「矢矧」を始めとする沖縄海上特別攻撃隊「第二艦隊」の激戦の洋上が望めます。ここに身を置くだけで感動が沸いてくるような、素晴らしいところでした。天候は、今にも雨の降りだしそうな曇天で、見渡す水平線も煙っていました。参列されている皆さんのお話では、六十年前の戦闘当日も、このような天気だったそうです。

式典では軍艦旗掲揚に続いて、私は山本会長から寄せられた次の追悼文を奏上しました。

終戦六十年の節目の年に当り、戦艦「大和」以下出撃艦隊戦没者の諸霊に謹んで申し上げます。

昭和二十年四月六日、沖縄周辺の敵艦船に対する陸海軍協同の第一次航空総攻撃に呼応して、戦艦「大和」軽巡洋艦「矢矧」以下駆逐艦八隻より成る艦隊は、敵航空機の注意を艦隊に引き寄せて航空総攻撃を容易ならしめると共に沖縄本島沿岸に突入、艦砲射撃を以て地上軍に協力することを意図して瀬戸内海から出撃されました。

然しながら途中雲霞の如き敵機に捕捉され、「大和」「矢矧」以下駆逐艦四隻は勇戦奮闘空しく四月七日午後遂に徳之島沖で海没されました。

大東亜戦争末期、燃料にも事欠く状態に陥って座して滅するよりはと、再び生還を期することの無い征途に就かれました。皆様方は身を挺して皆様方を育んだ、同胞と国土を護るべく散華されたのであります。それにも拘らず遂に敗戦に至りました。

（中略）

現在多くの国民が愛国心と民族としての誇りを取り戻しつつあることは頼もしいことでありますが、同時に亡国の兆しと思わせる様な現象も混在しているのが実態であります。

今世紀は国際情勢が益々混迷の度を加える傾向を示しております。その中で我が国が、独立国家の尊厳と民族としての誇りを堅持して毅然として生き抜いていく為には、今こそ皆様方の行為の底にある、崇高な精神が絶対に必要であることを、私共世代は次世代を担う方々に理解し納得して貰わなければなりません。

省みて道半ばに達していないことを認めざるを得ません。私共は、皆様方にお応えすべく残された人生を粉骨砕身、全身全霊を傾けてこの為に邁進することをお誓い申し上げます。

在天の諸霊安らかにお眠り下さい。

平成十七年四月七日

財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

会長　山本卓真

次に、元第二水雷戦隊参謀であられた星野清三郎様（戦後、海上自衛隊に入隊、元自衛艦隊司令官、ご夫妻で参列されていました。）、元「矢矧」士官で、現在長崎総合科学大学教授の池田武邦様が、当時を偲び、現在の心境、将来への想いなど、心のこもった言葉を述べられました。神園　征枕崎市長から、この行事への地元のお気持ちと今後の決意が述べられました。続いて、陸上自衛隊国分部隊のラッパ隊による碑前演奏、ご遺族代表挨拶、電報披露等がありました。中でも女性市民の「マリンコーラス」グループによる、鎮魂の海を背景にした「海ゆかば」「同期の桜」「荒城の月」「涙そうそう」の合唱や吟詠は、折からの小雨もあり、参会者の胸に感動を呼び起こしてくれました。

翌8日（金）一〇三〇から鹿屋市主催により、市内今坂町の小塚公園慰霊塔前において、「旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式」が執り行われました。この日は、昨日とは打って変わり、素晴らしい天気に恵まれました。燦燦と降り注ぐ明るい春の日差しの下、折か

らの桜花爛漫花吹雪の中で、平成十七年の追悼式は、極めて盛大に行われました。式典は、例年のように参列者一同の拝礼に始まり、国旗掲揚、国歌斉唱、海上自衛隊によるSH－60J、P3Cなどの編隊追悼飛行、山下　栄鹿屋市長による式辞、続いて、鹿屋市議会議長、ご遺族代表、生存者代表、海上自衛隊志賀第一航空群司令の順番に、追悼の言葉が述べられました。参会者総員による献花に続いて、海上自衛隊の儀丈隊弔銃発射、式電披露、遺書朗読、総員による「同期の桜」合唱と、それぞれに心のこもった、凛とした内容でした。見上げる青空を海上自衛隊の見事な編隊が、直上を通過して西の空に向かって飛び去ってゆきました。六十年前のあの春も、この同じ空の下で、同じ桜の若木が花を咲かせていたであろうと思い浮かべ、感慨深いものがありました。あらゆる面で終戦六十周年にふさわしい印象に残る追悼式でした。

義烈空挺隊慰霊祭に参加して

杉山　蕃

去る6月11日、摩文仁平和記念公園内義烈空挺碑前において行われました、慰霊祭に協会代表として参加してまいりました。天候にも恵まれ、空挺同志会長、空挺団長、一混団長等出席の下、六十年の節目がしめやかに祭られたことを報告致します。

筆者は戦中育ち、往時折から西航する戦闘機の数十機の大編隊に、「まだまだ有るなー、あれは全部特攻だろう」とささやく大人の会話に、「僕も続くぞ!!」と思わず握り締めた掌の感触を妙に覚えている世代です。あれから六十年、しめやかな式の間、胸中を去来したのは、沖縄戦全般の戦況でした。

4月1日上陸作戦開始、4月6日から6月22日まで、十次にわたる空前の菊水特攻作戦、7日大和沈没、5月4日32軍攻勢作戦、5日攻勢中止、24日義烈空挺作戦、そして6月23日牛島司令官自決等々。戦局全般の推移はさることながら、個々の戦闘で等しく死力を尽くした英霊の心情は、何時でも、ともすれば怠惰に流れる人間の業を反省自戒させてくれます。特に、操縦職域を経験してきた筆者には、戦勢傾いた絶対的非制空権の状況下、薄暮離陸・夜間推測航法・深夜強行着陸を成功させた三独飛の特別攻撃に、改めて畏敬の念を持ったものです。

47年沖縄返還時の飛行運用担当幕僚を命じられて、那覇空港にT－33で着陸以来、沖縄との付き合いも三十余年、訪れる度に整備が進む社稷を見るとき、大田海軍少将の「県民に対し後世特別のご高配を賜らんことを」と遺された決別の辞が頭をよぎります。帰りに立ち寄った工芸土産物店、何度と無く訪れているが、今回はあまりの質的進歩に感嘆して「南国びーどろ」を購入、改めて「本土並み」へのレベルアップを痛感し、軍と共に戦い没した15万県民の霊に思いを致した次第です。

戦後六十年を経て、沖縄の戦略的価値はますます高く、台湾問題、尖閣列島帰属問題、中国原潜の領海侵犯、東シナ海海底資源を巡る争い等々穏やかとは言い難い情勢にあります。地域の安定に不可欠な米軍の存在、その駐留が沖縄に掛けている負担問題とあわせて、沖縄はこれからも、重要な関心を与え続けるでしょう。厚い日差しの下、涼しげな木陰に眠る英霊が、安んじられるよう、今に棲む我々は一段の精気を持って臨む必要があると銘肝するところです。

この慰霊祭の主催者について

碑や像を祭り慰霊祭を行うのは、戦友団体か地元の奉賛会であるが、毎年ここで義烈空挺隊の慰霊祭を行っているのは、空挺同志会沖縄支部である。その構成員は自衛隊の空挺団で教育を受け現在は沖縄の自衛隊に所属している現職の自衛官で、現在その数約30名である。空挺同志会の設立主旨である伝統継承の発露と言える。

会員訃報

○東京　桑田　悦（17・3）
戸田　謙（17・3）
森木　基裕（　）
石井　康（17・3）
星　隆（17・4）
○神奈川　中村　義一（17・3）
伊田　詳（16・12）
○京都　藤木　常武（　）
○大阪　上田　信雄（　）
○大阪　相馬　太郎（17・2）
山口　正民（16・2）
○岡山　本田　巽（17・2）

新入会員名簿

（平成17年4月1日～6月30日）

○北海道　外崎勝雄　○宮城　岩渕武彦
○福島　上田邦夫　○茨城　澤部　泰
○群馬　新井　實一　○埼玉　臼田真一郎　○千葉　小倉利之　大久保道則
谷塚博巳　○東京　緒形實蔵　一ノ瀬雄司　坂本康子　内田太郎　細川　卓
斉藤昭光　寺井倶子　落合道夫　宮下宏一　○神奈川　矢部廣武　○富山　松本利雄　徳田外治　○長野　千賀祐一
○岐阜　各務繁喜　○静岡　阿部　浩
井出隆夫　○愛知　難波達男　○滋賀
杉原康弘　○兵庫　上野　修　○岡山
水島公和　○香川　吉峰泰夫　○佐賀
牟田　晃　○鹿児島　岩重　孝

特攻劇のお知らせ

一、「飛行機雲」今年で6年目を迎える演劇が左記により行われます。この特攻劇は毎年ディスクジョッキーの若者達が中心となって取り組み好評を呼んでおります。

日　時　8月10日(水)～14日(日)14時・19時
場　所　新宿シアターサンモール
料　金　四千円（前売）
問合せ　㈱サンディ
電　話　〇三―三三七七―〇一九六

二、「今日われ生きてあり」戦後60年特別企画として、左記により前進座公演が行われます。

日　時　8月18日(木)～21日(日)14時
場　所　前進座劇場（吉祥寺）
料　金　五千円（特別割引）
問合せ　劇団前進座
電　話　〇四二二―四九―二六三三

以上又演劇ぜひ御覧下さい

特攻平和観音堂第二次改修費寄進者芳名録（敬称略）

一、寄進額　五百九拾壱萬五千参百円
一、寄進者数　一千四〇二名
（平成十七年六月三十日現在）

北海道
赤坂　飯尾　今井　尾崎　川田　河岸　国本　黒島　小部　駒場　佐藤　鈴木　高橋　田中　谷本　時崎　仲田　新保　西岡　西澤　舟井　藤津　森辺　森田　三浦　町井　桜内　工藤　工藤　長谷　渡部
登美子　尚久　兼一　久三　義視　正義　鎮雄　宇吉郎　正好　剛太郎　和　公　外三郎　文雄　好弘　宣　辰重　晃涉　義義　守正　彦孝　司昭　清平　郎吾　治之　敏男　俊三　哲順　誠房　勝誠　英夫　傳稔　茂平

岩手
飯岡　生方　大内　小野寺　葛巻　桑原　斎藤　坂本　鈴木　千葉　照井　平野　細田　横澤　吉田　阿部　伊豆　板橋　今井　潮田　岡田　小山　金野　後野　栗藤　菅野　狩野　高橋　高橋　清水　佐藤　今野　矢巾　星山　早田　畑津　高谷　渡邊　山岸　矢田
哲　雅孝　秀久　義一　健八重子　賢三　恭敏　敏　友幸　茂幸　昭五　正　鍾美　廣吾　郎吾　武一　宝　治敏　貞二　夫平　勝蔵　行　敏昇　史郎　村仁　圭治　順輝　守　良慶　康功　輔治　之久　彦

宮城
宏子　孝八　久一　秀三　雅郎　正フ　忠敬　義信　昭ク　安直　行夫　吾秀　健利　新次郎　啓祐　昭和　秀光　茂忠　幸治　友貞　敏夫　恭勝　敏蔵　宝一　賢武　三郎　吾廣　郎美　治敏　昇史　郎夫　村仁　圭治　順輝　守　胞正

福島
孫一　友郎　義一　和雄　精子　三郎　勝實　昭一　甲郎　昭　清夫　子郎　尚雄　源治　佐實　眞郎　正五　小稔　郎昭　博保　郎實　藤長谷　高橋　佐藤　佐藤　佐藤　伊勢　秋田　渡部　市郎
上月　木村　遠藤　石沢　石川　小林　小河　齊藤　高橋　小林　齊藤　佐藤　佐藤　小藤　上田　土屋　福原　門馬　荒井　荒井　飯田　飯田　稲田　池村　大塚　大田　栗原　工藤　菊地　佐原　清水　柴田　信原　佐久間　砂押　住谷　関根　関口　堤正
秀　利夫　健吾　久直　敬安　忠義　正信　フ昭　ク　秀光　昭和　啓誠　新次郎　網紀　茂行　安夫　知治　芳彦　昭男　秀次　光洋　昭明　啓久　新一　網祐　紀郎　茂一　安行　知治　芳定　昭彦　秀衛　光繁　昭治　啓彦　新男　網次　紀洋　茂明　安久　知一　芳祐　昭紀　秀茂　光行　昭夫　啓吾　新直　網安　紀義　茂信　安昭　知ク　芳勝　昭實　秀郎　光一　昭雄　啓子　新三　網郎　紀郎　茂稔　安郎　知昭　芳博　昭保　秀郎　光實　昭郎

茨城
角田　中島　中村　平野　矢島　浅田　岡本　岡田　神田　菊地　条川　後藤　塩田　杉田　那須　平井　益田　増品　三塚　湯澤　横塚　新井　荒木　石川　上原　落合　角田　小野　小谷　山田　新勢　伊川　池田　飯島　新水　新井　新井　埼玉　安済　茂木　羽鳥　武井　鈴木　佐藤　小山　伊勢　石川　荒木　新井　横馬　湯澤　三品　増田　益田　平井　那須　田中　杉山　塩田　後藤　条川　菊地　神川　岡本　岡田　浅田　栃木　矢島　松田　平野　中村　中島　角田
直之　雄二　幸一　文智　省二　嘉郎　美之　宏直　忠勝　光央　伝吾　保郎　英司　挺六　雅雄　重一　富進　經之　方温　精次　郁男　直　一夫　武統　澄彦　久雄　利明　勝男　昔忠　欽郎　昭勝　甲一　昭夫　清子　郎尚　孝雄　政雄　憲仙　好隆　太郎　和男

群馬
栃木

永土寺常津丹田竹滝高高高髙関須鈴杉菅廣新白正島渋佐小桑栗菊川川家金恩小奥奥荻小岡大太大大大内薄入
石橋澤泉田　中澤澤畑橋沢木　田木本野末保川野田谷藤薗原原地村田弓保田沼山富野川　成田澤保江山衣江
辰隆英昭治　敏力昭　晃　庄　里善律　寿正元三恵多好力武　謙洋久正萬賢彬　龍光晴達利　　武　直岩繁
郎信俊亘男徹明夫二易郎彰吉慎吉雄夫茂男信春郎治平助冶次宏一吉郎矢蔵寿男博郎男志夫章饒博治浩子雄実

大楳宇植宇岩岩岩今稲稲市市出伊石石石石石池飯朱　弓山山玉山峯皆正堀細船福深廣日初野仁中中中中長長
内田美野井田崎井宮葉田東川水原林田田川井本森谷　田本内野崎尾本本田渕江田澤瀬高野村平村村平野島岡
輝良　　忠万高良賚由敏亀雄重春保孝和宰敏　盛真　浩岩一唯裕　義文　義正春欣　　知　善敏進且と
夫則博珪一寿明平三郎郎世一盛雄徳男郎敬子愈久人　司雄正夫康栄博哉弘信春二一正誠實治勝治之二重子格

野根額西難奈浪夏中中中冨富戸戸塚田高高高高高高髙杉末白下佐佐崎佐小小黒川上鎌門勝奥岡岡大大大大大太
明本田村波部川井村島江澤岡部頃原中山山野梨田田山吉政山藤木山伯林田瀬北高谷山又山本本橋橋野中中田
秀常昌　寿光康裕貞久　康幸　憲成賢友武重武三源　玄和甲富ひ忠ト　朝純　正鉄和　雄俊昌省収か良福
道示弘淳邦孝利輔三光仁之雄清一仁一二夫郎光郎二蕃妙克男夫子作子茂安造等典吾也博三章三三司ね夫郎穣

飯飯安有有有新新新綾阿浅阿秋秋赤青相相　梨米吉山山山山山森村武明緑松町増本宝布藤福福廣平平日春野能
田島藤村馬川井井井部部田津元葉井木部澤　本山元根崎口川井上藤圓川本田田間納木田嶋井瀬山田高山中智
雍　　政　信　健邦　泰　正一義英信一善　　義　　重重敏政　俊昭　良一好嘉徳　幸久方雍　道靖善力昌
子厚満男豊男裕一夫徳助正男仁孝夫雄正郎　寛郎忠猛藏松雄義始子二浩人男彦男一昭生郎幹熙茂廣可良子一

大大大大大大太大大大大大大遠遠海江江江内内宇植植植岩岩岩岩岩岩色入今今井稲伊伊市板石石石池池壱井
家穂穂穂野塚田塩沢草川内泉藤藤澤頭副尻田田美原田田本見瀬澤崎城摩江泉井上山藤藤川垣原井井田田岐川
義園孝利宣五五澄俊知健春孝哲紫善　保次太孝利道　和末義敬漸香正力康　五　英忠　裕　幸　正　二春静
胤井子武雄郎男夫夫久郎己義夫一雄勇郎雄郎吉夫行弘男治信子二二保夫介理二弘明夫潔彦正八康治実郎記男

腰木河河小小栗熊窪国楠草京木木木木北北北木菊川上神鎌門加加勝片片柏梶加鑰香海甲折小小小岡岡岡大
塚暮野野泉池原本田田瀬開野山村村村村薗島澤地崎村澤田馬藤藤見野桐木山嶋山川斐口野村倉本部田嵜山
守喜光暢完禮文房　　正省五正太　喜昭豊　藤　昌　　文将文浅賢隆和　義昭一　省龍蘭四猛久俊　幸隆
正雄揚夫司三平義隆宏淳三一義郎茂照正志昌男央彦明清雄義城二二司嘉薫孝男臣明吾三二郎夫吉久清平道

鈴鈴諏杉杉杉佐神新城勝少将庄下下清清渋渋渋志篠信志三佐佐佐佐佐笹佐佐桜坂斎小小小小小小小後後児小
木木佐山原田間保藤田谷　　司山出水水谷田江波原太賀五野藤藤藤沢目木木庭上藤村湊原松松林林藤藤玉杉
一音道勝清登　富　弘　　光敏　正昭鋭一正武弘正昭正芳嘉　和利善　　正公資澄武公嶺利達　光俊高聡
男吉郎春之男一男稔道保会会雄郎忍尚俊市信通郎明好夫一貞男穣直和郎正修基成郎生俊夫生光夫茂生夫明則

同天寺寺寺手坪角堤土辻辻塚長　玉谷谷田田田田田多田竹武竹竹滝滝滝高高高高高平曽曽瀬関須鈴鈴鈴
台　　　　　　　　　中
経山田田井島島折　田　　原　　置尾　中中中中中　田澤原田田内波澤　橋橋橋野田井　篠我島　山木木木
済　　　　　　　　　市
懇隊利俊俊丈茂幸昭八外奥　孝　忠　悦靖正永彰　龍昌虎輝五雄　勇俊正正昭　耕賢芳ナ睦龍志名晴俊崇
話　　　　　　　　　太　　衛
会会邦夫一夫彦輝司也文児正雄三侃男浩和信郎長門二成男和郎一登吉正美二典忠治一作ホ郎三郎子順夫文

原原林林林早濱花花長長橋野野能能野野根西西西成成名中中中中中長中長中中長長中長永鳥豊豊富戸戸富
　　谷谷　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　曽曽
　　川野見田川川本寄副瀬勢崎口木山村崎川富川執村村村村村嶺野塚根根島嶋島澤井海田泉安塚田樫
寿照陽安國　　重　知　　直輝忠義清東英　　光暢一　悌　武竹光　富隆康慶安富　　勝周志辰秀　　誠
満
夫寿一仁久正明一隆幸清清勉行雄典夫三洋一伸博男三雄肇次猛夫雄雲宏男二弘蔵治三精剛一一げ彦雄新謙治

深宮宮宮御三三三三丸松松松松松松松松松町町升増前古古古古布藤藤藤藤藤藤藤福福広廣広廣廣平平原原原
法施
山下下下川春屋澤浦谷本本永田下木川江浦田田本田囿屋畑川井谷田田田田澤黒井原島本野瀬嶋川松城田
明八忠宏芳　益由功定　栄　幸朝清正蘭登義乾修義利七昭一貞　満平弘貞信陸　茂き清恵秀文文照弘　桃武
三　士　三
敏郎夫一夫仁道之雄弘司郎太雄男男信子郎雄郎介晴治郎二郎方力恵郎道子雄夫忍俊ん政三雄武男久通宏介廣

足赤赤青神奈川渡渡渡和涌若吉吉吉吉吉吉吉吉横湯湯湯山山山山山山山山山山山山柳梁安役矢守森森森森百元茂村三
田
代柴崎木　辺邉辺田井林原永永永田田田森坂澤浅本本本田田田田口口際上　川田山部屋園尻下　島井木田好
可
定元正　　清悦正慎繁瑞安　為　俊和精幸一幾武卓せ律光達　　二昭　正英義　一廉安　　祐正明房
つ　太
正郎則香　隆壽次士一雄穂治貢之豊雄子文夫枝雄夫眞子爾胤雄勲昇郎郎薫雄典人明敏造男忠勇麟信男治保達
五

小河呉熊久近衣北川川川川金金甲小小小岡大大大大大内内宇岩岩岩岩岩今井伊伊市市市伊石石石池飯有天阿
野和
島本　谷保歩笠川村村田井子子斐原寺澤田瀬山曲槻倉山田井宮田下崎崎井上藤藤来川岡田村田川沢田井野部
健憲正　哲一勤甚　恵信正　敏正申　武文克達喜二　正一　　邦康淳理　忠　芳俊　　禮芳利利　包喜好
美　四　次　久
三恵男淳茂会二吉成子雄男寛夫夫三宏彦雄司夫郎郎馨一雄豊満弘雄彦治一望吾茂郎郎實詳二正男明立廣雄子

奈並鍋長中長中中中長永中中中永徳寺妻堤津塚中千谷高高高高副関関鈴鈴鈴菅末白清柴志笹斉斎古小小小小
里　明
良木島本村嶺林野根沼田田瀬島井田田鹿　田越馬久　階澤木尾島根口木木木原岡井水野岐路藤藤地林林林長
慶竹竜幹徳秀　芳正徳幸勝　　一忠隆嘉彦　朝幸民シ　啓典　静雅晋瞭久　道　　由玄次能正正正次興　啓
三　太　ゲ　一五
郎彦子郎男雄肇江忠郎夫武操實成成好兵男猛紀子男子勇三雄進雄美郎郎衛敏熙力健雄雄男也之夫雄雄孝勇一

八山森本望門宮三三三馬丸松松松町星星古藤藤藤藤藤深平平開平日秀秀菱原原原林早服羽野野野西西新鳴奈
巻県　橋月司本田澤澤渡山本土井田野野川本本田田井川林野　井野平嶋沼田田田　川部田地口口澤川倉神良
邦秀力　賢親忠治錬勲久直和　　速善清純松一　和一　克　　和潤幹　俊　太行靖尋七正増清栄哲順憲長保
三　晃
嘉臣男宏一徳弘男一人元治彦弘雄雄彦郎一彦孝武秀夫巌巳勇夫一雄定雄博郎平雅匡子二夫秀輔夫芳充和男

福　石　富　新
山森村藤野永駒落奥　森森濱西塚重澤小　吉山星平羽畑能中田関諏鈴坂坂小加大板　渡和吉横横結山山山
井　川　山　潟
岸　田田村山井合　本田田嶋本清田森　川口野山鳥山登島村川訪木爪詰池藤塚倉　辺才田澤井城田田下
慶武瑞浩純　正　文武芳與一徳壽正　春正　欣秀　欣正　　撰久千喜信　浩　照忠　茂
志
茂儀一悟三夫剛正則　次一一正郎男朗明　潛治男清一三保也夫徹宏昭力二弥佳衛治　郎誠学人康浩清昭幸

静　岐　長　山
秋　村松松花丹中棚田田澤古小黒久鎌大宇　柳根西中滝五小小小菊柄上太池　山守堀古広諏清影赤　山薮橋
岡　阜　野　梨
山　山原田村羽川橋中内田野竹木代倉林美　沢津村山沢味林林泉池沢村田田　西屋内屋瀬訪水山見　口内本
谷　佐
茂正昭龍　鎮主　　清一長　澄喜富　二晴久誠邦一稔清洋国芳貞瑞正　孝千　正長為　敏秀　忠　長
之　九　士
勇　智彦兄男等助斗清實健蔵三郎譲夫一夫　郎之宣一夫徳昌完平光樹蔵穂治　治尋保文利久保雄資　雄登生

愛
伊石赤　若米山山山山山増本本洞蓬古藤平日疋野鳥寺土津多芹鈴鈴鈴杉漣近小小小川金加岡大遠江内宇岩淡
知　比　宮　佐
藤原山　尾原村野下下崎田間田口生見塚岡野見口居田田川賀沢木木木山　藤本山谷口子藤本井藤藤野美田谷
銑金琢　芳　卓　善一重秀武　広錬哲温辰哲義剛輝直　文義信　震　郷徳　　玄　京一昭和重勝敏文高憲秀
一　太
一三磨　男明彦譲市助武雄美毅司二夫威夫丈弘一夫平裕郎明昭保也馨郎湛要茂二保三郎徳民平男夫一一夫一

三
中小久今伊石新阿　山山山山宮水丸本古深廣羽根西長中富戸丹谷高杉白篠坂坂小北加加勝尾尾長大大遠遠稲
重　河
北林村西藤川井形　本西田田坂野山田橋川瀬田木田坂川永田羽　須浦木原井井林原藤藤田関島田場内藤藤垣
宇　雅正四郁昭　政能治節義　嘉八茂周金英　　時重　光素　雪喜萬重旦聰奈光　和秀　貞宏敏喜十
久　美　代　三
衛郎登夫巳郎男雄　親夫男夫夫清市郎人一三男要静男彦桂雄康功枝義輔邦史昭子次宏男男基美郎一一郎皚栄
三

久北北川川川樫笠岡岡岡江右上上岩糸伊磯磯池尼相 大阪 米水松藤中富砂塩塩塩京川荻大太 京都 山山福平疋津 滋賀 西
田原山中村人崎木松山田田口近田田崎瀬藤部野上子根 田谷本田村森野見見貝都航友 口山谷田 本根本居田覇 尾
昭 忠 盛敏正澄ヨシ 宏晴三信三禮 龍鉄孝 和典 幸太三一正ス麗正光 俊 健敏梁之新三実 栄
夫武敬巌幸夫明子子豊喬洋郎雄郎三淳郎男市弘世男 信正郎郎郎起マ子平三会力雄修毅 雄史介市郎造雄 吉

小栗業川大大江今井井石池秋 兵庫 山安森宮三三松前星藤東般長橋中寺鶴辻辻田田田武竹瀧高相杉下澤酒雑小黒
嶌原天田山村村井原上川淵元 口井田崎浦宅沢田埜井井若谷本西田巻 中中尻田内 橋馬田野井井賀泉川
信 正 三哲茂奈四清昌ユキ泰 正松豊喜玄好孝哲清常伍 初芳九冨昇芳孝義三正悦英省吉太繁ふさ 嘉芳朋
勝巌文匡男哉夫治良郎史利子博 民男也郎洋美春勇滋男郎巌恵雄郎美郎雄郎男次文男雄光夫一三郎郎春子久代三美昇

小小岡宇 岡山 横丸布金石 島根 林太 鳥取 若川 和歌山 吉村松牧福樋林西中鳥辻白清向粕 奈良 三福福深野長冨都辰田竹高坂小小
野野本多 山原廣崎田 原田 林嶋 田上山 永口 垣村山屋石水川井 谷田井谷口川林築巳崎田畠本林寺
恒慎 直 鉄正茂 正繁 康里 治賢敏之 宗 芳幸 正富 富光寛林昌耕敏 泰俊 直
夫吾巌敬 機巧夫美夫 典市 弘美 正助夫徹雄茂男三博隆偲正一男隆 彦幸治三之一雄保造作達巌有稔之

田田田赤佐亀小岡 山口 山安道水堀平日原二西中中寺谷田田台佐河桑蒲岡入伊伊池東 広島 森虫水林服田高清佐岸梶
村中口梨川山田田 本岡井内 尾野 宮本村濱延口中中 藤野原田崎江藤藤田 明口 部口原水間久本原
誠尚成政典俊忠博 正幸圭三蓉久研幹 二好範 昭 きよか三道ヤ明 良利 豪秋 安茂伸幹武哲忠正恒津美矢
一武男人男雄義忠 人義次郎一郎男三彦丘十三之夫茂夫博清 六太子道明男一茂良光 茂松一彌志郎敏志和弥男

田武高杉佐々河川青 愛媛 山山山森平久野冨多田小北紙鎌岡朝 香川 三三林野武高小逢上 徳島 吉好吉山山無漏村藤原原徳津田
中田田野木村人木 本下崎 田詰沢永野路川谷田田田 村木 田田島山坂田 本富木本根田田元田 本田村
賢静弘富義敏明恒 久玉太 政義忠利信 倶恒八十覚安一 文 誠巳幹 耕 信秀育精秋正俊正義正常洋孝
悟雄之也廣夫美男 徳郎弘勝和明雄良弘視輔二一代輝 守之泰作広夫弘亘作 夫史三一男道夫明治昭夫子信

手手堤塚谷杉菅新白島志自在 重重佐笹佐々迫後倉久保草北神川川川加梶奥大牛市姉浅 福岡 吉森浜服利杉佐窪 高知 松名永
塚島 田口谷原開井崎波丸松松藤富木 藤元田刈橋田鍋崎井藤原平神島場川野 村脇田部根田田添 浦本野
博勝益征茂忠道崇 昭庫源正正公澤博 喜美尚正孝正貞栄美保貞次正 正敏貞真 敏三義嘉洋陽一寅豊 栄時博
文喜角二海治之司彰謙弘一吉彦典夫人文明子美一彦喜二一子美男人茂信司隆照 彦男文之一郎夫子 一也一

山本満松松松原中柴伊赤 長崎 山山宮前福福菅紫近岸貝尾 佐賀 吉大山山山山山安森村三丸松松平原林濱秦新中中中
口山井永尾尾口島田藤木 中田崎谷元田原村藤川原形 柳和口口口口内河内 上井田永尾松 田 名山村田
博彰録行 茂静忠富保 拓達三八禮一 春啓一 多正 きよ 芳宗東照昭康可トシ 孝俊義 照明善秀正啓利昭俊
純亨郎雄久雄彦雄彦昭 潤郎郎郎郎勲生介馬馨守夫 子昇丸之二夫三彦成子昭雄時弘雄治信逸育祐幸典夫

池宮崎田 柳井深 身南堀藤福仲宗根 鈴木 財津 久保 大田 出竹 伊田 石勢 生川 秋野 大分 広 山内 美作 牧沢 古岡 肱田 原田 早西 中川 谷島 高見 酒島 境野 小斐 河田 甲宿 内上 宇澤 池 新 熊本 赤
初 雅一 玉茂保玄克甚一照正三 文英 勝 誠亮正義州奎敏武洋恒修源博忠詮
美 宣朔實彦雄光吉美吾臣寿一郎徹介雄 新博美智正雄彦平雄男三一男徳輔喜二郎太道信立

山東金大沖縄 脇米吉山之内峰松前二間瀬福平萩中田黒木亀内鹿児島 宮宮長谷川中飛竹川河井江内
内門城城 丸丸田守山田瀬田瀬原村中木房井山 脇田村松内野田尻村
昌 重 孝要次郎長一郎素貴芳 国 一健三ト範 武武 宗典次次憲 周さ
和弘登判 志郎明雄正洋郎充郎一郎ミ男実雄保 明男男郎夫周平と瑛豊

尚、目標を超えた額は、今後の観音堂内外の維持管理費等に充当させて頂きますので御了承願います。